SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成27年度指定
スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書
第５年次

令和２年３月

新潟県立国際情報高等学校
Niigata Prefectural Kokusai Joho High School

巻　頭　言

平成27年度、文部科学省からＳＧＨ（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受け、５年目最終年となりました。本校は、『【雪国＊米どころ＊魚沼】の世界発信を通じた人材育成』という構想のもと、ふるさとへの愛着と誇りを胸に、地域の課題をグローバルな視点で考え、それを世界の課題と結びつけ発信することができる、将来のグローバルリーダーを育てることを目指しています。

私が以前教諭として勤務していたときは、新進気鋭の進学校として、大学入試で成果を出すことに特に重点を置いて指導してきました。一方で、生徒は学校と自宅あるいは寮との行き来の繰り返しで、地域の皆様との接点並びに大学卒業後の社会人としての素養の育成を見据えた具体的な活動という点において課題がありました。

その課題の解決に向けて大きく前進する契機となったのがこのＳＧＨです。毎週木曜日の「スーパーグローバル国際」及び「スーパーグローバル情報」の学校設定科目等の時間を使い、愛・南魚沼みらい塾を始めとする地元の有識者の皆さんや国際大学の学生の皆さんが幾度となく来校され、助言をしてくださいました。生徒は、国内の大学等に進学する者もいれば、海外大学進学コースに在籍して、世界の大学に進学する者もいます。共通して言えることは、ＳＧＨ活動に取り組んだ生徒は、本校が立地する南魚沼の課題や魅力を体現しているということです。

令和元年11月26日（火）、２月に予定していた第70回南魚沼市雪まつりに向けて、１年生のグループが、南魚沼市役所を訪れ、林茂男南魚沼市長に対して企画の提案をしました。現２年生が昨年度、同まつりに携わらせていただいたことなどにより、来場者が増えたということを、主催者の方から聞いている１年生は、高校生がデザインした花火や気球を上げる、キャンドルによるイルミネーションを行うなど、昨年にはない具体案を練りました。

ＳＧＨ活動等で培われた、他者を気遣う気持ちも、年々強くなり、令和２年２月末現在でボランティア活動に参加した本校生徒の人数が今年は延べ100人となりました。本校のボランティア活動は、ユネスコ部や海外大学進学コースの生徒が牽引してきましたが、他の生徒にも確実に広がっています。ボランティア活動については、生徒には「人のためではなく自分のため」という視点で奨励していますが、地元への恩返しという点でも評価していただけるものと思っています。また、英語力の上昇という点では、平成26年度から平成30年度の５年間で、英検２級以上取得率は、32.0％から14.2ポイント上昇し46.2％になりました。

令和元年度、本校のＳＧＨ課及びＳＧＨ推進委員会が文部科学大臣優秀教職員組織として表彰されました。受賞理由は「地域との連携・協働を進め、結果を伴う開かれた教育課程を実現した」というものです。これもひとえに、生徒諸君の弛まぬ努力や本校の諸活動に協力してくださる保護者や地域の皆様のお陰です。心から感謝申し上げます。

ＳＧＨ事業の推進にあたり、県教育庁高等学校教育課指導第１係石橋弘光副参事指導主事から御指導をいただくとともに、運営指導委員の新潟大学教授桑原聡様、長岡技術科学大学副学長中出文平様、県立大学国際交流センター長石井玲子様、東海大学国際教育センター教授長沼君主様、県教育庁文化行政課参与吉田博様並びに南魚沼市教育委員会平賀重朗様を初め関係各位から、御協力を賜りました。御礼申し上げます。

本報告書は令和２年３月までの１年間の研究成果を、本校ＳＧＨ課及びＳＧＨ推進委員の教職員が中心になって作成したものです。いささかでも県内外の各校の取組の参考になれば幸いです。御一読いただき御助言等賜りたくお願い申し上げます。

令和２年３月

新潟県立国際情報高等学校長
佐藤　一彦

目　次

令和元年度 SGH 研究開発完了報告書.....1
実施報告書
第１章　本校の概要.....21
第２章　本校のＳＧＨ構想.....27
第３章　令和元年度研究開発実施計画.....31
第４章　研究開発の内容.....34
Ⅰ　１年生（28 期生）の取組
１　国際情報クリティカルシンキングプログラム（ＫＪ-ＣＴ）
２　魚沼学①
Ⅱ　２年生（27 期生）の取組
１　海外研修
２　魚沼学②
Ⅲ　３年生（26 期生)の取組
１　魚沼学②
Ⅳ　その他
１　各種講演会
２　勤労体験学習
３　他校との交流・各種研修・発表会等への参加
４　各種コンテスト・大会への参加
５　グローバルキャリア講座
６　留学生の派遣と受け入れ

関係資料.....69
１　教育課程表
２　運営指導委員会の記録
３　視察先一覧
４　新聞報道
５　ＳＧＨ通信
６　教員アンケート

生徒成果物.....95
１　ＫＪ-ＣＴプレゼンテーション
２　魚沼学②プレゼンテーション
３　魚沼学②英語論文

研究開発資料.....111
スーパーグローバルハイスクールの活動を通じてのグローバル人材育成

（別紙様式３）

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　新潟県新潟市中央区新光町４番地１
管理機関名　新潟県教育委員会
代表者名　　稲荷　善之　　印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

平成 31 年４月１日（契約締結日）～令和２年３月 31 日

２　指定校名

学校名　　新潟県立国際情報高等学校

学校長名　佐藤　一彦

３　研究開発名

雪国＊米どころ＊魚沼の世界発信を通じた人材育成　～浦佐から世界へ～

４　研究開発概要

国際文化科，情報科学科を設置する専門高校としての教育を土台に，雪国で米どころでもある地元魚沼の魅力を世界に発信しながら，スーパーグローバル大学の国際大学・明治大学との連携を通じて，地域が抱える課題，さらには関連する世界の地域課題について，グローバルな視点から考察・提案できる人材の育成を目指す。

具体的には，１年生の前期に行う国際情報クリティカルシンキングプログラム（ＫＪ－ＣＴ）で批判的思考やプレゼンテーション能力等の技能を習得する。１年生の後期に行う魚沼学①では，専門家による講義を受けた後，グループに分かれて魚沼の現状及び課題を探究する。１年生の３月に実施する海外研修では魚沼学①の成果を英語プレゼンテーションにまとめ，現地の高校生や大学生に発表する。２年生では魚沼地域の課題についてより深く探究し，地域課題の解決策を考える魚沼学②を行う。最終的には，魚沼の地域課題に関連する世界の地域課題について考察し，英語論文にまとめる。

5　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程										
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会	○							○		○	

（2）実績の説明（敬称略）

①第１回ＳＧＨ運営指導委員会（令和元年５月 21 日実施）における主な意見

[桑原]

・切実さに欠ける。問題を本気で解決したいという気持ちがもっと欲しい。

・グループごとにテーマは違っても，結果的に全体として１つの像が見えるようにしたい。

代表発表者への助言

【上杉 KJ プロジェクト】

・米沢興譲館高校との共通の問題を考える。互いに発展させていき，さらに，KJ と似た他の町や学校と意見をぶつけ共有する。

・日本中に KJ（魚沼）と同じ問題を抱えている高校はあることが予想されるので，もっとネットワークを繋げることが必要。

【雪祭り】

・雪祭り単発で終わらせるのではなく，魚沼開催のイベント全体に関わっていきたい。最終的には人口問題の解決に向ける。

【ジェンダーロール】

・絵本ではなく，自らが関わって下の世代に見せる。

・グループに男子を入れることで，また違う意見が生まれるかも。

【Water】

・問いが水問題と洗剤開発の２つにわかれて，洗剤開発の方に流れてしまっている。

・水の問題は世界の問題であり，深く調べることでグローバル化の問題点も見えてくる。

【英語発表】

・英語はとても素晴らしかった。

・切実さに欠ける。自分が魚沼に骨をうずめるつもりで考えるともっと変わってくるはず

[吉田]

・発表が上手（年々上手になっている）。しかし，それはきれいに終わらせよう，完結させようとしすぎてしまっているためなのか。

・きれいじゃないとうまく発表できないという雰囲気。

・３年で完結させる必要はない。次の代に引き継いでいくことを意識する。高校３年間で疑問を持ち，解決できなくても大学などで学ぶ。その成果を地元に還元してほしい。

・わからなくてもいい，苦しんで考える経験が必要。

・未解決のままでも悪くない。疑問を与えて終わり，興味関心に繋げる。

・生徒をグローバルリーダーへ（では，先生はどのくらいグローバルなのか。）

・SGH の活動が終わってから（来年度以降）何ができるかが大事である。

[平賀]

・世界に出たときに地元を語れない人は認められない。
・雪祭りは，企画から参加できたことが良かった。ともに進めることで，問題点や成果を感じることができ，良い経験となっただろう。
・地域のことを，良いことも悪いこともたくさん知った上で，世界に羽ばたいて欲しい。
・この活動を５年で終わりにするのではなく，継続して地元に参加して欲しい。次の学年へと引き継いでいってほしい。
・上杉 KJ プロジェクトのように，歴史を掘り下げることで，その先が見えてくることがあるから，生徒にはさらに勉強していってもらいたい。

②第２回ＳＧＨ運営指導委員会（令和元年 12 月 24 日実施）における主な意見
[石井]
・起承転結がはっきりしていない。骨組みをもっとしっかりするべきである。日本語で考えることも大切で，研究の目的は日本語でもいいのではないか。
・ターゲットがぶれているため，全体に大きなことを言っている感じがある。
・スライドの作り方は改善が必要。文章を入れすぎているので，キーワードにまとめる。発表の基本的なことをしっかりと学ぶ。出典を明確にしてほしい。
・英語は高校１年生にしては頑張っている。しかしピンポイントすぎてメインが分かりにくい。
[長沼]
・ゴールが何なのか分かりにくい。プレゼン力と探究力どちらを鍛えるのか。
・ルーブリックでどういう力を培いたいのか。主体性，論理性，SDGs とのつながりを意識する。
・ルーブリックの項目は狙っているのはそれぞれ何なのか。
・クラスとしてのサポートがあるクラスと距離があるクラスがある。協働性を培う。発表者だけではなく，聞き手の育成も必要である。
・ルーブリックは発表だけで使っているのか？それとも活動の過程でも使っているのか？
　→本日使用したものは発表用。発表以外では，学びシート（ポートフォリオ）を使い，評価もしている。（学校）
・テーマ的なポイントが見えづらいグループもある。
・雪祭りなど先輩から引き継いでいるものがとても良い。
・学びのコミュニティーをどのように作っているか？
　→１年から２年に進級する際にグループを変えることで学びの共有をしている。（学校）
・全体としての深まりが今後の課題である。
[吉田]
・昨年度も提案したが，テーマが偏っているのに内容が深まっていない。しかし，教育的観点から見て先生方はどの生徒にも同じ苦労をさせたいと考えているかもしれない。ここは，教員が何を目的に教育しているかにも関わってくる。
・国際文化科と情報科学科の差（違い）を感じないが，これでいいのか？
・今回の発表は内容よりも英語がメインと感じたが，原稿ばかり見ているなどプレゼン技術としては未熟である。自分も分かっていない英語を使っていた。
・どうやって子どもたちに背伸びさせるかが教育である。教員はそれをいかにサポートできるかが大切。生徒も教員も英検２級を持っていれば背伸びしやすい。その点で国際情報高校では上手に背伸びをさせている。時にはジャンプもさせている。

・英語科以外の教員の取り組みが特筆すべき点である。
・他校では見られない学校全体での取り組み。先生方のレベルもアップしてきている。
[石井]
・外部とのつながりを活用して実践を発展させてほしい。雪祭りや池田美術館との取り組みなど，頭の中だけで終わらせない物を継続してほしい。
・他の国の事例を調べることによって視野を広げさせ，そこから深めていく。
[長沼]
・自己関与をいかに高めるかが課題。
・子どもたちに迎合しすぎなくてもいいのでは？教員が面白いと思うことをシェアしてみては。
・教員の姿を共有する場。
・継続性とともに深めていく。
・教員も参加しながら学ぶ。
・ポートフォリオを貯めて終わりにしない。よりアクティブなポートフォリオを。良いモデルをシェアするなど，生徒同士で吸収しあう。
[吉田]
・予算があったからやれたことは何だったのかを精査する。
・県から予算が出なかったらどうするのか。SGH 指定の５年間で培ったものを活用して６年目を過ごす。この５年間で教員も育っているはずだし，考え方も変わっているはずである。
・今後異動する先生方にも，同じ様なコンセプトを持って人材育成していってほしい。

③第３回ＳＧＨ運営指導委員会（令和２年２月６日実施）における主な意見
・面白そうなテーマで，生徒自身が楽しんでいることが感じられ，それがよく伝わってきた。発表に表れていた。目標が自分で立てやすいことも大事である。
・1 学年のあるチームの就学率など，調査が大ざっぱだと感じた。gender のチームも日本ともう１つの国との比較があったりすると良い。ヨーロッパはもう gender という言葉すら使わなくなってきている。見方が日本的だと感じた。
・調査や結果も，もう少し膨らませると良い。特に１年生はやっていることは素晴らしいが，あともう少し欲しい。
・スライドや英語も上手だが，調べ方や結果のまとめが少し残念だ。
・大人が発見できないこと，高校生だからこそのユニークなものがあるといい。型にはまってしまっている感じがした。
・四方さんのような方のお話を高校生のうちから聞けることは素晴らしい。実体験からの話も入っており，このような機会は貴重だ。
・SDGs を核にしている取り組みは 2 年前と比べると進歩している。
・英語による発表は地域の方に知ってもらう目的なら適さない。英語はかなり練習していると思うが，発表のための練習に時間を費やすことはナンセンスだ。今はダブルスクリーンで 2 つの言語を同時に出すことも簡単にできる。
・エバンストン生に対して話すのなら，魚沼についてもっと基礎的な知識を入れなければならない。
・論理の飛躍がないようにするといい。事実の示し方が乱暴。識字率の低さは，紛争が原因の場合もある。

・高校生を大人扱いした方がいい。知識が足りないなら入れ，考え方を教えるように。論理的に物事が考えられるように育てる。gender の話をしているのは日本位かもしれない。今はminority の話の方にシフトしている。
・Olympicnic は英語と中国語が強みなら，南魚沼に本当に関連があるのか。上杉 KJ プロジェクトに関しては，米沢は大きい町だが，南魚沼は小さい。関連づけられるのか。バスツアーの行程にもなぜか会津が入っている。
・発表したチームのものは，生徒の活動が点だけで終わらずに，次のアクションへと繋がっているところが良い。そして，アクションをまだ起こしていない生徒たちには，他のチームのアクションの経験が共有されることが大切である。
・縦のつながりはできているか。グローバル人材という時に，世界で活躍しているような有名人ではなくても，身近な人をロールモデルにして，「こんなふうになりたい」という繋がりができると良い。
・卒業して地元から別の場所へ出た生徒たちが，大人になってから地元へ帰ってきて地元を盛り上げたり，帰って来なくても自分が生活してる場で地元を PR できるようになっていく。
・横と縦のつながり，特に縦がどう連携していくかが鍵となる。SDGs のフレームワークを使えば共有しやすい。「発想する」「学ぶ」「広げる」流れが共有できると良い。
・データの見方でも，協働性の向上でも良いが，柱となるような「発達」とその指導方法が５年間の集大成として残ると良い。
・（英語との関わりについて）外の視点を取り入れるのか，中の視点を発信するのかによる。無理矢理英語にする必要はないが，外の視点を取り入れるためにリソースとして利用する情報や，気づきが英語によるものであったりする。ツールとしての英語の強みが感じられるようにするといい。
・子どもたちの多様な視点には驚かされる。行政として，地域の課題解決に入ってもらいたい程だ。例えば現在では雪祭りや，地域の小学生に算数を教えるボランティアに生徒が関わっていて頑張ってくれていることが嬉しい。机上で学ぶのも大切だが，実践してみることも大切である。
・ステージ発表のチームのデータでは，（正しいデータかどうか）気になる数字もあった。データの掘り下げなど，より実践的にまとめられると良い。
・プレゼンテーション力や，チームで取り組むことに必要なコミュニケーション力はアップしていると感じる。グローバル人材を育てるには，英語を使う場や発表する場を作ることが大切であると思う。今後も地域に根ざした学校として地域と一緒に邁進してもらいたい。
・中間発表も見てきたが，学校をあげて取り組んでいることが感じられる。文科省表彰も喜ばしいことである。敬意を表する。
・創立当初から今まで，立派な伝統が創られている。職員も心を一つにして子供たちのためにやっている。そして子供たちもそれに応えている。先生方から「教わる」のではなく，「一緒に」または「自分たちで」やろうとしている。「学ぶこと」について，５年間でこの学校ならではの伝統を創ってきた。それを大切にして欲しい。
・imprinting という言葉があるが，生徒も先生も「（KJ の）高校生はこういうものだ」という伝統ができている。先生方の大きな力があったと思う。他の学校と違うこの学校での imprinting がある。その中で子供たちが育っている。教師集団にはこれからも子どもたちのために手抜きせず，空気を創っていってもらいたい。

6　研究開発の実績

（1）実施日程

業務項目	実施期間（契約日～令和２年３月 31 日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ＫＪクリティカルシンキングプログラム	○	○	○	○	○	○						
業務項目	実施期間（契約日～平成 31 年３月 29 日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
魚沼学①							○	○	○	○	○	○
海外研修・フィールドワーク					○							○
魚沼学②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
報告会		○										
中間発表会						○			○	○		
最終報告会											○	

（2）実績の説明

【国際情報クリティカルシンキングプログラム（ＫＪ－ＣＴ）】

実施対象：１年生全員

実施時期：１年生前期（４月～９月）

内容　　：地元企業から与えられた課題について解決策を考え，提案する活動を行った。その過程で批判的思考やプレゼンテーション能力などの技能を習得した。具体的な活動は以下のとおりである。

・地域にはどんな企業があるのか，また自分たちの身の回りの企業がどのようなことをしているのかを調べ，プレゼンテーションを行った。

・提携大学である国際大学において地元企業に関するアンケート調査を実施した。

・東京訪問においてグローバル企業や官公庁を訪問し，国際的な活躍について学んだ。

・東京訪問において提携大学である明治大学を訪問し，地域創生の意義やプレゼンテーションに関する技法を学んだ。

・地域の課題に関するプレゼンテーションを行い，生徒および職員から批評・評価を受けた。

【魚沼学①】

実施対象：１年生全員

実施時期：１年生後期（10 月～３月）

内　　容：専門家による講義を受けた後，グループに分かれて魚沼の現状及び課題を探究する活動を行った。現状や課題を明確にするために，プレゼンテーションを行い，南魚沼

市役所職員や地元の実務家より指導・アドバイスを受けた。具体的な活動は以下のとおりである。

・ブレインストーミングを通じて課題設定を行い，プロジェクトのテーマを決めた。
・フィールドワークを通じて，地元の現状と課題についての基礎知識を得た。
・２年生と合同発表会を行うことで，２年生の先行研究をもとに自身の課題解決の参考とした。
・情報収集・調査を行い，プロジェクトの内容を深めた。
・プレゼンテーションソフトを活用し，発表原稿を作成した。
・中間発表を実施し，以下の方々から指導・助言を受けた。
　南魚沼市役所　雪国青年会議所　上越教育大学教授　上越教育大学学生　市内実務家
・英語による発表原稿を作成し，国際大学の留学生からプレゼンテーション指導を受けた。

【海外研修・フィールドワーク】
実施対象：１年生生徒希望者（１年生生徒の約７割）
実施時期：１年生３月下旬の約 10 日間
→　次年度へ延期（新型コロナウイルスの感染拡大により）
内　　容：ベトナム，アメリカ合衆国，オーストラリアにおいて姉妹校を含む現地の高校生・大学生に対し，地域の文化・産業，自身の学校生活などについて，英語で発信し，フィードバックを得る。また，４月には海外研修の振り返りを行うとともに，全校生徒に向けて代表生徒による海外研修報告会を実施する。概要は以下のとおりである。

＜ベトナム＞
　期間：令和２年３月 17 日（火）～26 日（木）　10 日間
　参加人数：生徒 13 人，引率教員２人
　主な訪問先：ロン・リバイス，NST，Vietnam-Japan Student Club
＜アメリカ（シカゴ）＞
　期間：令和２年３月 17 日（火）～25 日（水）　９日間
　参加人数：生徒 25 人，引率教員２人
　主な訪問先：エバンストン高校（姉妹校），ヤング高校
＜オーストラリア（シドニー）＞
　期間：令和２年３月 16 日（月）～26 日（木）　11 日間
　参加人数：生徒 45 人，引率教員２人
　主な訪問先：リチャードジョンソン・アングリカン高校，
　　シェルハーバー・アングリカン高校

【魚沼学②】
実施対象：２，３年生全員
実施時期：２年生４月～３月，３年生４月～６月
内　　容：魚沼の地域課題を国連が出している「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」と結びつけ，グローバルな社会課題・ビジネス課題として広い視野で捉える。また，その解決を考え，提案する活動を行う。２年生後半からは，世界の地域課題や現代社会の課題から個人テーマを設定し，英語で論文を作成する。具体的な活動は以下のとお

りである。

・魚沼の魅力や課題についてブレインストーミングを行い，共通点を見つけてグループ作成を行った。
・解決課題を明確にし，対策を考え，課題と解決策をＳＤＧｓと結びつけた。
・東北芸術工科大学を訪問し，地域支援の専門家である大学教員から地域課題解決の意義や地域支援のあり方について学んだ。また魚沼の地域課題を解決するためのビジネスプランに対してグループごとに指導・助言を頂いた。
・各グループが考えた課題解決案に関わる地元企業・団体を訪問するフィールドワークを実施し，魚沼についてより深く学ぶとともに，課題解決案についてアドバイスをもらった。
・日本政策金融公庫職員による講義を通して，ビジネスアイデアの発想法やビジネスプランの作成方法を学んだ。
・中間発表会に向けプレゼンテーションやポスターを作成するなど，発表に向けた準備作業を行った。
・課題ごとに解決策の中間発表を行い，相互評価を行った。
・成果発表会後は世界の地域課題や現代の社会課題に関する英語論文の作成に関するレクチャーを実施し，英語論文作成を行った。（３年生は６月に完成，２年生は作成中）

【報告会】

５月 21 日（火）に２年生代表グループによる魚沼学②の進捗状況発表，及び３年生の代表者による英語論文の発表を行った。報告会では２年生が中心となって実行委員会を結成し，３年生と協力して企画・運営に携わった。概要は以下の通りである。

内　　容：第１部　東海東京フィナンシャル・ホールディングス顧問
　　日下部　裕美子　氏による基調講演
　　第２部　生徒活動報告
　　代表者によるプレゼンテーションと英語論文発表
　　指導・講評　新潟大学　桑原　聡教授
　　運営指導委員会
参加人数：学校関係者７人，企業・団体関係者３人，保護者 15 人，運営指導委員３人

【中間発表】

９月 10 日（火）に中間発表会を行い，教室ごとに互いのプレゼンテーションを見合い，質疑・応答や相互にアドバイスをした。フィールドワークで訪問した際の地元企業の担当者も来校し，指導・助言を行った。１月 22 日（水）にも中間発表を行い，最終報告会に向けての最終確認を行った。

【最終報告会】

２月６日（木）に実施したＳＧＨ最終報告会において，１・２年生の魚沼学の成果を英語と日本語で発表した。概要は以下のとおりである。

内　　容：午前の部　１・２学年合同ポスターセッション
　　午後の部　生徒によるＳＧＨ活動５年間の振り返り

外務省大臣官房総務課地方連携推進室長　四方明子 氏による基調講演
１・２年生代表者によるプレゼンテーション
指導・講評　長岡技術科学大学　中出　文平　副学長
参加人数：学校関係者 10 人，企業・団体関係者 29 人，保護者 18 人，運営指導委員５人

7　目標の進捗状況，成果，評価

①評価手法の開発

昨年度を踏まえ，評価軸の作成という観点から生徒の変容を客観的に評価することを目標とした。引き続き「ポートフォリオ」を使用した。さらに，（株）ベネッセコーポレーションが行っている「ＧＰＳアカデミック」を本年度も行うことで，経年変化を見ることができた。この２つの結果の相関性を見ることにより，より客観的な評価軸の作成に努めた。また，本年度も１年生が東京研修に行く前と行った後の内面変化に焦点をあてた評価を試みた。この結果よりＳＧＨ活動の中に自らのキャリアについて考える契機になることが分かった。生徒の内面変化とその成長にＳＧＨ活動が大きく関わっている結果となった。

②地域との連携

昨年度から引き続き，「地域との連携」をめざしてさまざまな取り組みを行ってきた。構想調書の【仮説２】にあるように生徒が地域に対する理解を深め，地域への愛着と誇りを高めるためには，より地域との密な連携が必要だと考えた。そこで，今年度もフィールドワーク先のマッチング，魚沼学の講師紹介等を「一般社団法人 愛・南魚沼みらい塾」に依頼し，南魚連携を図った。この法人は，南魚沼市が設立した南魚沼市復興支援センターが前身であり，南魚沼市（行政）と本校とのネットワーク構築に助力をいただいている。さらに本年度は，昨年度から行っている「南魚沼市雪祭り」への企画段階からの参画だけでなく，地域の美術館とも連携しながら地域課題の解決策を実際に実行に移すグループも現れ，今後，一層の連携が期待される。

③「解決策・計画の具体化」および「他者との交流」とその成果

昨年度からの課題はＳＧＨ活動で生まれた地域課題解決案をもっと具体的に実行する点であった。過去の経験から，各種コンテストに参加した生徒は，多くの高校生や他者と接し，「集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度」や「人間としての在り方生き方についての自覚を深め，自己を生かす能力を養う姿勢」について自覚することが分かった。本年度はその機会を増やし，達成感や自己肯定感を感じて自らを高めることができた生徒が増えた。以上，参加した生徒のポートフォリオからうかがい知ることができた。

8　５年間の研究開発を終えて

（１）教育課程の研究開発の状況について

①　学校設定科目の設置

１年生において，課題研究会を進めるうえで，指定２年目の平成 28 年度より学校設定科

目として国際文化科には「スーパーグローバル国際（SGK）」，情報科学科には「スーパーグローバル情報（SGJ）」という２科目を設置し，平成 29 年度より２年生においても「SGK」，「SGJ」の２科目を設置した。すでに多くの実施内容が含まれていた「総合的な学習の時間」だけを使って課題研究が困難な状況のもと，１年次に履修する「科学と人間生活」と「現代社会」と「社会と情報」の内容を課題研究に必要な課題設定や調査・研究・発表資料作成などの時間として確保した。また，２年次に履修する「家庭基礎」においては，本校が立地する南魚沼市が豊かな自然と食文化を誇るまちであり，そのまちが抱える課題をグローバルな視点から解決案を提案できる人材育成を目的としていることから，２単位 70 時間のうち 35 時間を「SGK」，「SGJ」にそれぞれ配当し課題研究にあてた。

② フィールドワーク

課題研究については，個人またはグループでテーマに関する論文を作成するという目標を掲げ，そのための「批判的論理的思考の育成」，「地域研究」などを入学時から複数の教員での指導を実践してきた。平成 28 年より課題テーマの深化を図るために，各テーマに沿った地元企業・地方自治体・大学などへのフィールドワークを行い，多大なフィードバックを得ることができた。その成果を各学年で行われる年２回の中間発表や，学校全体で行われる年２回の報告会において，地域の方々をお招きして成果を広く示すことができた。

③ 海外研修

本校は開校当初から１年生の３月に海外研修を行っている。姉妹校であるシカゴのエバンストン高校とは変わらぬ交流を続けているが，SGH 指定校を受けてからは，自分たちの課題研究の成果を発表したり，課題テーマに基づいたディスカッションを行うようになった。生徒は自らの研究を英訳する過程において，本校卒業生から英語添削指導を受けたり，国際大学の学生からは英語プレゼンの指導を行っていただいた。また，日本と同じくコメ文化圏であるアジアを海外研修の渡航先に加え，同様に課題研究のプレゼン等を行った。SGH 指定５年間で訪れたアジアの国はタイ・マレーシア・シンガポール・ベトナムである。

（２）高大接続の状況について

【本校の大学進学率】

	SGH 校指定前			SGH 校指定後	
	26 年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度
大学進学率	89.1%	90.1%	86.3%	82.8%	93.6%

【SGH 目標設定シート】

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 30 年度	令和元年度
国際化に重点を置く大学へ進学する割合	２５％	２５％	４３％	２７％

ほぼ９割の生徒が大学へ進学する本校であるが，進学先の大学については上で示した通り，「国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合」は SGH 指定後の初年度は大きな増加がみられる。令和元年度は推薦入試までの状況であり，最終的には昨年度並みと予想さ

れる。本校では従来，英語教育に重点を置くカリキュラムを持つ国際文化科を設置しているが，海外研修の充実や各種講演会を通じて情報科学科の生徒も含めて海外に目を向ける生徒が増加してきた。

学部別については，本校の課題研究の目的が「地域課題をグローバル視点で解決する」ことから，地域創生に関わる学部への進学者の増加も特徴的である。具体的には，新潟大学創生学部，和歌山大学観光学部などである。

【海外大学の合格数】

	SGH 校指定前		SGH 校指定後	
卒業年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
海外大学の合格数	２９校 （米，加）	１７校 （米，加）	４３校 （米，豪，英，チェコ）	３２校 （米，豪，加，洪）

さらに，本校は海外大学進学コースを平成 25 年より設置し，平成 27 年度にはじめて卒業生をだした。上記のとおり SGH 校指定前と後では海外大学の合格数は増加傾向にある。また，受験校の国を見ても初年度はアメリカ・カナダの 2 か国であったが，英語圏以外の受験も目立つようになってきた。受験に対するノウハウの蓄積と SGH 活動によって生徒のキャリア形成に影響を与えたと考えられる。

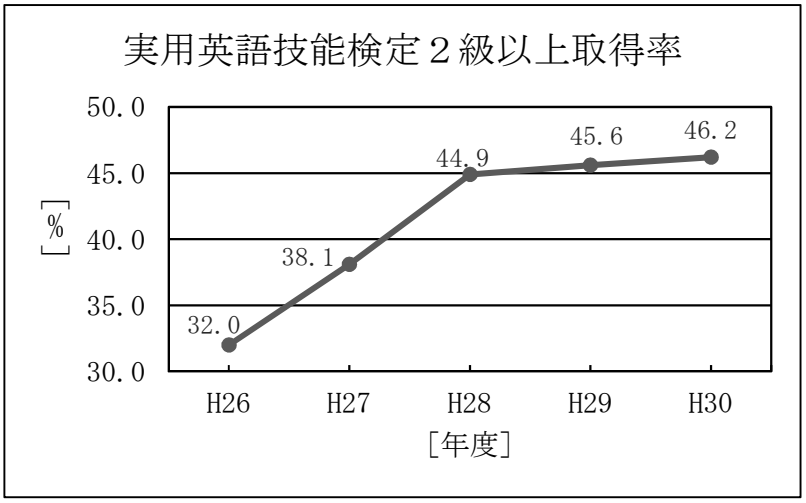
（３）生徒の変化について

【生徒対象アンケート】

以下の表は生徒対象に行ったアンケートで，SGH 校指定前と後での卒業生の回答結果である。この結果を受けて，生徒の変化について実際に生徒の SGH 活動の指導に当たった複数の職員から考察をもらった。重複する意見もあるが，その点が生徒の大きな変化であると考えられる。

【英検２級取得率の推移】（平成 26～30 年度）

年度（平成）	26	27 (SGH 指定年)	28	29	30
取得率（%）	32.0	38.1	44.9	45.6	46.2



ＳＧＨ活動に関するアンケート　肯定的な意見の割合（%）

	ＳＧＨ校	指定前	指定後		
	卒業年度	Ｈ28年	Ｈ29年	Ｈ30年	Ｒ１年
1	物事を比較したり、関連づけたりしながら考えることができる。	86.0	88.0	93.7	93.6
2	自分の考えを、具体的根拠をもって表現するすることができる	72.1	76.6	81.1	88.8
3	１つの情報ではなく複数の情報を元にいろいろな視点から考えることができる	79.1	86.3	89.5	81.1
4	課題にぶつかった時、何が一番問題なのかを整理することができる	81.4	76.6	80.0	89.6
5	自分の関心に基づいてテーマを決め、明確な問いを立てることができる	68.6	75.9	65.3	80.0
6	課題にぶつかった時、複数の解決策に目を向け、自分なりの解決策を見つけることができる	65.1	80.7	85.3	83.2
7	魚沼地域の魅力や課題を１つ挙げ、海外の方や外部の方に伝え質問することができる	39.6	67.7	83.2	76.0
8	海外や外部の方へ伝えた経験を通じて、魚沼地域の魅力に気付くことができる	33.7	76.6	82.1	81.6
9	世界の地域課題について、魚沼地域と関連させながら解決策を考えることができる	22.1	60.4	71.6	74.4
10	自分と異なる意見や価値観を持つ人を認めることができる	93.0	92.8	95.8	96.0
11	伝えたいテーマについて、プレゼンテーションソフトを用いながら英語で表現することができる	60.5	71.0	68.4	69.6
12	相手が英語で話した内容について、英語で自分の意見を伝えたり、質問したりすることができる	51.2	50.8	63.2	58.4
13	将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと思いますか	44.2	61.3	60.0	51.2
14	身近な地域社会を誇りに思いますか	74.4	76.6	82.1	79.2
15	将来地元の課題解決に貢献したいと思いますか	66.3	76.6	78.9	70.4

・６，７，８の回答から SGH 活動を通して，地域と世界との繋がりを意識したり，表現力を高めたりすることができた。一方で，11，12 の回答から英語を用いた発信や地域，国際社会への貢献意欲については，向上の余地が見られるため，今後の探究活動の課題で

ある。（２学年担当教諭）

・回答６の成長率が大きい。これはデータの比較はSGH活動の特徴的なものであり，通常授業にはあまりないため，力の伸びを感じたのではないかと考えられる。回答12の変化は微増であり，形式的な英語発表だけのスタイルだけでは，自分の意見を英語で伝える力をつけるのには物足りない。（２学年担当教諭）

・１～４の回答から，元々各教科（英語や保健など）で取り組んでいたので，思考力・判断力・表現力は高い水準を示している。７，８，９の結果から，地域を大切にする・愛着を持つ・地域に根差した人材の育成ができた。また，５，６からは課題解決能力の育成に影響を与えたことも伺える。以上のことから，これから待ち受けている社会における課題を解決する能力を持つ生徒が育っていると考えられる。（２学年担当教諭）

・１～３から，複数の分野の研究を通じて，横断的な視点から考察できる能力がついてきていて，自らの意見を論理的に伝える方法が身についている。13 から，SGH 活動を通じて最適な課題に触れたことで，留学の意識が高まったのではないか。グループ活動をメインで行ってきたことで，多くの意見に触れる機会を持ち，多角的な視点を持てるようになった。その結果６の回答のように，自分なりの考えを持てるようになったと言える。（１学年担当教諭）

・回答５，６が上昇していることから，創造力・課題解決能力といった，豊かに生きていくのに必要な力が伸びている。SGH指定前は，そもそも魚沼地域について考える機会がなかったが，SGH活動を通じて，ローカルな視点が醸成され，地元愛も育まれている。（３学年担当教諭）

（４）教師の変化について

【教職員アンケート】

	肯定的	否定的
本校のSGHの取組は生徒の論理的思考力の向上に効果がある。	80%	20%
本校のSGHの取組は生徒の分析的思考力の向上に効果がある。	80%	20%
本校のSGHの取組は生徒の創造的思考力の向上に効果がある。	80%	20%

教職員対象に行ったアンケートから，生徒に身につけさせたい３つの技能（論理的・分析的・創造的思考力）はSGH事業が効果的だと考えている教員が多数を占めていることが分かる。このように生徒の能力向上を実感できることから，以下のように教師の変化が見られた。

	肯定的な意見の割合		
年度	H29年	H30年	R1年
SGH事業によって学校全体の雰囲気に変化があった。	52%	74%	88%
SGH事業によって教科授業の内容・方法に変化が生じた。	46%	32%	63%
SGH事業によって教育観の変化が生じた。	62%	68%	80%

SGH事業を肯定的に捉える職員は年々増加し，生徒に身につけさせたい技能を意識した

授業改善も進み，教師自身の教育観にも大きな影響を与えていることは，大きな意義がある事と考える。

（以下，教職員アンケートの自由記述欄より）

・来年度以降も探究活動を通して，生徒，教員がともに成長していければいいなと思います。

・SGH 事業は，どんな効果があったのかを，しっかりと検証する必要があると思います。

・SGH の取組を通じて大人でも答えが出せない，正解が１つとは限らない諸問題に対して，生徒と共に考えを深め，既存の知識を学ぶことで，私自身も成長することができた。このことは学校での教育活動における様々な場面で生徒に還元できるものと考えている。

（５）学校における他の要素の変化について（授業，保護者等）

① 授業の変化

SGH 校指定後，授業の ICT 化を目指して，ハード面では，平成 29 年度には３学年の教室に，平成 30 年度には１,２学年の教室に短焦点天吊り型プロジェクターを設置し，令和元年度には特別教室の一部にも順次導入した。また，平成 28 年度から校内にタブレットを 20 台以上常備している。ソフト面では，平成 28 年度入学生から教育支援アプリ「Classi」に加入し，ポートフォリオの蓄積だけでなく，課題研究や通常授業において活用をしている。具体的には Classi のグループ機能を使って，生徒だけでなくアカウントを卒業生や地域の協力者にも配布することでインターネット上で情報の共有・伝達を行えるようにした。

② 保護者・地域の変化

保護者の変化を測るアンケート等は行っておらず，具体的な数値で検証することはできない。本校では創立以来 PTA 活動に力を注ぎ，PTA 総会や，各地区や各学年で行われる PTA の会合の出席率は約９割である。この場を用いて，SGH 事業の理念・進捗状況を随時発信してきたことから，保護者からは十分な理解を得られていると考えている。

また，地域においては，南魚沼市が設立した南魚沼市復興支援センターが前進である，「一般社団法人 愛・南魚沼みらい塾」が平成 29 年に設立され，本校と地域のネットワーク構築に助力をいただいている。それにより，本校の SGH 事業を理解してくれる地域・企業の数も増え，フィールドワーク協力数も年々増加傾向にある。

（６）課題や問題点について

【教職員アンケート】

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	思わない	わからない
SGH 事業の業務について十分に関わっている。	9%	41%	38%	9%	3%
SGH 事業に係る教師の多忙が改善された。	12%	9%	29%	32%	18%

① 成果の継承と発展

上記のアンケートの「SGH 事業の業務について十分に関わっている」において，肯定

的と否定的な回答が同じ割合であった。これは本校の平均在職期間が 4.2 年（平成 28 年度から 30 年度，管理職・講師は除く）と短いことに起因するものと思われる。５年前に本校で SGH 事業が開始された際の経緯や当時の状況を知る職員は 33 名中８名（24%）である。すなわち現在の職員の８割近くは，本校に赴任した時にはすでに SGH 事業が存在していたことになる。特にここ３年間の赴任した教諭は 33 名中 16 名（48.5%）であり，SGH 事業がある程度軌道にのった以降しか知らない教諭が５割近いというのが現状である。以上の事から，SGH 事業の財産をどのようにして次世代に継承し，発展させていくのかも，本校の大きな課題である。

② 担当教員の過度な負担について

「SGH 事業の業務について十分に関わっている」と感じていない職員が半数を占めることから，「SGH 事業に係る教師の多忙化が改善された」という質問に対して，８割の教員が否定的な回答があり，一部の教員に過度な負担が集中していることが分かる。本校では課題研究はグループ単位で行い，すべての教員が２～３グループの指導を担当することで，可能な限り全員で関わるようにし，SGH 課だけでなく，SGH 推進委員を組織して，役割を分担しながら事業を進めているにも関わらず，上記の結果となったことを受け，よりよい校内組織を構築していく必要がある。

（７）今後の持続可能性について

① 課題研究の継続

SGH 事業が終了後も課題研究は継続する。現在，文部科学省が進める「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の研究指定校を目指しているが，指定の如何に関わらず，令和元年 10 月に立ち上がった「未来の人材創出コンソーシアム」に継続加入して，地域の方々の協力を得ながら，グローカルな視点を持って地域を支えるリーダーの育成するための，課題研究を軸としたプログラムを実践していく。

② フィールドワーク

前述のように，平成 29 年に設立された「一般社団法人 愛・南魚沼みらい塾」によって，学校と地域の結びつきが強くなった。このコンソーシアムによる生徒への学びの場の提供や，地域課題の解決のためのフィールドワークは SGH 終了後も継続させ，グローカル視点を持った地域リーダーの育成カリキュラムとして実践していく。

③ 海外研修

SGH 指定以前は語学研修の面が強かったが，指定後は課題研究の発表の場としての面も持つようになった。このことは，語学力の向上だけでなく，課題研究に必要な技能をつけるうえで，非常に大きな教育的効果があると考えられる。今後とも継続して行っていく。

【担当者】

担当課	新潟県教育庁高等学校教育課指導第１係	ＴＥＬ	025-280-5611
氏　名	石橋　弘光	ＦＡＸ	025-285-7998
職　名	副参事指導主事	e-mail	ngt500050@pref.niigata.lg.jp

【別紙様式7】

ふりがな	にいがたけんりつこくさいじょうほうこうとうがっこう	指定期間	27～31
学校名	新潟県立国際情報高等学校		

令和元年度スーパーグローバルハイスクール　目標設定シート

1．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	令和元年度	目標値(元年度)
a	自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
	SGH対象生徒:			17人	170人	168人	172人	278人	240人
	SGH対象生徒以外:	158人	140人	117人	6人	0人	0人	0人	人
	目標設定の考え方: 平成26年度は全生徒の3分の1が地域で奉仕活動を行っており、構想では全生徒の2分の1を目標とする								
b	自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
	SGH対象生徒:			110人	94人	112人	100人	9人	140人
	SGH対象生徒以外:	110人	67人	1人	1人	0人	0人	0人	人
	目標設定の考え方: 平成25、26年度の1学年生徒の海外研修参加者数の1．2倍を目標とする								
c	将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
	SGH対象生徒:			53.1%	54.8%	59.1%	59.2%	51%	70%
	SGH対象生徒以外:	37%	35%	56.7%	44.2%	0%	0%	%	%
	目標設定の考え方: 平成26年度の割合を、構想では約2倍にすることを目標とする								
d	公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
	SGH対象生徒:			1人	10人	8人	5人	5人	5人
	SGH対象生徒以外:	0人	0人	0人	0人	0人	0人	人	人
	目標設定の考え方: 構想では5人を目標とする								
e	卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
	SGH対象生徒:			8.1%	32.4%	51.5%	73%	%	50%
	SGH対象生徒以外:	30%	30%	44.1%	48.2%	0%	%	%	%
	目標設定の考え方: 構想では20%増を目標とする								
f	地域の文化・産業に対する関心・行動意欲を持ち、自主的に地域について調査・発信する生徒数								
	SGH対象生徒:			7人	20人	37人	33人	34人	40人
	SGH対象生徒以外:	20人	20人	3人	5人	0人	0人	0人	人
	目標設定の考え方: 平成26年度の地域交流活動等の実施者を、構想では2倍にすることを目標とする								
g	地域社会の魅力を新たに認識し、地域社会を誇りに思う生徒の割合								
	SGH対象生徒:			83.9%	74.8%	75.5%	83.0%	79.2%	80%
	SGH対象生徒以外:	40%	40%	68.2%	77.4%	0%	0%	%	%
	目標設定の考え方: 構想では2倍にすることを目標とする								
h	将来地元の課題に貢献したいと考える生徒の割合								
	SGH対象生徒:			73.9%	68.3%	68.8%	81.9%	70.4%	50%
	SGH対象生徒以外:	10%	10%	61.2%	67.1%	0人	0%	%	%
	目標設定の考え方: 構想では5倍にすることを目標とする								

1’指定4年目以降に検証する成果目標

		25年度	26年度	30年度	令和元年度	2年度	3年度	4年度	目標値(4年度)
a	国際化に重点を置く大学 へ進学する生徒の割合								
	SGH対象生徒:			42.9%	27%	%	%	%	35%
	SGH対象生徒以外:	25%	25%	0%	0%	%	%	%	%
	目標設定の考え方: 構想では10%増を目標とする								
b	海外大学へ進学する生徒の人数								
	SGH対象生徒:			7人	3人	人	人	人	5人
	SGH対象生徒以外:	1人	0人	0人	0人	人	人	人	人
	目標設定の考え方: 構想では5人の進学を目標とする								
c	SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
	SGH対象生徒:			100%	100%	%	%	%	20%
	SGH対象生徒以外:	−	−	0%	0%	%	%	%	%
	目標設定の考え方: 構想では20%を目標とする								
d	大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	60人
	SGH対象生徒以外:	−	−	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方: 構想では5割の60人を目標とする								

２．グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	令和元年度	目標値(元年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数	110人	67人	100人	78人	96人	87人	0人	160人
	目標設定の考え方： 平成26年度の割合を、構想では約2倍にすることを目標とする								
b	課題研究に関する国内の研修参加者数	12人	15人	138人	255人	263人	283人	235人	170人
	目標設定の考え方： 平成26年度は海外大学進学コース生のみ、構想では一般生徒を含む170人を目標とする								
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	2校	2校	3校	3校	3校	3校	3校	5校
	目標設定の考え方： 平成26年度は海外の姉妹校等2校のみ、構想では2大学及び1高校の増加を目標とする								
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	10人	10人	14人	64人	73人	58人	60人	20人
	目標設定の考え方： 構想では2倍の20人を目標とする								
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	10人	10人	11人	15人	22人	60人	80人	30人
	目標設定の考え方： 平成26年度は10人、構想では地域の企業も含め3倍の30人を目標とする								
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	8人	8人	4人	10人	15人	15人	28人	20人
	目標設定の考え方：平成25年度はJST主催「科学の甲子園」全国大会、26年度は全国高校英語ディベート大会に出場、構想では約2倍の20人を目標とする								
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数（留学生も含む。）	1人	2人	2人	2人	4人	1人	1人	3人
	目標設定の考え方：平成25、26年度は帰国子女1人、スイスからの留学生1人、構想でははさらに外国人留学生1人の計3人の受入れを目標とする								
h	先進校としての研究発表回数	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	3回
	目標設定の考え方：平成26年度は海外大学進学コース担当者が1回行い、構想ではSGHとして3回行うことを目標とする								
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない	△	△	△	○	○	○	○	○
	目標設定の考え方：平成26年度は学校情報についてのみ英語で閲覧可能、今後は他の部分についても英語で発信する								
j	TOEFLiBTを受験する年間延べ生徒数	1人	7人	20人	31人	41人	32人	14人	30人
	目標設定の考え方：平成26年度の受験者数を、各学年8人、計24人にすることを目標とする								

＜調査の概要について＞

1．生徒を対象とした調査について

	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度
全校生徒数（人）	456	419	396	366	402	393	385
SGH対象生徒数			139	256	402	393	385
SGH対象外生徒数			257	110	0	0	0

実　施　報　告　書

第１章　本校の概要

１　学校の現状

（１）グローバル人材育成に係る本校の教育理念

越後大和の広大な八色原の自然の中に立地する本校は，平成４年度に開校し，創立28年目である。各学年の定員は，国際文化科２学級80人，情報科学科２学級80人，合計160人である。

【校章】

「ＫＪ」という通称の本校は，上越新幹線浦佐駅に近く，100㎞以上離れた新潟市を含む下越地区から通学している生徒がおり，また，通学が難しい県外を含む遠方からの入学生のために，県立寮２棟，民間寮３棟があり，現在，全生徒の約７分の１が寮生として学校生活を送っている。

校歌の一節にもなっている「学ぶ青春　意気高く」の校訓のもと，教育目標を「進取の精神と豊かな人間性を身につけ，国際化・情報化社会で活躍できる心身ともに健康な人間を育成する」とするとともに，「日本一面倒見のよい学校」を目指し，「わかるまで教える」ことなどを学校の基本姿勢（ＫＪスピリット）の一つとしている。

校訓の「学ぶ青春　意気高く」には，高校生時代にスポーツに熱中することだけが「青春」ではなく，一生懸命に勉強することも「青春」であり，チャレンジ精神をもって何事にも積極的に取り組むという意味が込められている。

創立当初からグローバル人材の育成を目指し，開校初年度には米国イリノイ州の高等学校と姉妹校提携を結んだ。この理念は，地球に黄金のかけはしを描いた校章にも表れており，そこには「地球規模で雄大に発想する心豊かな若人」と「進取の気概に富み世界のかけはしとなる学校」という願いが込められている。

平成25年４月には，新潟県教育委員会の「魅力ある高校づくりプロジェクト」の一環として，世界を舞台に活躍できる生徒の育成と高校教育そのもののグローバル化のため，「海外大学進学コース」を新設し，海外の大学への進学希望者にも対応できるよう指導体制を整備した。本コースの理念は「多様な価値観が共存するグローバル社会において，課題を発見し，解決するために他者と協働できる能力を育成する」ことであり，グローバル人材として「国際的視座」を醸成し，米国を中心にした海外大学進学に必要とされる学力を身につけさせることを目標としている。

また，グローバルマインドを醸成しつつ，伝統的な日本文化の体験学習やそれに伴う地域主催行事にも全校で取り組んでいる。例えば，南魚沼市は魚沼産コシヒカリで有名な土地柄でもあることから，田植え，稲刈りの勤労体験学習を行っているほか，正月には体育館でもちつき大会，百人一首大会を行っている。毎年９月には１，２年生が約20㎞のコースを歩行する「浦佐温泉耐久山岳マラソン大会・健康歩こう大会」に参加し，同じ日に３年生は越後三山の一峰である標高1,778ｍの八海山に登るなど，自然に親しみながら地域の人々との交流を深めている。各学校行事においては保護者から多大なご協力をいただいている。

さらに，平成30年度に続き，令和元年２月に開催予定の「第70回南魚沼市雪まつり」の企画を計画した。雪不足のために開催は中止になったが、南魚沼市長の前で企画のプレゼンテーションを行うなどした。

本校は平成21年度にユネスコスクールに認定されており，ユネスコ部を中心に「グローカル」な活動を展開している。例えば，本校の近くにはアジアではトップクラスのビジネス大学院大学である国際大学がある。この大学は平成26年度スーパーグローバル大学等事業に選定され，国際舞台で活躍できる人材を育成するためのノウハウを蓄積している。国際大学には世界各地約40か国から学生が集まっており，ユネスコ部員は学生に対し地元の名所案内を英語で行っている。また，大学主催の国際文化祭にも参加し，多様な背景を持つ留学生と積極的に交流している。なお，本校のユネスコ部員は，令和元年５月１日現在で35人である。

教職員は，県の高等学校教育のパイオニアとしての自覚と，「県内一学力を伸

ばす学校」を合言葉に，「ＫＪスピリット」のもと教職員が一丸となっと指導している。ＳＧＨ課及びＳＧＨ推進委員会が令和元年度新潟県教育委員会及び文部科学大臣優秀教職員組織として表彰された。受賞理由は「地域との連携・協働を進め、結果を伴う開かれた教育課程を実現した」というものである。同組織は、事務職員を含む全教職員が表彰されたものと理解している。なお，「ＫＪスピリット」は以下の内容である。

○ 決めたことは，やる。やれないことは，決めない。何ごとも皆で。
○ 声をかけ合う，話し合う。(挨拶は大きな声で)
○ チャレンジ精神を持つ。(チャレンジ・ウォーク，登山，スキー)
○ 日本一面倒見のよい学校にする。わかって、できるまで教える。最後は自立させる。
○ 全国的な視点に立つ。(県内の視点にとらわれない)
○ 「前任校では…」,「他校では…」という発想を捨てる。(新しい学校を創っているという気概，プラスの思考)
○ 自宅学習４時間以上の指導。(「自宅学習記録表」による指導)
○ ＫＪの学習の根幹を支える「学習到達度確認問題(小テスト)」。
○ 学年を主体とした学習指導と生徒指導。(何かあったら直ちに集会)
○ 学校行事の開始宣言は，大声で「ガンバルゾ！コール」。

（２）探究型学習に係る教育課程等の特色

国際文化科では，専門教科「国際文化」の中で，学校設定科目として「国際理解」,「国際地域文化研究」,「スーパーグローバル国際」,「グローバルスタディーズ（以下,「ＧＳ」という。）Ⅰ（国際）」,「ＧＳⅡ（国際）」を開設しており，国際社会・グローバル社会が抱える課題について学び，その解決策等について考察する授業を展開している。特に平成26年度に開講した「ＧＳ」は，課題解決型の指導，学習方針の下，グローバル課題等について英語によるディスカッションやディベートを協働で行い，英語による発信力とともに課題解決力，論理的思考力を養成している。

情報科学科でも,「スーパーグローバル情報」を開設しているほか，数学的理解力，論理的思考力の伸長を目指し，数学と理科に関する科目の単位数を多く設定している。また，専門教科「情報科学」の中で，学校設定科目として「情報科学」を開設しており，複数の理数科目の領域にまたがる分野についても情報機器等を活用し学習を深めている。ＡＬＴは常勤，非常勤を合わせて２人おり，また，講師として英語を公用語としている国籍の教員も指導している。

（３）特色ある進路指導

本校では,「授業→復習→学習到達度確認問題(以下，小テストという。)」の一連の学習方法を「ＫＪサイクル」と呼び，学習スタイルの根幹に位置づけている。日々の授業の予習，復習に加え，一週間の授業を週末に総復習し，翌週の朝に10分間の小テストで学習したことの定着度を確認している。小テストは月曜を除いて毎日１科目ずつ実施し，８割以上の正答で合格とし，不合格者には同日放課後に補講を行い，再度解答して提出することを義務づけている。小テストの合格率については各科目とも受けた生徒の８割程度として，問題の全体的難易度は易しくしてある。

小テストの答案は,生徒の学力を教員が確認する上で重要な指標になっている。10分間の考査とはいえ，国数英については教科担当者が３年間にわたり作問して採点を続けることから，生徒の分野ごとの知識・技能に加えて思考力・判断力・表現力の到達度も確認することができる。このことは，生徒が国公立大学の個別学力試験問題に対応できる記述力等が身についているがどうかを教員が的確に把握することに繋がり，開校以来，卒業者に占める国公立大学合格者の割合を，海外を含め65％～70％程度に維持している大きな要因である。

（４）グローバル人材育成に向けた教育課程上の取組

海外大学進学コースでは，海外大学への進学を支援し，国際社会で活躍できるリーダーを志す人材の育成に取り組んでいる。

１年生の入学直後に希望調査を行い，その後，専門家による講演会及び２，３学年のコース生によるプレゼンテーション等を経て，10月に実施する，米国ボストンにおける海外大学キャンパスツアーへの参加者を募る。参加者は現地の大学生の学業生活などを見聞し，現地の空気を直接肌で感じることにより，海外大学進学コース生として海外大学を実際に目指す決意を固めることとなる。

２年生からコース生は「ＧＳＩ」を選択し，本格的な学習を開始する。

「ＧＳＩ」では，

① 課題発見解決能力，論理的思考力及び批判的思考力の育成

② 異なる文化や考え方を持つ集団内で協働できる力の醸成

③ 海外大学に進学できる高次の英語運用能力の獲得

を目標とし，ＡＬＴの力を借りながら，ディスカッション，ディベート，課題解決型学習，プレゼンテーション，海外大学進　学後必要となる基礎的な技術に対応した学習等に取り組む。

GSⅡの授業風景

また，３年生で選択する「ＧＳⅡ」では，

① リベラルアーツ授業

② 自分自身を見つめ直し，自分の信念や価値観を確認するために，出願用エッセイライティングに連動する「自分史」を作成

③ 自分と周りの人々の環境を改善するための具体的な行動計画を立案し実行する「アクションプラン」のまとめ

④ エッセイの作成を含む出願に向けた準備

⑤ SAT Reasoning Testに対応した数学能力向上への取組

志賀合宿でのTED Talk

２、３年生共通の課外活動として、ボランティア活動、TOEFL iBTや⑤など各種検定試験に向けた指導をしている。なお,TOEFL iBTについては，本校は最大10人程度まで受験できる公認試験会場になっており，海外大学進学コースの生徒が積極的に受験し,英語科の教員もTOEFLについて指導している。

海外大学進学コース卒業生の主な大学合格実績として，令和２年３月卒業生の１人はオランダ国立ワーゲニンゲン大学(The Times Higher Educationの世界大学ランキングで59位。なお，東京大学は36位，京都大学は65位)に合格している。また，平成29年３月卒業生では，カリフォルニア大学サンタバーバラ校(同57位)，同デービス校(同55位)への合格者を出しており，平成31年３月卒業生の中にはオーストラリア国立大学(同50位)に合格した者がいる。

２　学校の過去５年間の取組実績等（平成27年４月～令和２年２月）

（１）大学や企業，国際機関等と連携した主な取組

○平成27年４月　山形大学エンロールメント・マネジメント部教授による講演会

○平成27年７月　東北大学訪問，大学模擬講義

○平成27年10月　秋田大学国際資源学部資源政策コース教授による講演会

○平成27年10月　アメリカ大使館副領事Dana Barnhill氏による講演会

○平成27年12月　ミネルバ大学日本代表による講演会

○平成28年２月　ＵＣＬＡ卒業生による講演会

○平成28年６月　大谷大学文学部文学科教授による講演会

○平成28年７月　東北大学教育学部 高度教養教育・学生支援機構教授による講演会
○平成28年７月　東北大学訪問，大学模擬講義
○平成28年10月　ベルギー大使館公使参事官・次席代理Jeroen VERGEYLEN氏による講演会
○平成29年１月　東京大学名誉教授，明治大学 研究・知財戦略機構教授による講演会
○平成29年１月　ＵＣＬＡ卒業生による講演会
○平成29年５月　マサチューセッツ工科大学大学院修了生による集中講義
○平成29年６月　ＵＣＬＡ博士課程修了生による講演会
○平成29年７月　東北大学，東北芸術工科大学訪問，大学模擬講義
○平成29年９月　ゴンザガ大学グローバル副センター長 Melissa Heid氏による講演会
○平成29年10月　外務省職員による講演会
○平成30年２月　ＵＣＬＡ卒業生による講演会
○平成30年６月　ＭＩＴアントレナーシップ公認講師による講演会
○平成30年６月　ＪＩＣＡ職員による講演会
○平成30年７月　東北大学，東北芸術工科大学訪問，大学模擬講義
○平成30年８月　明治大学訪問，大学模擬講義
○平成30年10月　東北大学教育学部 高度教養教育・学生支援機構教授による講演会
○令和元年７月　東北大学，東北芸術工科大学訪問，大学模擬講義
○令和元年８月　明治大学訪問，大学模擬講義
○令和元年10月　海外研修のための異文化理解のための講演

（２）国際性を高める取組

○平成27年７月　アメリカ（ユタ州）・マグナ郡高校生の受け入れ
○平成27年10月　海外大学進学コース生アメリカ大学キャンパスツアー
ハーバード大学，マサチューセッツ工科大学，ブラウン大学，ボストン大学，スミスカレッジのアドミッションオフィス訪問
○平成28年３月　海外研修
・アメリカ（シカゴ）班　エバンストン高校，グレンブルックサウス高校，ノースサイドプレップ高校
・オーストラリア（シドニー）班　アーンデル・アングリカン高校，リチャード・ジョンソン高校
○平成28年７月　アメリカ（ユタ州）・マグナ郡高校生の受け入れ
○平成28年10月　海外大学進学コース生アメリカ大学キャンパスツアー
ハーバード大学，マサチューセッツ工科大学，ブラウン大学，ボストン大学，スミスカレッジのアドミッションオフィス訪問
○平成29年２月　姉妹校　アメリカ（シカゴ）・エバンストン高校生の受け入れ

○平成29年３月　海外研修
・アメリカ（シカゴ）班　エバンストン高校，ノースサイドプレップ高校
・オーストラリア（シドニー）班　リチャード・ジョンソン高校
・タイ（バンコク）班　タマサート大学
○平成29年７月　アメリカ（ユタ州）・マグナ郡高校生の受け入れ
○平成29年10月　海外大学進学コース生アメリカ大学キャンパスツアー
ハーバード大学，マサチューセッツ工科大学，ブラウン大学，ボストン大学，スミスカレッジのアドミッションオフィス訪問
○平成30年２月　姉妹校　アメリカ（シカゴ）・エバンストン高校生の受け入れ
○平成30年３月　海外研修
・アメリカ（シカゴ）班　エバンストン高校，ノースサイドプレップ高校
・オーストラリア（シドニー）班　リチャード・ジョンソン高校
・アジア（シンガポール・マレーシア）班　タマサート大学
○平成30年10月　海外大学進学コース生アメリカ大学キャンパスツアー
ハーバード大学，マサチューセッツ工科大学，ブラウン大学，ボストン大学，スミスカレッジのアドミッションオフィス訪問
○平成31年３月　海外研修
・アメリカ（シカゴ）班　エバンストン高校，ノースサイドプレップ高校
・オーストラリア（シドニー）班　リチャード・ジョンソン高校
・アジア（シンガポール・マレーシア）班　マレーシア工科大学
○令和　元年10月　海外大学進学コース生アメリカ大学キャンパスツアー
ハーバード大学，マサチューセッツ工科大学，ブラウン大学，ボストン大学，スミスカレッジのアドミッションオフィス訪問
○令和２年２月　姉妹校　アメリカ（シカゴ）・エバンストン高校生の受け入れ
○令和２年３月　海外研修（※新型コロナウイルスの影響等により来年度に延期）

（３）グローバル人材育成に資する課外活動の活動状況
○平成27年11月　新潟県高校生英語ディベート大会優勝
○平成27年12月　新潟県高校生理数トップセミナー（数学分野）優秀賞
○平成27年12月　全国高校英語ディベート大会出場，メイクフレンズ賞受賞
○平成28年11月　新潟県高等学校英語スピーチコンテスト準優勝
○平成29年10月　新潟県高校生英語ディベート大会準優勝
○平成30年１月　高校生パーラメンタリーディベート世界大会交流会参加
○平成30年10月　新潟県高校生英語ディベート大会第３位
○平成30年11月　新潟県高等学校英語スピーチコンテスト
○平成30年12月　新潟県高校生理数トップセミナー（化学分野）優秀賞
○令和元年８月　Ocean’s 47 地球こどもサミット参加
○令和元年８月　広島・長崎派遣大使　参加

○令和元年10月　　新潟県高校生英語ディベート大会3位
○令和元年10月　　新潟県高等学校英語スピーチコンテスト
○ユネスコ部（平成21年「ユネスコスクール」に認定，2019年度　部員数31名）

主な活動状況：

①海外姉妹校との交流

②地元国際大学との交流

・国際大学の学生に対する歌舞伎についてプレゼンテーション，歌舞伎見学

・地元の名所「毘沙門堂」の英語ガイド

・テーマを設けたディスカッション

・国際大学の国際文化祭への参加，各国の文化についてのインタビュー

③アジアの高校生との交流

・中国や韓国の高校生の来校時の活動･･･日本の学校や文化についてのプレゼンテーション，テーマを設けたディスカッション，バディとしての校内案内

④部員による「第二外国語語講座」･･･韓国語・フランス語・中国語に長けた生徒によるピア・ティーチング。

⑤新潟県立大学生による「国際理解ワークショップ」への参加

⑥“届けよう，服のチカラ” プロジェクト 2014年より６年連続で実施し、今年度は子ども服2,077枚を難民キャンプへ寄贈

⑦ユネスコスクールＥＳＤ教材「聞き書き」プロジェクトの実施･･･地域を創る人々の人生と価値観を記録し，持続可能な地域社会の将来を考える

⑧新潟県「県内大学留学生ふれあい事業」を実施･･･主にアジア諸国から新潟県内の大学で学んでいる留学生と英語・韓国語で交流し，国際理解を深める。

⑨「書きそんじハガキの回収キャンペーン」に取り組み，今年度は206枚のハガキを回収し，「ユネスコ世界寺子屋運動」の活動資金として寄付した。

（４）研究歴

該当なし。

（５）その他特記すべき事項

本校では，「海外大学進学コース」を設置しているが，TOEFLiBT試験会場が近隣にないため，公式に会場認定を受け，校内においてTOEFLiBT試験を実施している。これにより受験生徒は交通費負担等が軽減されている。

なお，TOEFLiBT試験を新潟県内の高等学校内で実施したのは，本校が初めてである。

第２章　本校の SGH 構想

平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

<table>
<tr><td>指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="4">にいがたけんりつこくさいじょうほうこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">新潟県</td></tr>
<tr><td>27～31</td><td>①　学校名</td><td colspan="4">新潟県立国際情報高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">国際文化科 2 学級×3 年　194 人
情報科学科 2 学級×3 年　210 人
平成 27 年度(5 月 1 日現在)在籍者総数　404 人</td></tr>
<tr><td>国際文化科</td><td>74</td><td>48</td><td>72</td><td></td><td>194</td></tr>
<tr><td>情報科学科</td><td>69</td><td>69</td><td>72</td><td></td><td>210</td></tr>
<tr><td>⑥研究開発構想名</td><td colspan="7">雪国＊米どころ＊魚沼の世界発信を通じた人材育成 ～浦佐から世界へ～</td></tr>
<tr><td>⑦研究開発の概要</td><td colspan="7">国際文化科，情報科学科を設置する専門高校としての教育を土台に，雪国で米どころでもある地元魚沼の魅力を世界に発信しながら，スーパーグローバル大学の国際大学・明治大学との連携を通じて，地域が抱える課題，さらには関連する世界の地域課題について，グローバルな視点から考察・提案できる人材の育成を目指す。</td></tr>
</table>

⑧研究開発の内容等

⑧-1 全体

(1) 目的・目標

積極的に国際教育に取り組むスーパーグローバル大学である国際大学･明治大学との連携を通じて，ふるさとへの愛着と誇りを持ち，地域の魅力を世界に発信しながら，南魚沼市や地元企業などの課題をグローバルな視点から提案できる人材の育成に取り組む。さらに本事業を通じて，論理的，分析的，創造的思考力，英語発信力を育成し，将来生徒一人ひとりが自身のキャリアパスを構築し，世界の地域課題に取り組む，国際舞台で活躍できるグローバル人材の育成を目指す。

(2) 現状の分析と研究開発の仮説

新潟県では人口流出，高齢化，過疎化が進行しており，地域の魅力を国内，さらには世界に発信し，県産品の販路開拓や観光振興等につなげることが重点政策とされている。また，ふるさとへの愛着と誇りを持つひとづくりが，新潟県の教育が現在目指しているところでもある。

本校では，総合的な学習としての**「魚沼学」**を通じて南魚沼市や地元企業などの魅力と課題について認識・議論を深めたところであるものの，有効な発信・提案にはまだ到っていない。また，食糧問題，人口問題，経済格差など世界の地域課題に関わる探究・提案はこれからの課題である。

国際化・グローバル化に伴う地域の課題を解決する政策や，グローバル人材そのものの育成が不可欠となっている現在，地域が抱える課題を認識し，地域への愛着や誇りを持ちながら，課題解決に向けてグローバルな視点を持って取り組む人材，地域の文化・産業の魅力を世界に発信できる構想力及びコミュニケーション能力を備えた人材の育成が高校段階でも必要である。その戦略・方法を以下の**【仮説】**を前提に研究開発する。

【仮説１】協働型課題解決学習に取り組むことにより，グローバル人材に必要とされる論理的，分析的，創造的思考力を育成できる。

【仮説２】地域の魅力を発信し，地域課題の解決に向けて英語で外国人と意見交換を行うことにより，地域に対する理解を深めるとともに地域への愛着と誇りを高めることができる。

【仮説３】グローバルな視点を持ち，地域課題について調査した上でプレゼンテーションを行うことにより，共通するグローバルな地域課題に取り組む姿勢を醸成できる。

【仮説４】課題研究と英語の授業の効果的な連携をはかることにより，英語によるコミュニケーション能力を育成できる。

(3) 成果の普及

・１年生等を対象とした，２年生の課題研究ポスターセッション
・生徒・保護者等を対象とした課題研究発表を通じて地域への政策提言

		・ＳＧＨ成果報告会，課題研究発表会の実施 ・校外での課題研究発表会や成果報告会への参加 ・「ＳＧＨ便り（仮称）」の発行やホームページによる情報公開・提供
	⑧-2 課題研究	**(1) 課題研究内容** **テーマ：魚沼の文化と産業を世界に発信し，地域課題を解決するための戦略および研究開発** ・論理的・分析的な思考の基礎を学び，それらの思考法を身に付ける。 ・魚沼の魅力と魚沼の課題を学び，世界に発信する。 ・「地域の魅力を活かしつつ，地域課題・グローバル課題をどう解決すればいいか」をグローバルな視点を持って考える。 **(2) 実施方法・検証評価** 「総合的な学習の時間」及び「ホームルームの時間」において，以下の課題研究を行い，外国人を含む大学関係者による「パフォーマンス評価」及び生徒自身が行う「パフォーマンス改善アンケート」を使った自己評価・ピア評価により検証評価を行う。 **◆【ＫＪクリティカルシンキング・プログラム（ＫＪ－ＣＴ）】** 企業が持つ課題について，協働型課題解決学習により，課題認識・処理力，情報収集・活用力，論理的・分析的思考力，プレゼンテーション能力を育成し，魚沼学のための初期値的体験を修得する。 **◆【魚沼学　①】** グローバル課題と地域の課題を比較することにより，双方の課題解決にむけて問題の認識と課題設定を行い，それについての解決策を考察する。 **◆【課題研究海外研修】** 上記の地域社会の課題について，グローバルな視点から英語でプレゼンテーションを行い，海外という異文化の視点からフィードバックを得る。さらに現地にて必要なフィールドワークを行い，魚沼学につながる資料を収集する。 **◆【魚沼学　②】** 魚沼学①および海外研修で得た知識・フィードバック等からさらに地域の課題を設定し直し，解決策を深化させる。グローバルな課題と地域の課題がどのようにリンクしているかという視点から，それらえを解決するために，ディスカッション，ディベート，プレゼンテーション，エッセイライティング等を国際大学の外国人講師のもとで行い，最終的な成果発表を英語でのプレゼンテーションで行う。 **(3) 必要となる教育課程の特例等** 適用なし。
	⑧-3 上記以外	**(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価** 課題研究・発表のための英語運用能力の向上を目指し，海外大学進学コース生を含む希望生徒が国際大学によるＩＥＰ（英語集中プログラム）を受講し，４技能の向上を専門家により検証評価する。 **(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等** 必要なし。 **(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取組内容・実施方法** 海外姉妹校等との交流など，グローバル人材を育成できる機会を使い，課題研究テーマに関する意見交換及び調査を企画し，国際的な課題について考え，英語で意見交換をする機会を増やしていく。
⑨その他特記事項		将来のグローバル・リーダーを目指し，海外の大学に進学を希望する生徒を支援するため，**平成 25 年度に「海外大学進学コース」を開設**した。コースでは，学校設定科目「グローバルスタディーズⅠ」及び「グローバルスタディーズⅡ」において，グループワークや英語を使い，論理的思考力やプレゼンテーション能力，問題解決能力等を養成している。

【雪国＊米どころ＊魚沼】の 世界発信を通じた人材育成【新潟県立国際情報高等学校】

目的

〇ふるさとへの愛着と誇りを持ち，自然や物産を含む地域の魅力を世界に発信しながら，南魚沼市や地元企業などの課題，特に米及び観光産業に関わる課題について，グローバルな視点から提案できる人材の育成に取り組む。
〇論理的，分析的，創造的思考力，英語発信力を育成し，将来生徒一人一人が自身のキャリアパスを構築し，世界の地域課題に取り組む，国際舞台で活躍できる人材の育成を目指す。

目指すグローバル人材

〇世界の地域課題に取り組む、国際舞台で活躍できる人間

グローバルな課題へ【課題探究】

〇地域の課題設定をグローバルな食問題等の社会課題・ビジネス課題として広い視野で捉え，解決に向けて，ディスカッション，ディベート，プレゼンテーション，エッセイライティング等を国際大学の外国人講師の下で行い，最終的な成果発表を英語でのプレゼンテーションで行う。

地域研究【魚沼学】

〇地元自治体の専門家による講演等を通じて，地域の魅力，抱えている課題の認識・設定を行い，解決策の発表等を行う。
〇ブレインストーミングを通じて，プロジェクトのテーマを決める。
〇情報収集・調査を行い，プロジェクトの内容を深化させる。
〇ポスター発表を国際大学の外国人大学院生に対し英語で行いフィードバックを得る。

アジア・米国・豪州へ【課題研究海外研修】

〇姉妹校のあるアメリカ，オーストラリアに加え，コメ文化圏であり地域課題を抱えるフィリピンなどのアジアの国を訪れ，魚沼の魅力を伝えるとともに課題研究についてプレゼンテーションを行い，フィードバックを得て，グローバルな視野から研究を深化させる。

国際情報クリティカルシンキング･プログラム【KJ－CT】

〇現実の課題について，協働型課題解決学習により，課題認識・処理力，情報収集・活用力，論理的・分析的思考力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力を育成する。
〇前期･･･ビジネス系ロジカルシンキング・クリティカルシンキング
〇中期･･･論理学系クリティカルシンキング→根拠と主張，前提と結論
〇後期･･･心理学系・社会学系クリティカルシンキング→対人状況の想定
⇒ＫＪ－ＣＴプレゼンテーションを行いピア評価・外部評価を受ける。

地球規模で雄大に発想する心豊かな若人

③三年次
②二年次
①一年次
ピアサポート

アクティブラーニングの実践
アクション ⇧ シンキング
ICTリテラシー教育の推進
提携 協力 指導 助言

協力体制・評価体制

新潟県教育委員会
SGH運営指導委員会

SGU 明治大学
グローバル人材毎年8,000人輩出を目指す日本を代表する私立大学

SGU 国際大学
約35カ国からの留学生が集う
アジアトップクラスの大学院大学

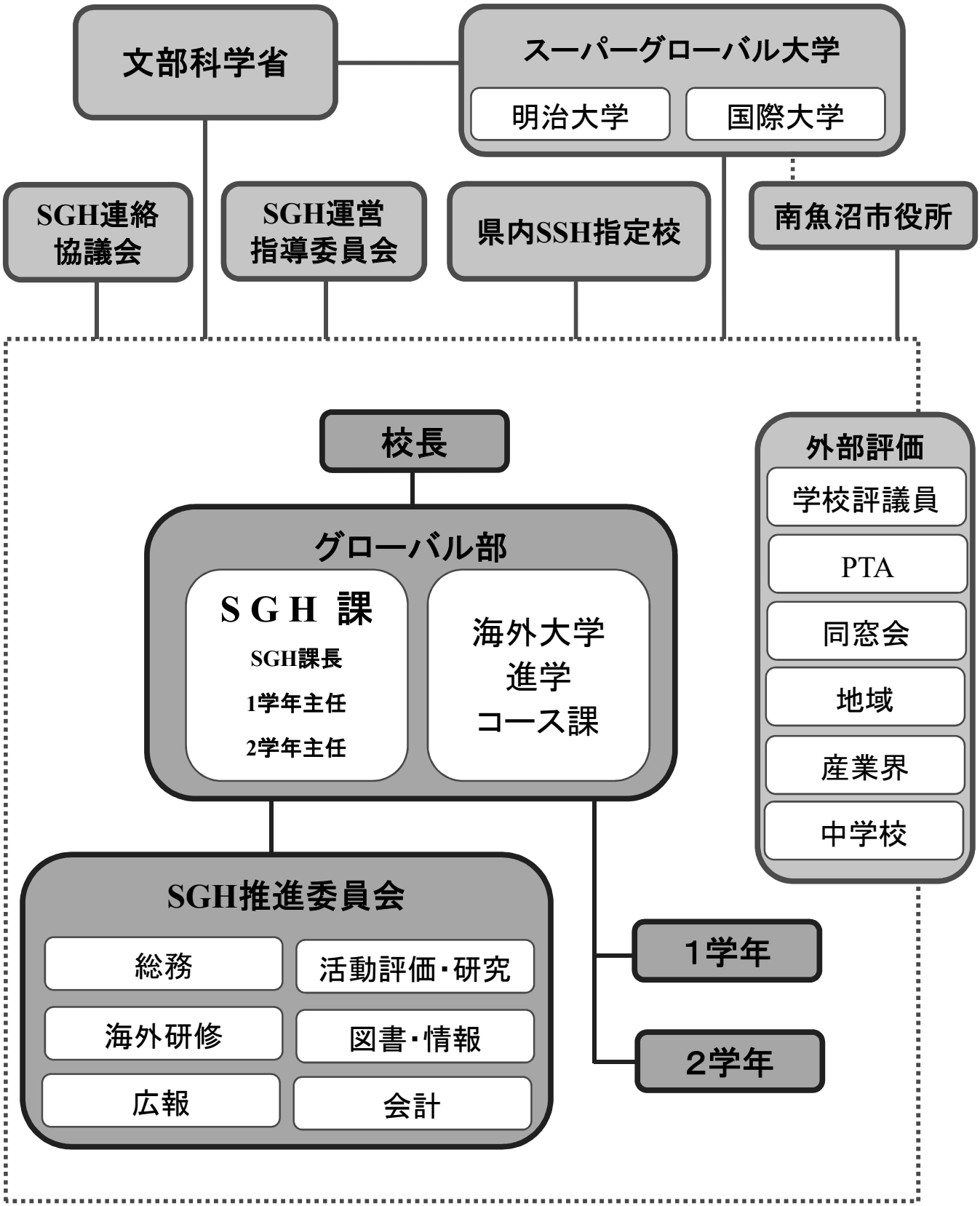
南魚沼市
豊かな自然と食文化を誇る雪国のまち

コシヒカリ・日本酒	八色スイカ・椎茸
スキー場・八海山	温泉・雪祭り

メディカルタウン構想⇒地域医療の充実
プラチナタウン構想⇒移住者の増加

地元企業・ＪＡ魚沼みなみ
地域産業支援プログラム
【 ICLOVE 】⇒ 参加52社

研究開発組織の概要


文部科学省
スーパーグローバル大学
明治大学
国際大学
SGH連絡協議会
SGH運営指導委員会
県内SSH指定校
南魚沼市役所
校長
外部評価
学校評議員
PTA
同窓会
地域
産業界
中学校
グローバル部
SGH 課
SGH課長
1学年主任
2学年主任
海外大学進学コース課
SGH推進委員会
総務
活動評価・研究
海外研修
図書・情報
広報
会計
1学年
2学年

第３章　令和元年度研究開発実施計画

１　研究開発名
　　雪国＊米どころ＊魚沼の世界発信を通じた人材育成　～浦佐から世界へ～

２　研究開発の概要
　国際文化科，情報科学科を設置する専門高校としての教育を土台に，雪国で米どころでもある地元魚沼の魅力を世界に発信しながら，スーパーグローバル大学の国際大学・明治大学との連携を通じて，地域が抱える課題，さらには関連する世界の地域課題について，グローバルな視点から考察・提案できる人材の育成を目指す。

３　事業の実施期間
　契約日～令和２年３月 31 日

４　令和元年度の研究開発実施計画
【１年生】
（１）ＫＪクリティカルロジカルシンキングプログラム
　　県内や魚沼の地元企業についてグループワークを通して批判的思考力・論理的思考力・プレゼンテーション能力を養う。提携校である明治大学を訪問し，地域連携の意義を学ぶ。また，中央省庁・研究施設・グローバル企業等にも訪問し，実践的な知識を深める。
（２）魚沼学①
・明治大学・国際大学の専門家，地元自治体・企業の実務家等による講義を受けたあと，４、５人のグループに分かれ，魚沼の魅力や課題についての調査やフィールドワークを実施し，その結果をまとめる。
・魚沼の魅力や課題に関するプレゼンテーションを行い，専門家・実務家等から指導・助言を受ける。
・３月の海外研修に向け，魚沼に関することを英語でプレゼンテーションする。国際大学の学生及び本校の卒業生から英語原稿の指導及びプレゼンテーション指導を受ける。また現地の事情や，フィールドワークを行うための知識等についてレクチャーを受ける。
（３）海外研修・フィールドワーク
　　アメリカ（シカゴ），オーストラリア（シドニー），ベトナムにおいて，フィールドワークを行うとともに，現地の高校生または大学生に対して世界的な課題や社会問題における取り組みについてディスカッション等を行う。また，日本文化や魚沼について、英語でプレゼンテーションを行う。特にベトナムでは、新潟県と関係がある企業を訪問し、地域におけるグローバルな活動を体感する。また、国際協力機構（ＪＩＣＡ）等のオフィスを訪れることで，現地の抱える問題についてレクチャーを受ける。

【２年生】
（１）海外研修報告
・５月のＳＧＨ報告会と７月の１年生向け研修説明会で海外研修に関する英語スピーチ・プレゼンテーションを行う。また，海外研修報告書を作成する。
（２）魚沼学②

・海外研修で得たフィードバックを踏まえて魚沼の地域課題について考え，解決策を模索する。そのためにビジネスプランの作り方や，町おこし・地域づくりについて専門家・実務家から講義を受ける。地元企業・団体や大学研究室を訪問するフィールドワークを行い，情報を集めるとともに,自らが考えた魚沼の地域課題を解決するプランについてアドバイスをもらう。
・魚沼の地域課題を解決するプランを適用し，世界の地域課題や社会問題について考察する。最終成果を英語論文にまとめる。

（３）中間発表

・７、８月のオープンスクールで，フィールドワークの研修成果を地元の中学生に向けて発表する。
・11 月の魚沼学中間発表会でフィールドワーク訪問先の専門家・実務家を招き，魚沼の地域課題を解決するプランについてプレゼンテーション（日本語）を行う。

（４）成果発表

・２月のＳＧＨ最終報告会で魚沼の地域課題を解決するプランについてプレゼンテーション及びポスター発表（英語・日本語）を行い，参加者・運営指導委員より指導・助言を受ける。
・全国ＳＧＨ高校生フォーラム，関東甲信越静地区ＳＧＨ課題研究発表会，ＳＧＨ甲子園，高校生ビジネスプランコンテスト等に応募をする。

【３年生】

（１）魚沼学②

世界の地域課題に関する英語論文を完成させ，報告書にまとめる。

５月に行われるＳＧＨ報告会で，代表生徒による英語論文の発表を行う。

（２）１，２年生のピアサポート

４月に魚沼学②を始める２年生へ，これまでの課題研究の引き継ぎを行う。また，５月に行われるＳＧＨ報告会では企画・運営を担い，１，２年生のＳＧＨに関わる活動に関して，これまでの経験を踏まえ助言を行う。

５　事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
ＫＪクリティカルシンキングプログラム	国際情報高等学校	馬場　隆史
魚沼学①	国際情報高等学校	遠山　貴洋
海外研修・フィールドワーク	アメリカ合衆国 オーストリア ベトナム	菅井　亮佑
海外研修報告	国際情報高等学校	丸山　智恵子
魚沼学②	国際情報高等学校	浦壁　裕
報告会	国際情報高等学校	松本　琢
最終報告会	国際情報高等学校	遠山　貴洋
年次報告書作成	国際情報高等学校	馬場　隆史

6　課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（契約日～令和２年３月 31 日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ＫＪクリティカルシンキングプログラム	○	○	○	○	○	○						
魚沼学①				○	○	○	○	○	○	○	○	○
海外研修・フィールドワーク									○	○	○	○
魚沼学②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
報告会		○										
中間発表会					○	○						
最終報告会											○	
年次報告書作成									○	○	○	○

第４章　研究開発の内容

Ⅰ　１年生（28 期生）の取組

１　国際情報クリティカルシンキング・プログラム（ＫＪ－ＣＴ）

（１）目的

① グローバルな課題について，解決策を検討する過程で，課題認識・処理力，情報収集・活用力，論理的・分析的思考力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力を育成する。

② グローバルな活動を行っている企業が実際にどのような課題を持っているかということを発見・考察することにより，魚沼学において地域の課題について解決策を検討する際のヒントとなるようなことを学ぶ。

③ ①を魚沼学に先駆けて学ぶことにより，比較のプラットホーム，あるいは，比較する際の初期値的経験・体験を形成することができる。

④ 上記の活動を通じて課題等がＳＤＧｓおよび地域的な課題とどのように関連しているかを考察する

（２）仮説との関係

【仮説１】「協働型課題解決学習に取り組むことにより，グローバル人材に必要とされる論理的・分析的・創造的思考力を育成できる」の検証評価対象

（３）内容

・ＫＪ－ＣＴの前期では，グローバル人材に必要とされる論理的・分析的思考力の基礎を学ぶ。具体的には，マーケティングに用いられる調査方法，およびその統計学的集計手法，ＫＪ法を用いたブレインストーミングの手法，ロジックツリーを使用した論理的思考法などである。実際に，外国人（提携先の国際大学の学生など）に対してアンケート調査を行い，その結果に基づいて課題を明確にし，具体的解決策について検討していくことにより，グローバル社会における論理的・分析的思考力の必要性を身をもって学ぶ。

・ＫＪ－ＣＴの中期では，より複雑な課題について，論理学系クリティカルシンキングを行い，「根拠と主張」，「前提と結論」などの討論に必要な考え方を学ぶ。その際議論の対象者が外国人である場合には，英語によって「根拠と主張」を明確化する。

・ＫＪ－ＣＴの後期では，他者の感情や心理をも考慮した，より高度な対話力・交渉力につながる心理学系，社会学系クリティカルシンキングの思考法を，事例を用いながら協働型学習で学んでいく。最終的に，幾つかの現実の課題の解決策についてグループ単位でプレゼンテーションを行い，評価を受ける。プレゼンテーションの対象者が外国人である場合，英語によるプレゼンテーションを行う。

（４）実施方法

・実施対象：１学年全員

・実施時期：１学年通年（４月～３月）

・実施予定時間：週 1.5 時間程度（スーパーグローバル国際（以下ＳＧＫ），スーパーグローバル情報（以下ＳＧＪ）の時間を中心に実施）　全 40 時間

（５）年間計画

	内　容
４月	・オリエンテーション　ＳＧＨ・魚沼学・ＫＪ－ＣＴとは何か。
５月	・キックオフワークショップ
６月	・グループで魚沼の良いところと課題を出し合い，テーマを決定 ・魚沼の課題を解決する・魚沼を活性化する方策について話し合い，調査 ・東京研修で行う発表にむけての準備
７月	・東京研修のための事前研修
８月	・東京研修，明治大学でグループごとに発表
９月	・中間発表に向けての準備 ・中間発表会

（６）内容の詳細

＜オリエンテーション＞

・日程　４月２６日（木）

・目的　①　本校のＳＧＨの取り組みの概要を理解する。

　　②　前期に行うＫＪ－ＣＴについて概要を理解する。

・内容　①　本校のＳＧＨの取り組みについて，その目的を説明した。

　　②　「グローバル人材」とは何かということについて説明した。

＜キックオフワークショップ＞

・日程　５月５日（祝・日）

・目的　①　魚沼学（地域で探究すること）の意義を理解する。

・内容　①　現在ＳＧＨ活動について感じている印象や疑問点などについて話し合うグループワークを行った。

　　②　２学年生徒による雪まつり企画の発表を聞いた。

　　③　大正大学地域構想研究所・浦崎太郎教授によるＳＧＨ講演会を行った。

＜テーマについて話し合い・調査＞

・日時　６月～７月　ＳＧＫ・ＳＧＪ時

・目的　①　魚沼の現状を知る。

　　②　ＳＤＧｓの目標に関連する魚沼の課題を見つける。

③　魚沼の課題を解決する・活性化する方策について話し合い，調査する。

・内容　①　海外研修の行き先希望先・興味のある魚沼の課題別にグループを決定した。

①　各班で魚沼の現状を調べた。

②　グループごとに調べたいテーマを決定した。

③　ＳＤＧｓの目的・内容について説明した。

＜東京研修＞

・日時　８月１日（木）～８月２日（金）

・目的　①　明治大学の教授から地域活性化の意義を学ぶ。

②　明治大学の学生からＳＧＨ活動に必要なプレゼンの技法を学ぶ。

③　企業・省庁・大学を訪問し，グローバルな視点を身につける。

・内容　①　明治大学の講義を受講し，ＳＧＨ活動に必要な知識・技能を身に付けた。

②　Ｙａｈｏｏ，ＫＫＲ，ユニセフハウス，大塚製薬，日立，富士通，外務省，明治大学を訪問して見学や質疑を行った。

③　ＮＨＫ人事局 金沢幸生 氏による講演を聞いた。

④　ＯＢ・ＯＧと進路についての相談会を行った。

⑤　各グループ内で研修で得たことを共有した。

＜中間報告＞

・日時　９月１３日（金）ＳＧＫ・ＳＧＪ時

・目的　①　具体化されたアイディアをプレゼンテーションする過程で，より現実的方策へと練り上げていく。

②　方策・企画が成功すると，どのように変わるかということを考える。

③　方策・企画のターゲットは誰かということを明確に説明する。

④　聞き手である生徒は，プレゼンテーションのポイントを知ることができる。

・内容　①　それぞれの企画に対して，質問や足りない部分を補い合った。

②　プレゼンテーションの改善点とやり方等をお互いに確認した。

２　魚沼学①

（１）目的

①　魚沼の文化・産業を題材に、ＫＪ－ＣＴプログラムで培った課題認識力、課題解決のための手法等を向上させる。

②　自分たちが学校生活を送っている地域について深く掘り下げ、その魅力や問題点の中から課題を見つけ、その探究や解決策を提案することを通じて、地元魚沼に対する理解を深める。

③　提案を世界に発信するため、英語によるプレゼンテーションを準備し、英語による発信力を向上する。

（２）仮説との関係

【仮説１】「協働型課題解決学習に取り組むことにより、グローバル人材に必要とされる論理的、分析的、創造的思考力を育成できる」の検証評価対象

【仮説２】「地域の魅力を発信し、地域課題の解決に向けて英語で外国人と意見交換を行うことにより、地域に対する理解を深めるとともに地域への愛着と誇りを高めることができる」の検証評価対象

（３）内容

・国際大学、明治大学の社会科学分野の専門家による、グローバル社会についての基調講演を通じて、世界の中の日本の現状と課題について基礎知識を得る。

・グループによる、ブレインストーミングを通じて課題設定を行い、プロジェクトのテーマを決める。

・情報収集・調査を行い、プロジェクトの内容を深める。

・プロジェクトの発表に向けて、プレゼンテーションソフトを活用し、発表原稿を作成する。

・英語による発表原稿を作成する。

・英語での発表は国際大学の外国人大学院生に対して行う。

・海外研修において、現地の学生に対して魚沼について発表し、意見交換、ディスカッションを行う。

（４）実施方法

・実施対象：１学年全員

・実施時期：１学年後期（９月～３月）

・実施予定時間：週 1.5 時間程度　全 40 時間

（５）年間計画

	内　容
９月 10 月	・ＫＪ－ＣＴを発展 ・テーマについて更にブレインストーミング
11 月	・SGH 成果発表会に向けた準備 ・SGH 成果発表会
12 月	・プレゼンテーションのブラッシュアップ
１月	・プレゼンテーションを英語に直す
２月	・国際大学の学生による英語プレゼンテーション指導 ・英語によるプレゼンテーション評価会
３月	・英語によるプレゼンテーションのブラッシュアップ ・海外研修において現地の学生に対しプレゼンテーションを行う ・最終発表（海外研修に行かない生徒を対象する）

（６）内容の詳細

＜ＫＪ-ＣＴの発展＞

・日程　９月～10 月

・目的　①　ＫＪ－ＣＴ中間発表会の評価をもとに、アイディアの修正を行う。

・内容　①　中間発表のルーブリック評価をもとに、グループの良い点・悪い点を話し合った。

＜文化部発表会＞

・日時　10 月 9 日（水）

・目的　①　１年生の代表者のプレゼンテーションを見て自らのグループの参考にする。

・内容　①　１年生の代表者グループの発表を見て、自分たちのアイディアの参考とした。

②　ポスターセッションでは質疑応答を積極的に行った。

＜テーマを深める＞

・日時　11 月　ＳＧＫ・ＳＧＪ時

・目的　①　海外研修での発表に向けて、自らが取り組むテーマを発展させる。

②　ＳＧＨ最終報告会に向けて、英語でのプレゼンテーションの基礎を作る

・内容　①　ＳＧＨ最終報告会に向けて発表やテーマを深化させた。

②　最新の科学技術について調べた。

＜グループの発表を英語にする＞

・日時　１１月～１月

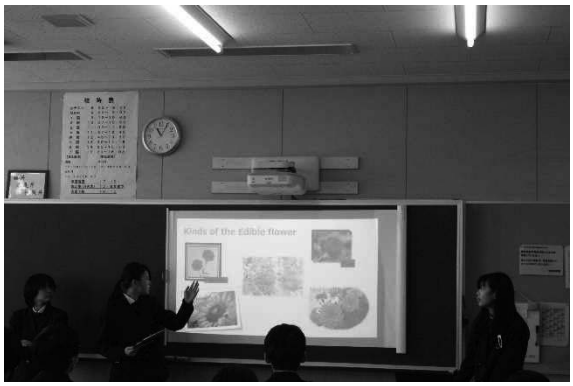
・目的　①　最終報告会・海外研修における発表のため，形態を英語にする。

・内容　①　(1)魚沼が抱える課題，(2)そのために実施したい方策・企画，(3)それによりどのＳＤＧｓが解決されるか，(4)今後の調査の予定をそれぞれ日本語でまとめ直した。

②　(1)～(4)を英語にする活動をそれぞれメンバーで担当した。

③　英語科教員により添削を受けた。
④　添削を受けた内容をスライドにまとめ直し，口頭で説明する原稿を作成した。
⑤　発表の練習，英語科教員からの添削を繰り返した。

＜ＳＧＨ最終報告会＞
・日時　２月６日(木)
・目的　①　テーマを考え，調査してきた魚沼学の企画を聞き手に伝わるよう発表する。
②　他グループの発表を聞き，魚沼の課題について考えを深める。
③
・内容　①　クラスごとに分かれ，各グループの発表を行った。その際，クラスのグループが２学年と半分ずつ入れ替わり，学年を越えて発表をし合った。
②　１学年代表２グループ，２学年代表３グループが全体でステージ発表を行った。
③　外務省大臣官房総務課地方連携推進室長 四方明子 様による基調講演を実施した。



＜国際大学大学院生による英語プレゼンテーション指導＞
・日時　２月２０日（木）２１日（金），２７日（木）２８日（金）ＳＧＫ・ＳＧＪ時
・目的　①　発表のスライドをより説得力があり，伝わりやすいものに改善する。
②　英語での発表をより伝わりやすい発表に改善する。
・内容　①　ＩＵＪの学生を学校へ派遣してもらい，各グループの発表を聞いてもらった。
②　発表をより改善するよう添削してもらった。

Ⅱ　２年生（２７期生）の取組

１　海外研修

（１）目的

ＫＪ－ＣＴで培った論理的・分析的思考力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等は、魚沼の文化・産業の世界発信に有用である海外研修を行い、英語圏の高校において、地域の文化・産業、自身の学校生活などについて、英語で説明を行い、現地の生徒・教職員等からフィードバックを得ながら、英語による発信力を高める。

（２）仮説との関係

【仮説２】「地域の魅力を発信し、地域課題の解決に向けて英語で外国人と意見交換を行うことにより、地域に対する理解を深めるとともに地域への愛着と誇りを高めることができる」の検証評価対象

【仮説３】「グローバルな視点を持ち、地域課題について調査した上でプレゼンテーションを行うことにより、共通するグローバルな地域課題に取り組む姿勢を醸成できる」の検証評価対象

（３）内容

１年生３月下旬の約 10 日間、シンガポール・マレーシア，アメリカ合衆国、オーストラリアにおいて姉妹校を含む現地の高校生に対し、地域の文化・産業、自身の学校生活などについて、英語で発信し、フィードバックを得る。

（４）実施方法

・実施対象･･･１学年生徒希望者（１学年生徒の約７割）
・実施時期･･･１学年２月下旬の約 10 日間
・準備予定時間･･･１年 12 月～３月

（５）内容の詳細

①　アメリカ（シカゴ）

１　概要

・期間　平成 31 年３月 16 日（土）～25 日（月）　10 日間
・参加者　生徒 38 人，引率教員２人　（丸山　智恵子，関谷　明典）
・高校訪問先　Evanston Township High School
　　Whitney M Young Magnet High School
・日程

	月日	行程
1	３月 16 日（土）	11：55　浦佐駅発　13：28　東京駅着 14：03　東京駅発　14：57　成田空港着

		18：45　成田空港発　直行便でシカゴへ 一日付変更線通過― 16：40　シカゴ・オヘア空港着 ホストファミリーと対面　（ホームステイ）
2	3月17日（日）	終日　ホストファミリーと過ごす 夕方　歓迎会（エバンストン高校）（ホームステイ）
3	3月18日（月）	現地高校訪問・学校体験 （ホームステイ）
4	3月19日（火）	終日　現地高校訪問 エバンストン高校→ピザ作り体験 ヤング高校→おにぎり作り体験　（ホームステイ）
5	3月20日（水）	終日　現地高校にて学校体験 エバンストン高校→茶道部体験 （ホームステイ）
6	3月21日（木）	終日　現地高校にて学校体験 エバンストン高校→エバンストンの町歩き （ホームステイ）
7	3月22日（金）	終日　現地高校にて学校体験 プレゼンテーション（エバンストン高校・ヤング高校） 夕方　送別会（エバンストン高校・ヤング高校）　（ホームステイ）
8	3月23日（土）	朝，ホストファミリーとお別れ 昼，コングレスプラザホテルに到着，荷物下ろし 夕方までダウンタウンフィールドトリップ 夕食は全員で中華料理レストラン
9	3月24日（日）	午前中　空港へ移動 12：45　シカゴ・オヘア空港発　直行便で成田へ ―日付変更線通過―　（機中泊）
10	3月25日（月）	15：55　成田空港着　17：00　成田空港発　バスで各方面へ 22：30　浦佐駅着　23：00　長岡駅着

2　生徒の感想

私はうまくいく自信しかなかった。“America”という言葉を聞いただけで、なんだかとってもエキサイトして、ついつい顔がにやけてしまっていた。ホストバディーはどんな子だろう、学校の授業は理解したいな、かっこいい男の子はいるかなぁ、飛行機内でそんなことを考えていた。うまくいく気しかしなかった。本当にそう思っていた。しかし、実際はうまくいかないことだってあったのである。みんなにそう話したら、あたりまえじゃないか、と思うかもしれない。けれど、私にとっては「うまくいかない」なんてことは計画外なことだったから、なんとももどかしい気持ちに包まれた。

私が直面した最も大きい「もどかしい」は、沈黙である。いかにも普通すぎる悩みで恥ずか

しい。初日に行ったマクドナルドでの会話、私は完全に受け身になってしまって、質問されたことにただ答えることしかできなかった。一語か一文で答えて終わりになってしまって、会話が全く続かない。自分から話しかけたいけど、話すことがいつもと違ってさっぱり思いつかない。実にもどかしいものである。どうしようか、ちょっとした焦りを感じた。

その日の夜、「無口な子」だなどと思われたくなかった私は、悩んだ末、勇気を出してホストバディーに話しかけてみた。今までで最も「勇気」らしい勇気だった。その勇気が私とホストファミリーとのこれから先の関係を左右したのではないかと思えたほどだ。違う言語を話す人と初対面で、簡単に打ち解けられると軽く思っていた私は、自分を買いかぶりすぎていたことに気付いた。根拠もないのに、絶対にうまくいくなんて間違いだった。あの日のことは到底忘れられない。

その日から、沈黙が全くなかったわけではないけれど、徐々に打ち解けていって、ジョークを言ってみたり、ふざけ合って笑ったり、すごく楽しかった。こんな風に楽しく過ごせたのは、もどかしさが私に気付かせてくれたことがいっぱいあったからだと思う。

今、アメリカでも私らしくいれたというちゃんとした根拠を持って、はっきりと言える。次の挑戦、私はうまくいく自信があります！（２年生）

３　成果と課題

（１）プレゼンテーションについて（事前準備の様子）

・プレゼンテーションの内容を大きく変更。例年の魚沼の紹介から、自分たちの調べた魚沼の抱える課題とその解決法について、アメリカの学生はどのように考えるかや、何か良いアドバイスはないかというように意見交換を中心におこなうプレゼンに変更した。

・事前に IUJ の学生に対してプレゼンを行い，表現に関するアドバイスを受けた。

・本年度は IUJ の学生へのプレゼン・現地でのプレゼンともに，紙媒体での発表形式であったため、現地のプレゼンテーションも準備に手間をかけることなくスムーズに行えた。

（２）現地でのプレゼンテーションについて（本校生の様子，現地の高校生の様子）

・事前準備ではチームワークが心配だったグループも，当日になると結束してプレゼンテーションを行うことができた。

・意見交換を中心とするプレゼンテーションに変更したため、盛んに意見交換をおこなうことができた班が多かった。現地の教員からもどのように質問したら良い意見がもらえるか等の指導もしてもらえた。

・訪問した 2 つの学校で回数は違うが、日本語クラスの別の生徒に向けて複数回プレゼンテーションを行うことができ，回を追うごとにプレゼンテーションの技術が磨かれていった。

（3）生徒のコミュニケーション能力（英語力等）について

・バディやホストファミリーとの意思疎通はできており、大きな問題は起きなかった。ホストファミリーを決めるときには受け入れ先のリストに書かれてある趣味などの情報をもとにマッチングを行うと，現地でも会話が弾んでうまく行くようである。

・授業の受け方に関しては，どうしても「お客様」の感覚で参加している様子が見受けられたので，現地の高校の授業に関してのレポート作成の課題を設けると日本と現地の授業形態において異なる点を抽出するために主体的に授業に参加すると思われる。

（4）研修の全体的な内容について

・研修全体のプログラムとしては，とても良かった。特に，プレゼンテーションの内容・方法を変更したことで充実した発表と意見交換をおこなうことができた。

・学校体験プログラムは高校によって内容が異なっていたが，どの学校の活動も生徒は満足していたように見える。

（5）研修の日程について（事前準備も含めて）

・プレゼンテーションの指導が中心になってしまい，「海外研修に行くための心構え」を指導する時間や，現地（アメリカ合衆国）の状況について調査することができなかった。シカゴは観光都市ではないが，世界的な美術館・博物館，著名な建造物・都市構造など様々なアカデミックな見所がある。それらの予備知識があれば、語学研修という要素にプラスして進路指導にも役立つのではないかと思われる。

・ホームステイ先との連絡がうまくできない生徒がいた。日本の携帯アドレスにはアメリカからのメールが届かないようである。LINE，Facebook，Gmail でやりとりするのが良い。

（6）ホームステイの様子

・スクールバディは異性の生徒との組み合わせが何組かあり，出発前は心配したが，実際はとても打ち解けることができた。今後も，このような組み合わせの可能性はあり，海外研修に行く生徒には覚悟する必要がある。

・どの家庭も本校生徒の受入れに好意的であり，本当の家族のように暖かく迎えてくれた。

・各家庭によって食事はさまざまであり，朝ごはんを食べずに早めの昼食（ブランチ）で済ましている者がいたり，自分で朝食を買って食べている者もいた。昼食はほぼ，ステイ先が用意してくれた。放課後はバディの部活動や課外活動に参加したり，ショッピング等をしたり，充実した時間を過ごしていた。

4　27 期生に引き継ぎたいこと

・プレゼンテーションの方法については，今年度の先輩の取り組みを参考にして、発表というよりも意見交換を中心とすると活発な活動が期待できる。

・現地においてプレゼンテーションを行う教室の大きさ，相手の人数，時間，回数は学校によって様々なので，出発前に担当の先生と連絡をとっておくと良い。

・本校ではスマートフォンの使用に制限があるが，アメリカの高校生は学習用具として活用しているため，本校の生徒も現地で使用を許可する必要がある。

② オーストラリア（シドニー）

1　概要

・期間　平成 31 年３月 15 日（金）～25 日（月）　11 日間

・参加者　生徒 40 人，引率教員２人（長谷川拓也，荒牧祐貴也）

・高校訪問先　Richard Jonson Anglican School
Shellharbour Anglican College

・日程

	月日	行程
1	３月 15 日（金）	14：40　学校発　19：00　羽田空港着 22：00　羽田空港発　（機中泊）
2	３月 16 日（土）	９：35　シドニー空港着 午前　市内観光（オペラハウスほか） 14：30　Richard Johnson 到着， 15：35　Shellharbour 到着 ホストファミリーと対面　（ホームステイ）
3	３月 17 日（日）	終日　ホストファミリーと過ごす　（ホームステイ）
4	３月 18 日（月）	終日　現地高校で活動 (R)Integration Class（バディクラスの授業参加） (S)ELP(AM),Integration Class(PM)　（ホームステイ）
5	３月 19 日（火）	午前　現地高校で活動 (R)Integration Class (S)ELP 午後　(R)小学生交流 (S)オリンピック選手 Doug Maclennan さんの講話 （ホームステイ）
6	３月 20 日（水）	終日　シドニー工科大学(UTS)にて ・魚沼学プレゼンテーション ・キャンパスツアー，ランチ　（ホームステイ）
7	３月 21 日（木）	午前　現地高校で活動 (R)Integration Class (S)ELP 及び Assembly（修了式を含む） 午後　(R)日本酒工場視察(Sun Masamune Go-shu(豪酒)) (S)Integration Class　（ホームステイ）
8	３月 22 日（金）	午前　現地高校で活動 (R)Integration Class (S)ELP 午後　(R)文化交流会及び修了式 (S)Integration 及び文化交流会 （ホームステイ）

9	３月 23 日（土）	終日　ホストファミリーと過ごす　（ホームステイ）
10	３月 24 日（日）	午前　お世話になったホストファミリーとお別れ 午後　シドニー市内班別研修 18：20　シドニー空港着 21：25　シドニー空港発　（機中泊）
11	3 月 25 日（月）	４：20　羽田空港着 ９：20　浦佐駅着

２　生徒感想

この研修に参加するまでは、海外というのは遠い存在でした。しかし、実際にシドニーに来てみると、事前の勉強はしていても驚くべきことばかりでした。まずは、現地の高校です。生徒一人一人が自分のノートパソコンを持っていたり、時間割を自分の学びたいことに合わせられたりと、日本の一般的な高校とは大きな違いがありました。それに驚いて「オーストラリアの高校は自由だね。」と言うと、バディの子は「どうして？」と不思議そうにしていました。やはり、オーストラリアと日本では、学ぶということへの意識が違っていると感じました。自分の将来に必要な勉強だけをすれば良いのか、それとも様々な教科をバランス良く勉強しなければならないのか、どちらが良いとは一概には言えないようですが、そこに個人の意見を尊重するオーストラリアの国民性が表れているような気がしました。また、環境意識の高さにも驚かされました。シドニーのビーチは日本と比べてゴミがずっと少ないですし、大抵のお店ではレジ袋にお金がかかります。私が本を何冊か買った時も、日本と同じように袋に入れてもらえるのかと思っていると、そのまま袋なしで渡されてしまいました。日本でもレジ袋削減のための取組を行っている企業はいくつかありますが、オーストラリアほど活発ではないと思います。その理由はやはり、オーストラリアの豊かな自然にあるのでしょう。しかし、同じことは日本でも言えると思います。オーストラリアの人々が実際に取り組んでいることは、私たち日本人にもできるはずです。私たちは、彼らの意識の高さを見習わなければならないと感じました。

最後にまとめると、この研修では自分の英語学習に対するやる気の向上と、日本とオーストラリアの違いから生まれた考えるべきことを得ることができました。

（２年生）

３　成果と課題

（１）プレゼンテーションについて（事前準備の様子）

・事前に IUJ の学生に対してプレゼンを行い，表現に関するアドバイスを受けた。

・IUJ の学生へのプレゼン・現地でのプレゼンともに，１グループにつき１人の学生についてもらい，紙媒体での発表形式であった。同様の発表形式であったため，現地ではスムーズに行えた。

（２）現地でのプレゼンテーションについて（本校生の様子，現地の大学生の様子）

・シェルハーバーから大学までは２時間かかるため，シェルハーバーの生徒がつくとすぐに１１のグループに分かれて SGH の発表をスタートさせた。学生は 15 人ほどだったので少ないところでは１班に対して学生が１人だった。すべての班が２回は発表できた。時間が余った班では自分たちから学生に対して質問をしている様子が見られ，積極性が向上していることがわかった。

・ランチの時間は 15 分くらいしかとれなかった。その間に学生から今日の感想をいただいた。みんな気を使ってくれたのか肯定的な意見ばかりだった。生徒の英語は学生にしっかり届いていて，具体的なアドバイスをもらった班もいくつかあった。

（３）生徒のコミュニケーション能力（英語力等）

・現地の授業では，スクールバディが平易な表現に言い換えてくれたので，なんとか理解できていたようである。ただし主体的に取り組めていた生徒は決して多くなく，授業内での主体性が課題として挙げられる。

・文化交流会の準備で，現地コーディネーターに何度か英語の添削をしてもらった。引率教員に頼る場面は全くなく，モーニングティーの時間には現地の高校生と積極的に交流していた。

（４）研修の全体的な内容について

・リチャード・ジョンソンでは，滞在中ほぼすべて Integration，シェルハーバーでは午前は本校生のみの授業（ELP），午後は Integration であった。どちらもそれぞれ良さがある。

・シェルハーバーでは，元オリンピック選手による講演があった。最初は現地コーディネーターによる通訳を交えていたが，通訳なしでも理解できると判断し，途中からは英語のみでの講演をお願いした。聖火リレーで使用したトーチなど，色々と見せてもらえた。

・プレゼンテーションを現地校で行いたかったが，大学での実施であった。結果的には２校に分かれていた生徒たちが一緒にプレゼンに参加することができ，また大学生との交流も意義深かった。

・現地校最終日の文化交流会は，約１時間を本校生に任されるものであった。剣道・空手など，日本の文化を披露できる生徒にあらかじめ声をかけておくと良い。

（５）研修の日程について（事前準備も含めて）

・今回は土曜日に到着し，日曜日に移動の疲れを癒しつつホストファミリーと交流することができた。さらに，最終日前日も休日で，ホストとゆっくり過ごすことができるなど，理想的な日程であった。

（６）ホームステイの様子

・食事に関しては，ほとんどの生徒が口に合っていたようで，それぞれの家庭料理を楽しんでいた。
・現地の家庭は就寝時間が早いこと，電気や水を大切にすることなど，ホームステイでの心構えを旅行者の方や添乗員さん，現地コーディネーターの方から繰り返し指導していただいたので，トラブルはなかった。
・夜勤でホームステイ先の家族と中々コミュニケーションが取れないという生徒がいた。コーディネーターの方から家族に話をしてもらい，こちらの要望を伝えた。
・制服が青やピンクに色移りしてしまった生徒が２名いた。洗濯時の注意点として，生徒に伝えておく必要があった。

4　28 期生に引き継ぎたいこと

・しおりの回収は行わず，その代わり生徒にはその日の出来事を classi のポートフォリオに入力するよう伝えた。家庭によっては wi-fi がない生徒もいたが，学校では wi-fi を使わせてもらっていたので，家でメモに入力したものを学校へ到着後に classi にアップするよう指示した。PC を持っていくと返信がしやすいので，１人は持っていくとよい。
・オーストラリアは食物の入国審査が厳しく，たとえスーツケースの中であっても申告しなくてはいけない。実際にスーツケースを開けるよう言われた生徒はいなかったが，例えば柿の種のナッツなど入国が許されないものもあるので注意が必要。できれば食物は持っていかない方が楽。
・最終日にフェアウェル（文化交流会）なるものがある。リチャード・ジョンソンは 60 分，シェルハーバーは 40 分。参加する生徒は KJ 生とそのスクールバディ。リチャード・ジョンソンは校歌と佐々木君のギターを階段教室で披露したあと，校庭に出てだるまさんが転んだと，助け鬼を行った。ゲームの説明はあらかじめ生徒が考えていたが，言葉だけでなくデモンストレーションで見せることが大切だと感じた。その練習は最終日午前中に 40 分程度時間をもらって行った。本当はこの場で，剣道も見せる予定だったが，前日の全校集会の方が聴衆が多かったのでそちらでやることにした。剣道はとても好評だったし，竹刀を持っていくことも可能なのでできる生徒がいるなら面白いと思う。シェルハーバーでは，校歌（１番のみ）を歌い，その後にゲームを２つ行った。そして空手黒帯の生徒が型を披露し，代表生徒２名がスピーチを行った。シェルハーバーは一貫校であり，幼稚園児から高校生まで幅広い年齢の子がフェアウェルに参加してくれたため，ゲームでは大いに盛り上がっていた。練習の時間は，火曜日の講演後の 40 分だけであったが，役割分担を上手に行い，よく仕上げていた。
・SGH 発表はモニターを使わず紙を用いてグループに分かれてプレゼンした。出発３日前の打ち合わせで，グループでのプレゼンの前に，本校の取り組み概況を説明したほうが良いという話になり，ちょうど雪まつりチームは発表する機会がなかったので，直前だったがお願いした。英語のスライドまで作ってくれてスムーズにグループセッションにつなぐことができた。学生は１グループに対して１名。水曜日はかなり英語にも慣れてきた時期だったので積極的な質疑ができていた。そういった意味で，週の前半にはやらない方がいいと思う。
・服装について，夏服（半袖）を強制するのではなく，臨機応変に半袖・長袖のどちらでも可とするのがふさわしい（紫外線が強いため）。

③シンガポール・マレーシア

1　概要

・期　間　平成 31 年３月 16 日（土）～25 日（月）　10 日間

・参加者　生徒７人，引率教員２人（外山正史，石田幸蒔）

・日　程

	月　日	行　程
1	３月 16 日（土）	13：11 浦佐駅発　15：53　成田空港着 17：55 成田空港発　0：45　シンガポールチャンギ国際空港着 バスでホテルへ （ホテル）
2	３月 17 日（日）	午前　シンガポール国立博物館(シンガポールの歴史の全体像を知る) 午後　オーチャード・ロードにて現地調査①（インタビュー） kok fah farm（水耕栽培農場見学） 夕食後、マーライオンパーク見学 （ホテル）
3	３月 18 日（月）	午前　クボタ精米所見学 新潟県人会の方々と昼食後、魚沼学プレゼンテーション① 午後　JETRO シンガポール事務所 リトル・インディア地区にて現地調査②（インタビュー） 夕食後、マリーナ・ベイ・サンズ見学 （ホテル）
4	３月 19 日（火）	午前　陸路で国境越え マレーシア（ジョホールバル）へ マレー文化村見学 午後　イスカンダル計画見学 （ホテル）
5	３月 20 日（水）	午前　ジョホールバルからグアランプールへ移動 午後　プトラジャヤ　伝統農業農園見学 サイバージャヤ見学 JICA マレーシア事務所で現地での取り組みについて講話 セランゴール川景（ホタル）視察（日本企業の環境保護活動） （ホテル）
6	３月 21 日（木）	午前　マレーシア森林研究所見学 午後　セントラルマーケット視察 ホームステイ先とミート （ホームステイ）
7	３月 22 日（金）	午前　マレーシア工科大学見学　魚沼学プレゼンテーション② 午後　現地大学生と市内研修　生徒２～３名に大学生１名 （ホームステイ）

8	３月 23 日（土）	終日　ホストファミリーと過ごす。 （ホームステイ）
9	３月 24 日（日）	午前　ムルデカスクエア　独立記念広場見学 午後　ポートディクソン（ビーチ散策） 夕食後、研修の振り返り　バスにて空港へ 22:50 クアラルンプール発 （機内泊）
10	３月 25 日（月）	6：45　成田空港着 8：53　成田空港発　成田エクスプレス，新幹線 11：47　浦佐駅着

２　生徒感想

私は今回の海外研修でマレーシアとシンガポールに行きました。今までに何度か海外に行く経験はありましたが、アジアは初めての経験でした。

シンガポールで学んだことは、生活の違いによる価値観の違いについて学びました。これはクボタに行き特にそう感じました。私は今まで日本の製品は質が良く、どこの国でもそのように思われていると信じていました。それはもちろん、農業でも同じで、日本のお米はどこの国の人にとっても美味しいものであると考えていました。ところが実際はそんなことは全くなく、現地の人の食事にあったパラパラした米とは違い、粘り気のある日本のお米は美味しくないのに加え、値段が高いという意識が現地の人にはありました。また、現地の人からすると日本では当たり前のように炊飯器を使いお米を炊いている行為も難しく感じていました。そのようなことを全く考えもせずに日本はシンガポールにお米を売ろうとしていたため、全く結果が出ませんでした。そこに気がついたクボタの人は現地の人のニーズに合わせた方法で日本のお米を売る努力をしていました。

私はこのことから、常に自分が当たり前ではなく、人それぞれの生活があり、考え方があることを改めて考えさせられました。

マレーシアでは三日間ホームステイをして、初めて宗教との生活を送りました。日本は無宗教の国なので、イスラム教のように手でご飯を食べたり、一日中お祈りをしたりする生活とは無縁なため、ホストファミリーの人たちと一緒に宗教との生活を送ったことは自分にとってとても刺激的な経験になりました。今まで１６年間日本で何も考えずに過ごしてきた私にとっては、宗教というのは様々なルールがあり、暮らしを制限されているように感じていました。しかし、実際に過ごしてて彼らは宗教を心の拠り所としていることを知りました。

私は今回の海外研修で様々な考え方、生活に触れて自分の視野が広がったように感じます。この経験を海外で働くかもしれない将来を見据えて、勉強に活かしていきたいです。

（２年生）

３　成果と課題

（１）プレゼンテーションについて（事前準備の様子）

・ＳＧＫやＳＧＪの時間にスライド作成を行った。現地では PC の使用を想定していないの

で、プリントアウトしたスライドを用意し、発表練習を行った。

（２）現地でのプレゼンテーションについて（本校生の様子，現地の学生の様子）

発表はおおむね練習通りにできた。質疑応答の場面では研究内容に関することについてはおおむね回答できたが、日本に関すること（魚沼地域・お盆など）についての質問にはうまく答えられなかった。日本社会や文化についての理解を深めておくとともに、臨機応変に対応できるコミュニケーション力を養う必要を感じた。

（３）研修の全体的な内容について

企業訪問や新潟県人会，マレーシア工科大学訪問など現地の多くの人から様々な話が聞けたことが大きな収穫であった。特にマレーシア工科大学では現地の学生とランチを共にしながら話を伺うことができ、よい経験となった。各事業所では農業や国際支援・経済に関して実際に見聞を広めることができ、それらを魚沼学に活かすことができ有意義であった。

（４）日程について

無理のない計画であった。国内では電車による移動、現地ではバスによる移動がスムーズであった。シンガポールとマレーシア国境の渋滞によるスケジュールの遅れが懸念されたが、実際は日程を変更するような遅れは発生しなかった。

（５）ホームステイの様子

受け入れ先は経験豊富な家庭で安心できる。終日過ごす日では海に行ったり、子どもたちと遊んだりしたそうである。昨年より改善されており、受け入れ先は全て英語でコミュニケーションの取れる家庭であった。体調不良者が１名あったが、終日家庭で安静にさせ健康観察をしてもらった。引率教員の宿泊先から郊外のホームステイ先まで，バスで１時間程かかる。

４　28 期生に引き継ぎたいこと

・本コースはフィールドワークが主目的であるので、意欲を持って主体的に活動に参加してもらいたい。
・マレーシアへの入国手続きは，時期によっては時間がかかる場合がある。
・シンガポール、マレーシアの歴史、文化、経済状況など、特に多民族の共生について学んでもらいたい。

２　魚沼学②

（１）目的

①魚沼の文化・産業についての設定課題及び解決案をより深く考察する。
②課題発見・解決型の演習を通じて、論理的思考力および批判的思考力を育成する。
③魚沼の地域課題を、国連が出している「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」と結びつけ、グローバル課題として捉えて、解決策を考える。

④上記①～③の活動を通じて、主体性、自主性、郷土への愛着を育む。

（２）仮説との関係

【仮説 3】「グローバルな視点を持ち、地域課題について調査した上でプレゼンテーションを行うことにより、共通するグローバルな地域課題に取り組む姿勢を醸成できる」の検証評価対象

（３）内容

・魚沼の地域課題を国連が出している「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」と結びつけ、グローバル課題として捉える。国際文化科は、それらの課題解決の手段として「社会の仕組」や「ビジネス」などの手法を用いての解決を考える。情報科学科は、「自然科学の研究成果」、「技術革新の成果」などを用いての解決を考える。

・成果発表は、日本語によるプレゼンテーションにより行う。

・魚沼の地域課題と関連する世界の地域課題について考察し、日本語論文を作成する。

（４）実施方法

・実施対象：２学年全員

・実施時期：４月～３月

（５）年間計画

	内容
４月	・海外研修の振り返り　オリエンテーション
５月	・ＳＧＨ報告会
６月	・各自の進路希望と関連させて、新たな魚沼の地域課題を設定する
７月	・設定した地域課題の解決策を検討する ・自らのグループの解決策と関連する企業・団体・大学研究室等を模索する ・企業・団体訪問計画 ・東北芸術工科大学訪問
８月	・フィールドワーク（地元企業・団体訪問） ・プレゼンテーション用資料の作成
９月	・魚沼学②　中間発表会 ・中間発表の振り返り、解決策の改善点の検討
10 月	・解決策のブラッシュアップ、プレゼンテーションの手法の研究
11 月	・発表会に向けたポスター・発表原稿の作成
12 月	・学年発表会、最終報告会に向けたポスター・日本語論文のブラッシュアップ
１月	・ＳＧＨ学年発表会
２月	・ＳＧＨ最終報告会
３月	・日本語論文の完成

（６）内容の詳細

＜オリエンテーション＞

・時期　平成 31 年４月

・目的　①　魚沼の地域課題を設定し、それらが国際連合が提示するＳＤＧｓ（持続可能な開発課題）のどの課題解決に当てはまるかということをグローバルな社会課題・ビジネス課題に照らし合わせて広い視野で捉え、解決策を考察する。

②　魚沼の地域課題にはどのようなものがあるか、意見を出し合い、共有する。

③　グループで協働して、身近に存在する課題に解決策を提案する。

・内容　①　魚沼学②について、目標と今後の予定を説明した。

②　魚沼地域を定義し、魚沼の地域課題についてブレインストーミングを行った。

＜ＳＧＨ報告会＞

・時期　令和元年５月

・目的　①　代表グループによる発表を通して、魚沼学①のまとめを行う。

・内容　①　代表の４グループがステージでのプレゼンテーションを行った。

②　外部講師を招き、将来の仕事と生き方についての講演会を行った。

＜課題の明確化と解決策を考える＞

・時期　令和元年５月～６月

・目的　①　魚沼学②として、新たな地域課題を設定する。

②　解決策を考える。

③　解決課題と解決策が「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」のどの部分に該当するか考察する。

・内容　①　進路希望の方向性が類似している生徒をグループ分けし、地域課題を議論した。

②　課題を考えるために、グループごとにブレインストーミングを行った。

＜東北芸術工科大学訪問＞

・時期　令和元年７月

・目的　①　地域支援の専門家である大学教員から、地域課題解決の意義を学ぶ。

② 地元「南魚沼」に対する課題解決策のブラッシュアップ、アイディアの実現に向けた助言を得る。

・内容 ① グループごとに地域課題の解決策を大学生に提示し、問題点や今後の課題等についてのアドバイスをもらった。

② 自分たちの活動プランを３つの視点（やりたいこと，必要なこと，できること）から再度検討し、今後のブラッシュアップに向けたヒントを得た。

＜企業・団体訪問＞

・時期 令和元年８月

・目的 ① 地元企業・団体の事業内容について知り、魚沼についてより深く学ぶ。

② 地域の実情を知る企業・団体から、地域課題に対する解決策についてアドバイスをもらう。

・内容 ① 各グループで設定した地域課題に関係する企業・団体に連絡をとり、施設見学を行った。

② アドバイスを参考に各グループで解決策の見直しを行った。

＜魚沼学②中間発表会＞

・時期 令和元年９月

・目的 ① 課題ごとに解決策についての中間発表を行い、相互に評価し合う。

② フィールドワークでお世話になった地域の方や、外部講師からの講評を参考に、

自分たちのプランの更なるブラッシュアップを図る。

③　評価を踏まえ、ＳＧＨ全国大会に向けて代表グループを選出する。

・内容　①　発表４分、質疑応答５分の持ち時間でプレゼンテーションを行った。

②　地域の方や外部講師を招き、解決策についての講評をいただいた。

＜解決策のブラッシュアップ・プレゼンテーションに向けて＞

・時期　令和元年 10 月～11 月

・目的　①　これまでの取り組みを振り返り、ポスターやプレゼンテーションの改善点を確認する。

②　論理的な解決策、説得力のあるプレゼンテーションとは何かを再確認する。

・内容　①　地域課題についての考察を深めるとともに、課題解決の実行によりどのように地域が変容するのかを具体的に各グループで話し合った。

②　自らのプレゼンテーションがいかに周囲の人を納得させ，新たな解決策に賛同・協力してくれるか策を練った。

＜ＳＧＨ学年発表会＞

・日程　令和元年１月

・目的　①　魚沼学②で取り組んだ地域課題解決のプランを発表し、改善点を確認する。

②　聞き手に訴えかけるプレゼンテーションの手法を確認する。

・内容　①　発表３分、質疑応答３分の持ち時間でポスターを使用してのプレゼンテーションを行った。最終報告会でのステージ発表チームは、パワーポイントによる７分間の発表を行った。

②　主体性、論理性、協働性の３点についてルーブリックによる評価を行った。

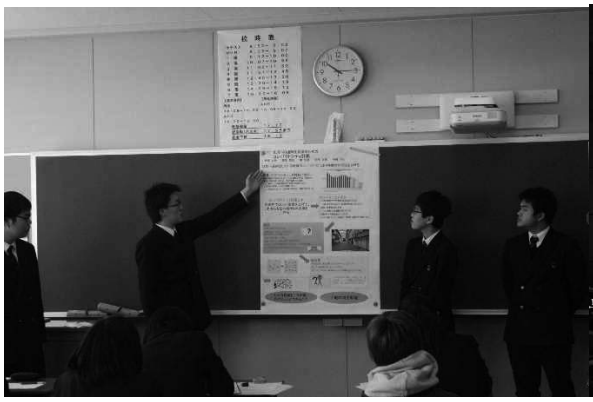
＜ＳＧＨ最終報告会＞

・日程　令和元年２月

・目的　①　魚沼学②で取り組んだ地域課題解決のプランを発表する。

②　地元企業･団体の方や他校の職員を招き、魚沼学②の成果について評価をもらう。

・内容　①　代表グループは体育館で、その他は各教室を会場として発表・質疑を行った。



（７）成果

・東北芸術工科大学でのワークショップを通して専門的な手法について学び、実現性の高い解決策をつくることができた。

・地元企業・団体訪問による情報収集などを通じて地域の現状や課題について具体化し、地域への理解を深めると同時に、地域への誇りや愛着を育むことができた。

・グループでの話し合いや作業を通じて、協働して課題に取り組む姿勢を育むことができた。

・地域の方々、企業、大学の研究室、大学院生など異なる背景（バックボーン）をもった多様な方々との協働と対話による深い学びを通じ、「主体性」など内面的な部分の成長も見ることができた。

・全国ＳＧＨ高校生フォーラム，ＳＧＨ甲子園、クエストカップ等に応募したり、善光寺サミットや北陸新幹線サミット等で他校生徒と積極的に意見交換をし、考えを深めることができた。

Ⅲ　３年生（26 期生）の取組

１　魚沼学②

（１）目的

①世界の地域課題や現代の社会課題に対して関心を向け、個人テーマを設定し、解決策を探究し、考察結果を英語論文にすることで、論理的思考力および批判的思考力を育成する。

②これまでの取り組みを振り返り、整理して表現することで協力いただいた方々に成果を示すとともに、１，２年生の今後の活動に生かしてもらう。

（２）仮説との関係

【仮説 3】「グローバルな視点を持ち、地域課題について調査した上でプレゼンテーションを行うことにより、共通するグローバルな地域課題に取り組む姿勢を醸成できる」の検証評価対象

（３）内容

・魚沼の地域課題と関連する世界の地域課題について考察し、英語論文を完成させる。
・代表生徒が論文の内容に関するプレゼンテーションを行う。
・生徒が主体となり「報告会」を運営する。

（４）実施方法

・実施対象：(英語論文) ３学年全員
　　(英語プレゼンテーション)国際文化科・情報科学科より各１名
・実施時期：３学年４月～５月

（５）年間計画

	内容
４月	・論文推敲・SGH 報告会準備
５月	・SGH 報告会運営・発表
６月以降	・１・２年生に対するピアサポート

（６）内容の詳細

＜論文推敲・作成＞

・時期　平成 31 年４月（完成時期）
・目的　①　世界の地域課題や現代の社会課題に対して関心を向け、個人テーマを設定し、解決策を探究し、考察結果を英語論文にすることで、論理的思考力および批判的思考力を育成する。
　　②　世界の地域課題に目を向け、南魚沼市の課題と比較するなどしながら多角

的に物事を見ようとする姿勢を育てる。

・内容　　２年次後半に調べた内容を元に論文を完成させる。

＜ＳＧＨ報告会企画運営・発表＞

・時期　平成 31 年４月～５月

・目的　①　これまでの取り組みを振り返り、整理して表現することで協力いただいた方々に成果を示すとともに、１，２年生の今後の活動に生かしてもらう。

②　生徒が中心となり、他学年の生徒と協力しながら報告会を企画・運営することを通して、他者と協働して活動することの留意点を学ぶ。

・内容　①　報告会当日の運営計画を立てる。

②　外部の方を招いて活動を紹介するためのプレゼンテーションを行う。

（７）成果

・世界の地域課題に目を向け、その解決手順を参考にしながら自分たちの地元の問題に取り組んだことで地元の現状を知り、将来自分たちの暮らす地域を持続可能な社会にしようという意志が芽生えた。

・県外の SGH 指定校の生徒たちと交流を行うことで、各々の取り組みを紹介しながら、同時に全国の地域が抱える問題とそれらに向けた解決策を共有し、その後の探求の手掛かりを掴むことができた。

・自らの志望大学における入学試験に活用することができた。

Ⅳ．その他

１　各種講演会

①「『魚沼学』が拓く未来　～AI を超える『学び』とは～」

・日時　令和元年５月５日（金）11：20～12：20
・会場　小体育館
・講師　浦崎　太郎　大正大学地域構想研究所　教授
・対象　1学年全員

②「地域連携に関する講演会」

・日時　令和元年５月５日（金）10：50～11：20
・会場　小体育館
・講師　倉田　智浩　財団法人　南魚沼「愛」みらい塾　理事
　　茂木和佳子　財団法人　南魚沼「愛」みらい塾　アドバイザー
・対象　１学年全員

③「ＳＧＨ報告会基調講演会」

・日時　令和元年５月 21 日（火）13：35～14：40　講演会
・会場　大体育館
・講師　日下部　裕美子　東海東京フィナンシャル・ホールディングス顧問
・対象　１・２・３学年全員

④「魚沼学」を学ぶにあたって　課題をプロジェクトを提案する

・日時　令和元年７月４日（金）　15：20～16：10
・会場　多目的教室
・講師　倉田　智浩　財団法人　南魚沼「愛」みらい塾　理事
　　高橋　良一　池田記念美術館　館長
　　関　　聡　　関電気取締役
・対象　１学年全員

⑤「ＳＧＨ最終報告会基調講演」

・日時　令和２年２月６日（木）13：30～14：30
・会場　コミュニティーホールさわらび
・講師　四方　明子　外務省大臣官房総務課　地方連携推進室長
・対象　１・２学年全員

２　勤労体験学習

勤労体験学習に関してはこれまで学校行事として学校全体で保護者の協力のもと実施してきた。昨年度からＳＧＨ事業の一環に位置づけ、学年行事とすることで、生徒がより多くの作業に関われるようにした。また稲刈りに国際大学の留学生を招き、国際交流を図り異なる文化を持つ他者との協働を学んだ。

①　田植え

・日時　令和元年５月 14 日（火）12:30～15:45

・対象　２学年全員

②　草取り

・日時　令和元年７月 19 日（金）15:00～16:00

・対象　１学年全員

③　稲刈り

・日時　令和元年９月 17 日（火）12:30～15:45　（雨天中止）

・対象　１学年全員

３　他校との交流・各種研修・発表会等への参加

①　米沢興譲館高校 SSH 発表会

・期　日　平成 31 年３月 21 日（木）

・会　場　山形県　米沢興譲館高校

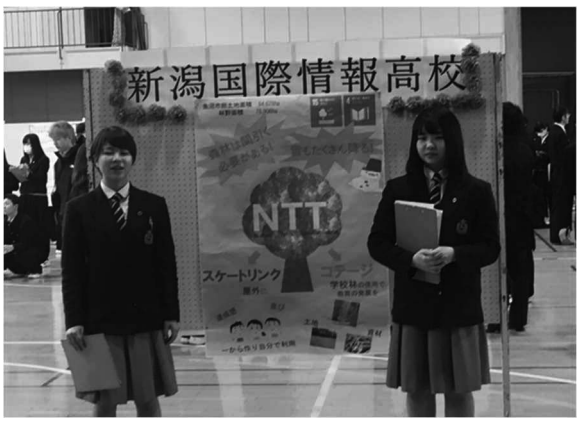
・参加者　生徒８名、引率１名

・内　容　「KJ 上杉プロジェクト」１日目は、生徒交流会および米沢市内の見学。米沢興譲館の生徒と意見交換を行ってきた。２日目は、SSH 発表会に参加し、ポスター発表を行った。

・生徒感想

私たちが今回参加した「上杉 KJ プロジェクト」は、私が想像していた以上に、たくさんのことを学ばせてくれました。１つは歴史です。上杉氏をはじめとする様々な人物、改革が今の米沢をつくり、またそれはとても名誉なものだと知ることができました。また、ポスターセッションでは、計８回のプレゼンの中で、伝えることの難しさを痛感させられました。しかし、回を重ね

るごとに反省をし、だんだんと自分のプレゼン力が上がっているのが実感できました。私が最も印象に残っているのは興譲館の生徒と、このプロジェクトについて意見を交わしたことです。新しく、ユニークなアイデアがどんどんと出て、自分の意見もその中に取り入れられることで、自分たちが地域活性化に関わっていることを実感し、嬉しく思いました。この他にも、人間性や行動力など、これから身につけていきたいと思う学びがたくさんありました。今回の米沢と南魚沼の２つの高校の交流は、これから２つの市が世界へ踏み出す第一歩です。その一歩に参加できたことを、心から嬉しく思っています。これを機に、これからもっと活動を広げていけたら。（２年）



② 北陸新幹線サミット

・期　日　令和元年６月 22 日（土）10：30～16：00
・会　場　長野県　長野県立上田高等学校
・参加者　生徒 10 名、引率教員３名
・内　容　生徒による、プレゼンテーション。基調講演や分科会などに参加し、意見交換を行ってきた。
・生徒感想

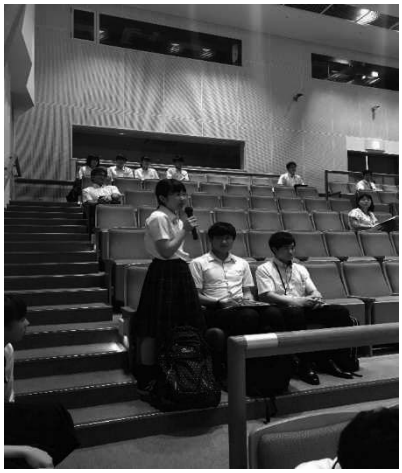
今回の北陸新幹線サミットを通して自分の今できていることとできてないことにはっきりと気づくことが出来た。できていることは人の意見を自分の中に素直に取り入れることだ。プレゼン終了後の質疑応答やディスカッションの時に、自分たちの中では考えもつかなかった意見・改善策いただいた。その意見を否定したり拒否することなく素直に受け止め、チームに持ち帰ることができた。プランをさらにブラッシュアップするためにとても大事なことなので、これが出来て良かったと感じている。またディスカッションでは積極的に意見を話したり、楽しんで参加することが出来てとても有意義な時間を過ごせて良かった。 反対に出来なかったところは正確な質疑応答である。プレゼン後、いくつか質問をいただけたのだが、自分の答えがかなり不明瞭なものだった。やはり、こうなってしまう原因としてはプランについての考えが足りていなかったことがあると思っている。 これからの課題として、自分たちのプランについてチームの中で詳細をさらに話し合い、自分たちのプランをどうしていきたいのか共有していく必要がある。（２年）

③　江風グローバルシンポジウム

・期　日　令和元年７月 14 日（日）
・会　場　新潟ユニゾンプラザ
・参加者　生徒２名、引率教員１名
・内　容　新潟南高校を中心として、課題研究への取り組みを通じた広域交流を目的として開催されたシンポジウムで、代表班によるステージ発表やポスター発表、パネルディスカッションが行われた。本校からは 27 期の２名が見学として参加した。
・生徒感想

私がこの会に参加して一番驚いたのは、研究のレベルの高さでした。高校科学の範囲には収まらないような、まるで大学のような研究を、一から取り組んでいました。パネルディスカッションでは、「課題研究と私たち」というテーマで話し合いが行われ、そこでは、やらされているという意識は危険であること、探求の結果よりもプロセスが大事であること、事実による裏付けをした論理的な展開をしていくことなど、社会の様々な場面でも言えることが多くありました。ポスターセッションでは、質問に自信を持って答える皆さんの姿が印象的でした。どんな質問にも堂々と答え、どんなアドバイスも受け入れるのは、研究に熱心で、自信を持っているからだと思いました。

この一日を通して，、他校の生徒たちの、研究に対する熱心さを学びました。皆さんの姿勢は決して受動的ではなく、積極的なものでした。私も彼らのように自分の研究が好き、役立てたいという熱心さを持ち、積極性を持てるようになりたいです。　（２年）



④　第７回新潟県 SSH 生徒研究発表会

・期　日　令和元年７月 25 日（木）

・会　場　シティホールプラザ　アオーレ長岡　アリーナ

・参加者　生徒４名、引率教員１名

・内　容　本校はＳＧＨ校として４名が参加。午前中は、各校の研究発表や英語によるパネルディスカッションなどがあった。午後はポスターセッションと生徒交流会が行われ、自分たちの企画と本校のＳＧＨの取り組み内容についてポスター発表を行った。発表は英語で行い、活発に質問が出るなど成功をおさめた。生徒交流会では、出題された問題について他校の生徒とチームとなって解決に取り組み、良い刺激となった。

⑤　第４回関東甲信越静地区高校生探究学習発表会

・期　日　令和元年 12 月 15 日（日）

・会　場　立教大学池袋キャンパス

・参加者　生徒 11 名、引率教員２名

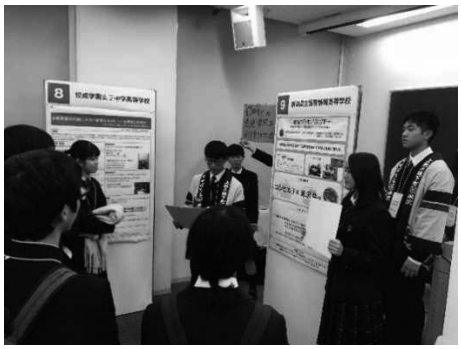
・内　容　文部科学省後援の発表会である。本校の生徒はプレゼンテーション部門とポスターセッション部門に各１チーム出場した。どちらも他校の生徒や立教大学の先生方より活発な質疑応答がなされた。

・生徒感想

上杉 KJ プロジェクトの活動を立教大学で発表した。

昨日の反省をそれぞれ活かし、また数回の発表の中で修正を加えてうまく発表できた。さらに呼び込みを行ったり、小道具を使ったり、タブレットを使ったり、細かいところまで見せ方に工夫を重ねた結果、他校に比べて沢山のお客さんを集めることができて非常によかった。

反省点として、話す担当が変わると聞きづらい、などのご指摘を頂いた。また南魚沼ではなく都市からバスを出して欲しい、などの改善に向けてのご意見も頂けた。賞は取れなかったが有意義な経験になった。　（２年）



⑥　All Japan High School Forum 2019

・期　日　令和元年 12 月 22 日（日）

・会　場　東京国際フォーラム

・参加者　生徒５名、引率教員２名

・内　容　ポスターセッションによるプレゼンテーション発表を行った。英語によるプレゼンテーションであったが、審査員による英語の質問に対しても積極的に受け答えをしていた。午後からはテーマ別の英語によるグループワークがあり、全国の SGH 校とも積極的に交流を行った。

・生徒感想

今回の全国高校生フォーラムでは私にとってとても充実した時間となりました。まず午前中は、ポスターセッションの形式でこれまでの活動内容を発表しました。質疑応答の時は、英語でスムーズに答えることに苦戦しましたが、相手が理解してくれた時はホッとしました。しかし、大勢のチームが発表する中だと自分の声はかき消されてしまい、もう少しはっきりと大きな声で話さないといけないと思いました。また他のチームでは、大事な所は一緒に言うことで目立たせていたので、そういう工夫もおもしろいと思いました。 午後は、参加した高校生と英語でディスカッションを行いました。皆が自分の意見を臆することなく英語で伝えていたので、レベルの高いディスカッションでした。様々な分野の知識も得ることが出来てとても良かったです。これらの経験で、自分の視野がさらに広がったと思います。また来年度も今の１年生や新入生の皆さんに参加して欲しいです。（２年）

⑦　マイプロジェクトアワード関東 Summit

・期　日　令和２年２月９日（日）

・会　場　桜美林大学新宿キャンパス

・参加者　生徒７名　引率１名

・内　容　身の回りの課題や関心をテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通して学ぶ実践型探究学習プログラムの発表の場であるマイプロジェクトアワードに参加した。SGH 活動を通して実際にアクションを起こしたことで成長してきたことをプレゼンテーション形式で発表した。

・生徒感想

本番当日は私たちがトップバッターでした。最初で緊張しましたが、伝わるように大きく、はっきりと抑揚をつけて話しました。マイプロではファシリテーターの方やアドバイザーのかた、聞いている他の生徒さんたちが，私たちが発表している間何度もリアクションをしてくれて、とても話しやすい環境でした。発表のあとに質問もいただきましたが、自分たちにはない新しい視点から意見をいただけたので、とても参考になりました。 また、今回の大会では他の学校の発表を聞くことですごく勉強になりました。身近にある困りごとを解決するためにたくさん動いて活動している人や、部活動の仲間とプロジェクトをして、今回の大会で報告しているチームもあり、こういうこともプロジェクトにできるんだ！と驚きました。また、発表のしかたの重要さにも気づかされました。菌の怖さ、薬の正しい使い方をみんなに知ってもらうためにカードゲームを作ったチームは文字通り情熱的に発表をしていました。原稿を見ずに、大きな声で動きながら、聞いている人が引き付けられてしまうような発表でした。このチームの発表を見て、発表のしかたひとつで聞き手に伝わることの量も違うし、聞き手を楽しませることができることに気づかされました。私たちの SGH の活動はこれが最後でしたが、すごく充実した時間でした。私は将来、仕事をするときに、この活動を通して得た知識を自分の意見としてもち、それを何か役に立つように還元していけたらいいと感じました。（２年）

⑧　クエストカップ　オンライン

「ソーシャルチェンジ部門」　「ソーシャルチェンジイングリッシュ部門」

・期　日　令和２年２月 24 日（月）

・会　場　本校ＬＬＢ教室

・参加者　生徒８名

・内　容　当初は立教大学にてポスターセッションによる大会であったが，急遽オンライン大会となりインターネット上でのプレゼンテーションとなった。通常の発表とは異なり，戸惑う場面もあったが審査員や他校との距離が近いことから，多くのフィードバックを得ることができた。

・生徒感想

It was my first time to make a presentation online, so I was nervous. In my group, there was a team which is consisted of junior high school students in Yamagata

prefecture. I was inspired by watching their presentation. Even there were junior high school students, their way of thinking was creative and revolutionary. I felt glad to have got new perspective.

As for our team's presentation, I got advice from commenters. I thought we needed to put a lot of thoughts into our workshop. I got some ideas. For example, we adopt some relaxing time to English workshop. Also. a commenter advised us that we should have taken advantage of beautiful nature in Minamiuonuma to our workshop. I had been struggling to make our plan stand out until I got the advice. I thought I could make use of it.

When we did some part of our workshop to our contemporary, we could not do well. So I asked commenters to tell us tips on how to manage workshop for kids. One commenter told us that she cherishes three points when she hold her own workshop; to decide what we want children to gain knowledge, to decide what we want them to take home, and to have them learn from experience. From these advices, I thought I should have had them in mind when we held our workshop.

I was so grateful to participate this event because I was able to get new perspectives and great advices. I do appreciate to people I was able to see through this experience. I want to keep trying to make our action plan improving until I can say it successful. （２年）

４　各種コンテスト・大会への参加

①　Change　Maker　Award

・主　催　英語４技能探究学習推進協会

・期　日　令和元年７月

・参加者　生徒３名

②　中高生未来創造コンテスト

・主　催　日本政策金融公庫

・参加者　生徒 41 名

③　JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2018
・主　催　独立行政法人国際協力機構
・参　加　１学年 109 名
・結　果　学校賞

④　英語スピーチコンテスト
・主　催　新潟県高等学校教育研究会　英語部会、新潟県教育委員会
＜地区予選＞
・期　日　令和元年 10 月２日（日）
・会　場　柏崎市　市民プラザ
・参加者　生徒４名、引率教員１名
・結　果　２名が県本選出場
＜本選＞
・期　日　令和元年 11 月２日（土）
・会　場　県立生涯学習推進センター
・参加者　生徒２名、引率教員１名

⑤　第７回新潟県高校生英語ディベート大会
・主　催　新潟県高等学校ディベート教育推進委員会
・期　日　令和元年 10 月 27 日（日）
・会　場　新潟市立高志中等教育学校
・参加者　生徒　17 名　引率教員２名
・結　果　第３位入賞　国際情報高校チーム（中野莉子、多川優、藤巻プリスティン晶麗、三寺璃空、王新平）

⑥　高校生ビジネスプラングランプリ
・主　催　日本政策金融公庫
・参加者　17 グループ　76 名

⑦　全国高校生マイプロジェクトアワード
・主　催　マイプロジェクト実行委員会
＜地区予選＞
・期　日　令和２年２月９日（日）
・会　場　桜美林大学　新宿キャンパス
・参加者　生徒２グループ　６名、引率教員１名

⑧　Quest　Cup　2020
・主　催　教育と探究社
＜クエストオンライン大会＞
・期　日　令和２年２月 24 日（月）
・参加者　ソーシャルチェンジ部門４名、ソーシャルチェンジイングリッシュ部門４名

５　グローバルキャリア講座（海外大学進学コース生対象）

①講　師：Ms. Julie Balamachi　氏　（サクレッドハート大学国際部英語コース担当）
　　：Ms. Karmen E. Mallow　氏　（サクレッドハート大学国際部英語コース担当）
日　時：平成 31 年４月 19 日（金）
内　容：意識啓発講演「海外大学進学の意義」、SHU 大学の紹介（入試および留学生情報）
参加者：海外大学進学コース生

②講　師：Mr. Adam Christie　氏（マウントアリソン大学学生課課長留学生担当）
日　時：平成 31 年４月 27 日（土）
内　容：意識啓発講演「カナダリベラルアーツ大学で学ぶ意義」、MA 大学の紹介
参加者：海外大学進学コース生

③講　師：足立　淳一郎　氏（公益財団法人　グルー・バンクロフト基金　理事）
日　時：令和元年５月 19 日（日）
内　容：意識啓発講演「家族の一員が留学するということ」
参加者：１年生希望者、保護者、海外大学進学コース生

④講　師：入倉萌香、大津幸誠、小林千雪、星野フィオナ、保坂春陽、関悠理、徳永晴紀
　　（平成 31 年３月卒業生）
日　時：令和元年５月 19 日（日）
内　容：海外大学進学コースで学んだこと，海外大学での経験
参加者：１年生希望者、保護者、海外大学進学コース生

⑤講　師：市川　敦子　氏（Education　ＵＳＡアドバイザー）
日　時：令和元年７月６日（土）
内　容：米国留学説明会・共通願書の作成について、個別相談会
参加者：海外大学進学コース生，１年生コース候補生，保護者，中学生

⑥講　師：加井野　絢　氏（代表：留学フェローシップ）
日　時：令和元年７月 16 日（金）
内　容：意識啓発講演「日本人海外大学生が語る主体的な進路選択」及びワークショップ
参加者：１年生、海外大学進学コース生

⑦講　師：北村　美和　氏（EN EuroEducation 代表）
日　時：令和元年 10 月 31 日（木）
内　容：意識啓発講演「欧州留学の意義」
参加者：海外大学進学コース生

⑧講　師：市川　敦子　氏（Education　ＵＳＡアドバイザー）
日　時：令和元年 11 月 17 日（日）

内　容：米国留学説明会・大学検索ワークショップ・個別相談会
参加者：海外大学進学コース生，1年生コース候補生，保護者，

⑨講　師：Mr. Loufti Jirari　氏（デポー大学入試課長留学生担当）
　　：Ms. April Johnson　氏（デポー大学留学生入試カウンセラー）
日　時：令和２年１月 20 日（月）
内　容：講演会　海外大学進学の意義，リベラルアーツ大学で学ぶ意義
参加者：海外大学進学コース生，1年生希望者

⑩講　師：住田　康太　氏（株式会社サイバーエイジェント）
日　時：令和２年３月８日（日）
内　容：海外大学進学およびグローバルキャリアについての啓発講演
参加者：海外大学進学コース生

６　留学生の派遣と受け入れ

留学生の受け入れ
・人　数　1名
・出身国　モンゴル
・期　間　平成 31 年 3 月～令和元年７月

関　係　資　料

1　教育課程表

54 新潟県立国際情報高等学校　平成29年度入学生　教育課程表

国際文化科

教科		科目	標準単位数	第1学年必修	第2学年必修	第2学年選択	第3学年必修	第3学年選択	単位数の計
共通教科	国語	国語総合	4	5					18
		現代文B	4		3		3		
		古典B	4		3		4		
	地理歴史	世界史B	4	4					12
		日本史B	4			◎(4)			
		地理B	4			◎(4)			
		世界史特論＊						◇(4)	
		日本史特論＊						◇(4)	
		地理特論＊						◇(4)	
	公民	現代社会	2		2				2
	数学	数学Ⅰ	3	3					17/12
		数学Ⅱ	4	1	4				
		数学A	2	2					
		数学B	2		2				
		数学総合＊						☆(5)	
	理科	科学と人間生活	2	1					10/6
		化学基礎	2	2					
		生物基礎	2		2				
		総合理科Ⅰ＊			1				
		総合理科Ⅱ＊						☆(4)	
	保健体育	体育	7～8	3	2		2		9
		保健	2	1	1				
	芸術	音楽Ⅰ	2	○（２）					2
		美術Ⅰ	2	○（２）					
		書道Ⅰ	2	○（２）					
	家庭	家庭基礎	2		1				1
	情報	社会と情報	2	1					1
共通教科・科目小計				25	25		22/13		72/63
専門教科	英語	総合英語		5	4		4		23/21
		異文化理解				★　(2)			
		英語表現A＊		2					
		英語表現B＊			2		2		
		上級英語＊					2		
	国際文化	国際理解＊						▲(4)	7/18
		国際地域文化研究＊						▲(4)	
		スーパーグローバル国際＊		2	1				
		グローバルスタディーズⅠ(国際)＊				★(2)			
		グローバルスタディーズⅡ(国際)＊						☆(9)	
専門教科・科目小計				9	9		12/21		30/39
LHR				1	1		1		3
総合的な学習の時間				1	1		1		3
合計				36	36		36		108

（注）・＊は学校設定科目。

・選択科目は、同じ記号の科目から1つを選択する。 但し、☆については、「グローバルスタディーズⅡ（国際）」（9単位）か、「数学総合」（5単位）及び「理科総合」（4単位）のいずれかを選択する。

・ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ国際は、1年次には「情報」と「科学と人間生活」の内容を含んでおり、2年次には「家庭基礎」の内容を含んでいる。

・グローバルスタディーズⅠ（国際）は「異文化理解」の内容を含んでいる。

54 新潟県立国際情報高等学校　平成29年度入学生　教育課程表

情報科学科

教科		科目	標準単位数	第1学年 必修	第2学年 必修	第2学年 選択	第3学年 必修	第3学年 選択	単位数の計
共通教科	国語	国語総合	4	5					17/11
		現代文B	4		3				
		古典B	4		3				
		日本語探究＊						☆(6)	
	地理歴史	世界史A	2	2					8
		地理B	4		3		3		
	公民	現代社会	2	1					1
	数学	数学Ⅰ	3	3					3
	理科	科学と人間生活	2	2					6
		物理基礎	2			◆(2)			
		化学基礎	2	2					
		生物基礎	2			◆(2)			
	保健体育	体育	7～8	3	2		2		9
		保健	2	1	1				
	芸術	音楽Ⅰ	2	○（２）					2
		美術Ⅰ	2	○（２）					
		書道Ⅰ	2	○（２）					
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4					18/16
		コミュニケーション英語Ⅱ	4		4				
		コミュニケーション英語Ⅲ	4				4		
		英語表現Ⅰ	2	2					
		英語表現Ⅱ	4			★(2)	▲(2)		
		英語会話	2				▲(2)		
	家庭	家庭基礎	2		1				1
	情報	社会と情報	2	1					1
共通教科・科目小計				28	21/19		17/11		66/58
専門教科	理数	理数数学Ⅰ		3					29
		理数数学Ⅱ			5		3		
		理数数学特論		1	1		4		
		理数物理				◆(2)		◆（継4）	
		理数化学			2		4		
		理数生物				◆(2)		◆（継4）	
	情報科学	情報科学＊			2		2		7/15
		スーパーグローバル情報＊		2	1				
		ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅠ(情報)＊				★(2)			
		ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅡ(情報)＊						☆(6)	
専門教科・科目小計				6	13/15		17/26		36/44
LHR				1	1		1		3
総合的な学習の時間				1	1		1		3
合計				36	36		36		108

（注）・＊は学校設定科目

・選択科目は、同じ記号の科目から1つを選択する。

・◆については、「物理基礎」（2単位）、「理数物理」（2単位）及び「理数物理」（4単位）の継続履修か、「生物基礎」（2単位）、「理数生物」（2単位）及び「理数生物」（4単位）の継続履修のいずれかを選択する。

・ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ情報は、1年次には「情報」と「現代社会」の内容を含んでおり、2年次には「家庭基礎」の内容を含んでいる。

・2年次英語表現Ⅱと3年次英語表現Ⅱは継続履修とする。

・ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅠを履修した者がｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅡを履修しない場合は、英語表現Ⅱではなく英語会話を履修する。

54 新潟県立国際情報高等学校　平成30年度入学生　教育課程表

国際文化科

教科		科目	標準単位数	第1学年必修	第2学年必修	第2学年選択	第3学年必修	第3学年選択	単位数の計
共通教科	国語	国語総合	4	5					18
		現代文B	4		3		3		
		古典B	4		3		4		
	地理歴史	世界史B	4	4					12
		日本史B	4			◎(4)			
		地理B	4			◎(4)			
		世界史特論＊						◇(4)	
		日本史特論＊						◇(4)	
		地理特論＊						◇(4)	
	公民	現代社会	2		2				2
	数学	数学Ⅰ	3	3					17/12
		数学Ⅱ	4	1	4				
		数学A	2	2					
		数学B	2		2				
		数学総合＊						☆(5)	
	理科	科学と人間生活	2	1					10/6
		化学基礎	2	2					
		生物基礎	2		2				
		総合理科Ⅰ＊			1				
		総合理科Ⅱ＊						☆(4)	
	保健体育	体育	7～8	3	2		2		9
		保健	2	1	1				
	芸術	音楽Ⅰ	2	○（２）					2
		美術Ⅰ	2	○（２）					
		書道Ⅰ	2	○（２）					
	家庭	家庭基礎	2		1				1
	情報	社会と情報	2	1					1
共通教科・科目小計				25	25		22/13		72/63
専門教科	英語	総合英語		5	4		4		23/21
		異文化理解				★(2)			
		英語表現A＊		2					
		英語表現B＊			2		2		
		上級英語＊					2		
	国際文化	国際理解＊						▲(4)	7/18
		国際地域文化研究＊						▲(4)	
		スーパーグローバル国際＊		2	1				
		グローバルスタディーズⅠ(国際)＊				★(2)			
		グローバルスタディーズⅡ(国際)＊						☆(9)	
専門教科・科目小計				9	9		12/21		30/39
LHR				1	1		1		3
総合的な学習の時間				1	1		1		3
合計				36	36		36		108

（注）・＊は学校設定科目。

・選択科目は、同じ記号の科目から1つを選択する。 但し、☆については、「グローバルスタディーズⅡ（国際）」（9単位）か、「数学総合」（5単位）及び「理科総合」（4単位）のいずれかを選択する。

・ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ国際は、１年次には「情報」と「科学と人間生活」の内容を含んでおり、２年次には「家庭基礎」の内容を含んでいる。

・グローバルスタディーズⅠ（国際）は「異文化理解」の内容を含んでいる。

54 新潟県立国際情報高等学校　平成30年度入学生　教育課程表

情報科学科

教科		科目	標準単位数	第1学年必修	第2学年必修	第2学年選択	第3学年必修	第3学年選択	単位数の計
共通教科	国語	国語総合	4	5					17
		現代文B	4		3		3		
		古典B	4		3		3		
	地理歴史	世界史A	2	2					8
		地理B	4		3		3		
	公民	現代社会	2	1					1
	数学	数学Ⅰ	3	3					3
	理科	科学と人間生活	2	2					6
		物理基礎	2			◆(2)			
		化学基礎	2	2					
		生物基礎	2			◆(2)			
	保健体育	体育	7～8	3	2		2		9
		保健	2	1	1				
	芸術	音楽Ⅰ	2	○（２）					2
		美術Ⅰ	2	○（２）					
		書道Ⅰ	2	○（２）					
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4					18
		コミュニケーション英語Ⅱ	4		4				
		コミュニケーション英語Ⅲ	4				4		
		英語表現Ⅰ	2	2					
		英語表現Ⅱ	4		2		2		
	家庭	家庭基礎	2		1				1
	情報	社会と情報	2	1					1
共通教科・科目　小計				28	21		17		66
専門教科	理数	理数数学Ⅰ		3					29
		理数数学Ⅱ			5		3		
		理数数学特論		1	1		4		
		理数物理				◆(2)		◆（継4）	
		理数化学			2		4		
		理数生物				◆(2)		◆（継4）	
	情報科学	情報科学＊			2		2		7
		ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ情報＊		2	1				
専門教科・科目　小計				6	13		17		36
LHR				1	1		1		3
総合的な学習の時間				1	1		1		3
合計				36	36		36		108

（注）・＊は学校設定科目

・選択科目は、同じ記号の科目から1つを選択する。

・◆については、「物理基礎」（2単位）、「理数物理」（2単位）及び「理数物理」（4単位）の継続履修か、「生物基礎」（2単位）、「理数生物」（2単位）及び「理数生物」（4単位）の継続履修のいずれかを選択する。

・ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ情報は、1年次には「情報」と「現代社会」の内容を含んでおり、2年次には「家庭基礎」の内容を含んでいる。

54 新潟県立国際情報高等学校　平成31年度入学生　教育課程表

国際文化科

教科		科目	標準単位数	第1学年必修	第2学年必修	第2学年選択	第3学年必修	第3学年選択	単位数の計
共通教科	国語	国語総合	4	5					17
		現代文B	4		2		3		
		古典B	4		3		4		
	地理歴史	世界史B	4	4					12
		日本史B	4			◎(4)			
		地理B	4			◎(4)			
		世界史特論＊						◇(4)	
		日本史特論＊						◇(4)	
		地理特論＊						◇(4)	
	公民	現代社会	2		2				2
	数学	数学Ⅰ	3	3					17/12
		数学Ⅱ	4	1	4				
		数学A	2	2					
		数学B	2		2				
		数学総合＊						☆(5)	
	理科	科学と人間生活	2	1					9/6
		化学基礎	2	2					
		生物基礎	2		2				
		総合理科Ⅰ＊			1				
		総合理科Ⅱ＊						☆(3)	
	保健体育	体育	7～8	3	2		2		9
		保健	2	1	1				
	芸術	音楽Ⅰ	2	○(2)					2
		美術Ⅰ	2	○(2)					
		書道Ⅰ	2	○(2)					
	家庭	**家庭基礎**	2		2				2
	情報	社会と情報	2	1					1
共通教科・科目小計				**25**	**25**		**21/13**		**71/63**
専門教科	英語	総合英語		5	4		4		23/21
		異文化理解				★(2)			
		英語表現A＊		2					
		英語表現B＊			2		2		
		上級英語＊					2		
	国際文化	国際理解＊						▲(4)	6/16
		国際地域文化研究＊						▲(4)	
		ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ国際＊		2					
		ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅠ(国際)＊				★(2)			
		ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅡ(国際)＊						☆(8)	
専門教科・科目小計				**9**	**8**		**12/20**		**29/37**
LHR				1	1		1		3
総合的な探究の時間				1	1		1		3
合計				**36**	**35**		**35**		**106**

（注）・＊は学校設定科目。

・選択科目は、同じ記号の科目から1つを選択する。 但し、☆については、「グローバルスタディーズⅡ（国際）」（8単位）、または「数学総合」（5単位）及び「理科総合」（3単位）のいずれかを選択する。

・「ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ国際」は、1年次には「社会と情報」と「科学と人間生活」の内容を1単位分含む。

54 新潟県立国際情報高等学校　平成31年度入学生　教育課程表

情報科学科

教科		科目	標準単位数	第1学年必修	第2学年必修	第2学年選択	第3学年必修	第3学年選択	単位数の計
共通教科	国語	国語総合	4	5					15
		現代文B	4		2		2		
		古典B	4		3		3		
	地理歴史	世界史A	2	2					8
		地理B	4		3		3		
	公民	現代社会	2	1					1
	数学	数学Ⅰ	3	3					3
	理科	科学と人間生活	2	2					6
		物理基礎	2			◆(2)			
		化学基礎	2	2					
		生物基礎	2			◆(2)			
	保健体育	体育	7～8	3	2		2		9
		保健	2	1	1				
	芸術	音楽Ⅰ	2	○(2)					2
		美術Ⅰ	2	○(2)					
		書道Ⅰ	2	○(2)					
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4					18
		コミュニケーション英語Ⅱ	4		4				
		コミュニケーション英語Ⅲ	4				4		
		英語表現Ⅰ	2	2					
		英語表現Ⅱ	4		2		2		
			2						
	家庭	家庭基礎	2		2				2
	情報	社会と情報	2	1					1
共通教科・科目小計				28	21		16		65
専門教科	理数	理数数学Ⅰ		3					29
		理数数学Ⅱ			5		3		
		理数数学特論		1	1		4		
		理数物理				◆(2)		◆(継4)	
		理数化学			2		4		
		理数生物				◆(2)		◆(継4)	
	情報科学	情報科学＊			2		2		6
		ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ情報＊		2					
専門教科・科目小計				6	12		17		35
LHR				1	1		1		3
総合的な探究の時間				1	1		1		3
合計				36	35		35		106

（注）・＊は学校設定科目

・選択科目は、同じ記号の科目から1つを選択する。

・◆については、「物理基礎」（2単位）、「理数物理」（2単位）及び「理数物理」（4単位）の継続履修、または「生物基礎」（2単位）、「理数生物」（2単位）及び「理数生物」（4単位）の継続履修のいずれかを選択する。

・「ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ情報」は、１年次には「社会と情報」と「現代社会」の内容を１単位分含む。

２　運営指導委員会の記録

令和元年度　第１回 SGH 運営指導委員会

日　時：令和元年５月 21 日(火)　16:00～17:00
場　所：会議室
出席者：ＳＧＨ運営指導委員
　　桑原　　聡　（新潟大学　教授）（出席）
　　中出　文平　（長岡技術科学大学　副学長）（欠席）
　　石井　玲子　（新潟県立大学　国際交流センター長）（欠席）
　　長沼　君主　（東海大学　国際教育センター教授）（欠席）
　　吉田　　博　（新潟県教育長文科行政課参与）（出席）
　　平賀　重朗　（南魚沼市教育委員会　教育部長）（出席）
　管理機関
　　石橋　弘光　（教育庁高等学校教育課指導第１係　副参事指導主事）

１　開会の挨拶（校長）

２　内容
　①今年度の計画について
　②最終年度について

３　運営指導委員による指導・助言
　[桑原]
　・切実さに欠ける。問題を本気で解決したいという気持ちがもっと欲しい。
　・グループごとにテーマは違っても，結果的に全体として１つの像が見えるようにしたい。
　代表発表者への助言
　　【上杉 KJ プロジェクト】
　・米沢興譲館高校との共通の問題を考える。互いに発展させていき，さらに，KJ と似た他の町や学校と意見をぶつけ共有する。
　・日本中に KJ（魚沼）と同じ問題を抱えている高校はあることが予想されるので，もっとネットワークを繋げることが必要。
　　【雪祭り】
　・雪祭り単発で終わらせるのではなく，魚沼開催のイベント全体に関わっていきたい。最終的には人口問題の解決に向ける。
　　【ジェンダーロール】
　・絵本ではなく，自らが関わって下の世代に見せる。
　・グループに男子を入れることで，また違う意見が生まれるかも。
　　【Water】
　・問いが水問題と洗剤開発の２つにわかれて，洗剤開発の方に流れてしまっている。

・水の問題は世界の問題であり，深く調べることでグローバル化の問題点も見えてくる。

【英語発表】

・英語はとても素晴らしかった。

・切実さに欠ける。自分が魚沼に骨をうずめるつもりで考えるともっと変わってくるはず

[吉田]

・発表が上手（年々上手になっている）。しかし，それはきれいに終わらせよう，完結させようとしすぎてしまっているためなのか。

・きれいじゃないとうまく発表できないという雰囲気。

・３年で完結させる必要はない。次の代に引き継いでいくことを意識する。高校３年間で疑問を持ち，解決できなくても大学などで学ぶ。その成果を地元に還元してほしい。

・わからなくてもいい，苦しんで考える経験が必要。

・未解決のままでも悪くない。疑問を与えて終わり，興味関心に繋げる。

・生徒をグローバルリーダーへ（では，先生はどのくらいグローバルなのか。）

・SGH の活動が終わってから（来年度以降）何ができるかが大事である。

[平賀]

・世界に出たときに地元を語れない人は認められない。

・雪祭りは，企画から参加できたことが良かった。ともに進めることで，問題点や成果を感じることができ，良い経験となっただろう。

・地域のことを，良いことも悪いこともたくさん知った上で，世界に羽ばたいて欲しい。

・この活動を５年で終わりにするのではなく，継続して地元に参加して欲しい。次の学年へと引き継いでいってほしい。

・上杉 KJ プロジェクトのように，歴史を掘り下げることで，その先が見えてくることがあるから，生徒にはさらに勉強していってもらいたい。

令和元年度　第２回 SGH 運営指導委員会

日　時：令和元年 12 月 24 日(火)　14:25～16:40

場　所：会議室

出席者：ＳＧＨ運営指導委員

桑原　　聡　（新潟大学　教授）（欠席）

中出　文平　（長岡技術科学大学　副学長）（欠席）

石井　玲子　（新潟県立大学　国際交流センター長）（出席）

長沼　君主　（東海大学　国際教育センター教授）（出席）

吉田　　博　（新潟県教育長文科行政課参与）（出席）

平賀　重朗　（南魚沼市教育委員会　教育部長）（欠席）

管理機関

石橋　弘光　（教育庁高等学校教育課指導第１係　副参事指導主事）

１　開会の挨拶（校長）

2　内容

①１学年中間発表について

②次年度の探究活動について

3　運営指導委員による指導・助言

①1 学年中間発表について

[石井]

・起承転結がはっきりしていない。骨組みをもっとしっかりするべきである。日本語で考えることも大切で，研究の目的は日本語でもいいのではないか。

・ターゲットがぶれているため，全体に大きなことを言っている感じがある。

・スライドの作り方は改善が必要。文章を入れすぎているので，キーワードにまとめる。発表の基本的なことをしっかりと学ぶ。出典を明確にしてほしい。

・英語は高校１年生にしては頑張っている。しかしピンポイントすぎてメインが分かりにくい。

[長沼]

・ゴールが何なのか分かりにくい。プレゼン力と探究力どちらを鍛えるのか。

・ルーブリックでどういう力を培いたいのか。主体性，論理性，SDGs とのつながりを意識する。

・ルーブリックの項目は狙っているのはそれぞれ何なのか。

・クラスとしてのサポートがあるクラスと距離があるクラスがある。協働性を培う。発表者だけではなく，聞き手の育成も必要である。

・ルーブリックは発表だけで使っているのか？それとも活動の過程でも使っているのか？

→本日使用したものは発表用。発表以外では，学びシート（ポートフォリオ）を使い，評価もしている。(学校)

・テーマ的なポイントが見えづらいグループもある。

・雪祭りなど先輩から引き継いでいるものがとても良い。

・学びのコミュニティーをどのように作っているか？

→１年から２年に進級する際にグループを変えることで学びの共有をしている。(学校)

・全体としての深まりが今後の課題である。

[吉田]

・昨年度も提案したが，テーマが偏っているのに内容が深まっていない。しかし，教育的観点から見て先生方はどの生徒にも同じ苦労をさせたいと考えているかもしれない。ここは，教員が何を目的に教育しているかにも関わってくる。

・国際文化科と情報科学科の差（違い）を感じないが，これでいいのか？

・今回の発表は内容よりも英語がメインと感じたが，原稿ばかり見ているなどプレゼン技術としては未熟である。自分も分かっていない英語を使っていた。

・どうやって子どもたちに背伸びさせるかが教育である。教員はそれをいかにサポートできるかが大切。生徒も教員も英検２級を持っていれば背伸びしやすい。その点で国際情報高校では上手に背伸びをさせている。時にはジャンプもさせている。

・英語科以外の教員の取り組みが特筆すべき点である。

・他校では見られない学校全体での取り組み。先生方のレベルもアップしてきている。

②次年度の探究活動について

[石井]

・外部とのつながりを活用して実践を発展させてほしい。雪祭りや池田美術館との取り組みなど，頭の中だけで終わらせない物を継続してほしい。

・他の国の事例を調べることによって視野を広げさせ，そこから深めていく。

［長沼］

・自己関与をいかに高めるかが課題。

・子どもたちに迎合しすぎなくてもいいのでは？教員が面白いと思うことをシェアしてみては。

・教員の姿を共有する場。

・継続性とともに深めていく。

・教員も参加しながら学ぶ。

・ポートフォリオを貯めて終わりにしない。よりアクティブなポートフォリオを。良いモデルをシェアするなど，生徒同士で吸収しあう。

［吉田］

・予算があったからやれたことは何だったのかを精査する。

・県から予算が出なかったらどうするのか。SGH 指定の５年間で培ったものを活用して６年目を過ごす。この５年間で教員も育っているはずだし，考え方も変わっているはずである。

・今後異動する先生方にも，同じ様なコンセプトを持って人材育成していってほしい。

令和元年度　第３回 SGH 運営指導委員会

日　時：令和２年２月６日(木)　16:00～17:00

場　所：コミュニティーホールさわらび　会議室

出席者：ＳＧＨ運営指導委員

桑原　　聡　（新潟大学　教授）（欠席）

中出　文平　（長岡技術科学大学　副学長）（出席）

石井　玲子　（新潟県立大学　国際交流センター長）（出席）

長沼　君主　（東海大学　国際教育センター教授）（出席）

吉田　　博　（新潟県教育長文科行政課参与）（出席）

平賀　重朗　（南魚沼市教育委員会　教育部長）（出席）

管理機関

石橋　弘光　（教育庁高等学校教育課指導第１係　副参事指導主事）

１　開会の挨拶（校長）

２　内容

最終報告会について

３　運営指導委員による指導・助言

・面白そうなテーマで、生徒自身が楽しんでいることが感じられ、それがよく伝わってきた。発表に表れていた。目標が自分で立てやすいことも大事である。
・1 学年のあるチームの就学率など、調査が大ざっぱだと感じた。gender のチームも日本ともう 1 つの国との比較があったりすると良い。ヨーロッパはもう gender という言葉すら使わなくなってきている。見方が日本的だと感じた。
・調査や結果も、もう少し膨らませると良い。特に 1 年生はやっていることは素晴らしいが、あともう少し欲しい。
・スライドや英語も上手だが、調べ方や結果のまとめが少し残念だ。
・大人が発見できないこと、高校生だからこそのユニークなものがあるといい。型にはまってしまっている感じがした。
・四方さんのような方のお話を高校生のうちから聞けることは素晴らしい。実体験からの話も入っており、このような機会は貴重だ。
・SDGs を核にしている取り組みは 2 年前と比べると進歩している。
・英語による発表は地域の方に知ってもらう目的なら適さない。英語はかなり練習していると思うが、発表のための練習に時間を費やすことはナンセンスだ。今はダブルスクリーンで 2 つの言語を同時に出すことも簡単にできる。
・ｴﾊﾞﾝｽﾄﾝ生に対して話すのなら、魚沼についてもっと基礎的な知識を入れなければならない。論理の飛躍がないようにするといい。事実の示し方が乱暴。識字率の低さは、紛争が原因の場合もある。
・高校生を大人扱いした方がいい。知識が足りないなら入れ、考え方を教えるように。論理的に物事が考えられるように育てる。gender の話をしているのは日本位かもしれない。今は minority の話の方にシフトしている。
・Olympicnic は英語と中国語が強みなら、南魚沼に本当に関連があるのか。上杉 KJ プロジェクトに関しては、米沢は大きい町だが、南魚沼は小さい。関連づけられるのか。バスツアーの行程にもなぜか会津が入っている。
・発表したチームのものは、生徒の活動が点だけで終わらずに、次のアクションへと繋がっているところが良い。そして、アクションをまだ起こしていない生徒たちには、他のチームのアクションの経験が共有されることが大切である。
・縦のつながりはできているか。グローバル人材という時に、世界で活躍しているような有名人ではなくても、身近な人をロールモデルにして、「こんなふうになりたい」という繋がりができると良い。
・卒業して地元から別の場所へ出た生徒たちが、大人になってから地元へ帰ってきて地元を盛り上げたり、帰って来なくても自分が生活してる場で地元を PR できるようになっていく。
・横と縦のつながり、特に縦がどう連携していくかが鍵となる。SDGs のフレームワークを使えば共有しやすい。「発想する」「学ぶ」「広げる」流れが共有できると良い。
・データの見方でも、協働性の向上でも良いが、柱となるような「発達」とその指導方法が 5 年間の集大成として残ると良い。

（英語との関わりについて）外の視点を取り入れるのか、中の視点を発信するのかによる。無理矢理英語にする必要はないが、外の視点を取り入れるためにリソースとして利用する情報や、気づきが英語によるものであったりする。ツールとしての英語の強みが感じられるよう

にするといい。

・子どもたちの多様な視点には驚かされる。行政として、地域の課題解決に入ってもらいたい程だ。例えば現在では雪祭りや、地域の小学生に算数を教えるボランティアに生徒が関わっていて頑張ってくれていることが嬉しい。机上で学ぶのも大切だが、実践してみることも大切である。

・ステージ発表のチームのデータでは、(正しいデータかどうか) 気になる数字もあった。データの掘り下げなど、より実践的にまとめられると良い。

・プレゼンテーション力や、チームで取り組むことに必要なコミュニケーション力はアップしていると感じる。グローバル人材を育てるには、英語を使う場や発表する場を作ることが大切であると思う。今後も地域に根ざした学校として地域と一緒に邁進してもらいたい。

・中間発表も見てきたが、学校をあげて取り組んでいることが感じられる。文科省表彰も喜ばしいことである。敬意を表する。

・創立当初から今まで、立派な伝統が創られている。職員も心を一つにして子供たちのためにやっている。そして子供たちもそれに応えている。先生方から「教わる」のではなく、「一緒に」または「自分たちで」やろうとしている。「学ぶこと」について、5 年間でこの学校ならではの伝統を創ってきた。それを大切にして欲しい。

・imprinting という言葉があるが、生徒も先生も「(KJ の) 高校生はこういうものだ」という伝統ができている。先生方の大きな力があったと思う。他の学校と違うこの学校での imprinting がある。その中で子供たちが育っている。教師集団にはこれからも子どもたちのために手抜きせず、空気を創っていってもらいたい。

３　視察先一覧

視察日時	視察先	視察研修名	視察参加者
令和元年６月22日（土）	長野県上田高等学校	北陸新幹線サミット	丸山　実花 松本　琢 石田　幸蒔
令和元年７月14日（日）	新潟ユニゾンプラザ	江風グローバルシンポジウム	青山　慎吾
令和元年12月２日（月） ～12月３日（火）	金沢大学付属高等学校	先進校視察	南雲　隆 田邉　康彦
令和元年12月15日（日）	立教大学池袋キャンパス	関東甲信越静地区高校生探究学習発表会	丸山　実花 田邉　康彦 外山　正史
令和元年12月22日（日）	東京国際フォーラム	All Japan High School Forum 2019	浦壁　裕 佐藤　久美子
令和２年１月14日（火） ～１月15日（水）	福井県立丸岡高等学校 福井県立高志高等学校	先進校視察	丸山　智恵子 菅井　亮佑

4　新聞報道

掲載日:2019年06月01日，面名:中越，記事ID:KIJ20190601_M001800100AK09003

世界的視野で課題発見

南魚沼の高校で学習発表会

国際情報高校の生徒が地域の課題などを学習した成果を発表した＝南魚沼市浦佐

南魚沼市の国際情報高校は、2年生が地域の課題などをテーマにグループ学習してきた成果の報告会を開いた。2年生は、地元の雪まつりの活性化や地球規模の水問題などについて発表した。

同校は、文科省から世界的な視野で、課題の発見や解決に取り組む「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」事業の指定校に選ばれている。研修の経費の支援を受け、SGHの授業をカリキュラムに組み入れている。

発表会は21日に開かれた。2年生134人は1年生の時から、25ほどのグループに分かれ、それぞれが決めたテーマを学習してきた。この日は代表に選ばれた4グループが発表した。

南魚沼市の雪まつりをテーマにしたグループは、来場者を増やそうとイベント進行などに参加。「地元の問題を自分の問題として捉えられるようになった」と報告した。

水問題を調べたグループは「世界には川の水をそのまま飲んでいる人や、水くみで学校へ行けない子どももいる」と指摘。「人々の水に対する意識を変える必要がある」と強調した。

SGH実行委員長の徳永耕介さん(16)は「学習を通じて、世界中のさまざまな問題を高校生のうちから正しく理解することが重要だと思った」と話していた。

掲載日:2019年11月27日，面名:ふＪ３，記事ID:KIJ20191127_M003100100LC02001

最前線リポート

なぜ？なに？教育改革 <16>

地域と連携して探究学習

未来の人材創出コンソーシアム（南魚沼市）

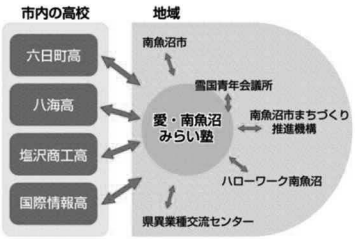
新学習指導要領のポイントの１つに挙げられる「探究的な学習」の実践として、学校の周囲の地域と連携して学習を進める事例が多く見られる。自分の関わりのある場所について調べることで生徒がモチベーションを持ちやすく、また地域の側でも人手不足や活性化対策で若者の力に期待ができるという背景もある。

企業、行政がサポート

南魚沼市で10月発足した「未来の人材創出コンソーシアム」は、市内の４高校（六日町高、八海高、塩沢商工高、国際情報高）を、地元の企業や行政機関が連携してサポートする新しい取り組みだ。

コンソーシアムの核となるのは2017年に設立された「愛・南魚沼みらい塾」。市内で観光業に従事しながら活動する倉田智浩理事はその役割を「地域と学校をつなげるプラットホーム」と説明する。

コンソーシアムのイメージ



愛・南魚沼みらい塾の資料を基に作成

仮設道路整地のために、地元建設業協会の講師（右側）からローラーの使い方を教わる塩沢商工高生＝６月、南魚沼市（同校提供）

「みらい塾」の活動の出発点になったのは、15年に文科省からスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けた国際情報高（佐藤一彦校長）に、研究対象となるような地元の企業・人を紹介したことだった。また、他校でもキャリア教育やインターンシップのコーディネートをしてきた経験が、さらに行政などの公共団体も含めたコンソーシアム設立につながった。

現在もSGHの探究学習として、地域の課題や問題解決策を考える「魚沼学」に取り組む国際情報高では、週に１回、コンソーシアムの構成団体から講師を招いて指導を受けている。

昨年、同校の１年生は、毎年開かれている「南魚沼市雪まつり」の活性化を、市から課題として投げ掛けられた。難題に挑戦した11人のグループは、プラン作り、市長へのプレゼンテーション、チラシ制作などを青年会議所のメンバーから教わりながら１つ１つこなし今年２月、結果として例年より多くの参加者を集めることに成功した。

プレゼンテーションの方法について地元の講師から指導を受ける生徒たち＝21日、南魚沼市の国際情報高

現場でプロの技学ぶ

同校SGH課長の遠山貴洋教諭は「地域と関わり、大人と接したことで生徒の考え方に変化が出てきた」という。生徒のポートフォリオ（学習過程の記録）を分析した同課の馬場隆史教諭は、活動後の記述に「自分」「考える」「できる」などのキーワードがより強く表れていることに注目し、「主体性や地域へのアイデンティティーがうかがえる」と学習の手応えを感じている。

14年度から、土木建設系の選択授業を導入した塩沢商工高（中川誠一校長）は、講師を企業から招いたり実際の建設現場で実習を行ったりと、当初から地元建設業界との連携を掲げた学習展開をしている。人手不足に悩む業界の要望を受けた試みで、生徒は実際に現場にあるものと同じ機器を使い、最新の技術に接することができる。

災害現場復旧のフィールドワークでは、グループで復旧手順を検討した。担当の酒井大輔教諭は「アドバイスを受けながら、生徒同士で意見を交わし合うことで主体的・対話的でより深い学びにつながっている」と話す。

来年度から学科を再編整備し「地域創造工学科」がスタートする。選択授業がコース制となり、新たな実習カリキュラムでは、コンソーシアム参加団体との連携を一層進めたい意向だ。

愛・南魚沼みらい塾の倉田理事は今後、市内４高校それぞれで進める連携に期待を持っている。「これからは地域も学校も企業も一緒に変わっていかなければならない。その事例になれたらと思う」と言葉に力を込めた。

(C)新潟日報社

日本教育新聞　2019年（令和元年）5月20日（月曜日）

地域の課題解決へ探究活動

企業から助言受け

廃棄農作物の資源化／イベント来場者増やす方策…

平成27年度から文科省のSGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定されている新潟県立国際情報高校（佐藤一彦校長、生徒390人）は地域の課題解決策を提案する探究活動に取り組んでいる。この活動は学校設定科目で、地元企業に助言を受けるなどしながら生徒が研究を進めるもの。中間発表を通して研究を段階的に深めていったり、他教科で関連する内容を扱ったりする手法を取っている。

新潟県立国際情報高校

発表は数回設け段階的に

思考深め、主体性高まる

探究活動は、同校が南魚沼市にあることから、「魚沼学」と名付けた。生徒はグループを組んで、研究テーマを設定し活動。廃棄される農作物を材料にしたせっけん作りや外国人が住みやすい街にするための手だてを考案するなどしてきた。

今年2月の地元の雪祭りでは、主催者である青年会議所のメンバーから依頼を受け、1年生11人が来場者を増やす方策を模索。アトラクションなどの企画を練った。昨年6月ごろから、取り組みをスタート。主催者側は、生徒の企画に合った助言者を学校に派遣するなどして内容充実を後押し。生徒が立てた複数の企画が実現した。担当の嘉山貴洋教諭によると、来場者数も例年に比べ多く、主催者側から感謝を受けたという。

探究活動は1・2年生で週1～2時間実施。1年生の4～9月は地域の課題を探る準備段階として位置付け、他教科の授業でも批判的な思考やプレゼンテーションの技能を身に付ける。

例えば、数学の授業で統計について学ぶ際には、探究活動で参考にする資料を扱う。これに合わせて、客観的なデータを根拠にして、地域の課題を考えるように指導する。

1年生の秋からは、地域の課題解決策を検討。2年生では全員が企業や市役所を訪問し、生徒の考えた課題解決策が実現できるかなどについて助言を受ける。

研究内容を発表する機会は1年間に複数回設けている。1・2年生が合同で発表会を開いたり、1年生が海外研修に行った時には外国の高校生などに向けて発表したりしている。発表を聞くに当たって、積極的に質疑応答をするように指導し、その後の反省から各グループが研究を深めることを狙う。

探究活動は平成25年度に始め、当初の研究期間は3カ月だった。活動を重ねる中で、研究期間を延ばし、発表機会を複数回設けると教育効果が高まることが分かった。各発表に向けて段階的に研究を深めていくことが生徒の思考力の成長にもつながるという。

探究活動に力を入れてからの生徒の変化について、佐藤校長は「生徒が主体的に意見を発言するようになった。講演会などでも質問があるか聞くと、多くの挙手がある」と話す。

生徒が研究課題に強い興味を持ち、進路選択に影響することもあるという。こうした探究活動の意義について、同校では1年生と保護者に説明する集会を開いている。5月5日に開いた集会では南魚沼市長や連携先の大学関係者らが講演するなどした。

11月に開かれた探究活動の成果発表会の模様。1・2年生が発表内容を基に意見交換を重ねた

各教科とつなげ、プレゼン力も養う

海外大学進学コースを設置

同校は25年度から海外大学への進学を目指すコースを2・3年生で設けている。定員は10人程度。全て英語で行う学校設定科目の授業を2年生で週4時間、3年生で週9時間実施する。指導には主に日本人の教員1人とALT1～2人が当たる。

同コースの授業ではグループワークなどに力を入れている。海外大学で学ぶ基礎をつくることを目指し、ディスカッションで意見を述べる姿勢などを育てている。海外で活躍する社会人を授業に招く他、他教科の教員が日本語で専門分野について説明したことを英訳するといった活動も行っている。3年生になると、それまでの学習と並行して、出願書類の作成などに取り掛かる。

海外大学に出願する際には自分自身について表現するエッセーが必要になる。同コースの生徒は自分自身を見つめるために、学校外のワークショップやボランティアに参加。外国人ツアー客のバスで日本のマナーを紹介するなどの活動をする生徒がいるという。

放課後にはTOEFLの補習も実施。昨年度の卒業生は延べ31人が米国やカナダの大学に合格した。

同校の大学進学率は9割ほど。昨年度卒業生は文理合わせて国公立大学に50人が進学した。

国際情報高校　文部科学大臣優秀教職員表彰

グローバルな視点で課題発見・解決する若い力を育てています

1月14日、東京大学（東京都文京区本郷）の安田講堂で、県立国際情報高校（佐藤一彦校長）の教職員組織「グローバル部SGH課及び推進委員会」が、地域との連携・協働を進め、結果を伴う開かれた教育課程を実現したとして、令和元年度文部科学大臣優秀教職員表彰を受けた。

同校は、平成27年から5年間、文科省による「スーパーグローバルハイスクール」事業の指定を受け、国連が進めるSDGs17の目標を踏まえた活動に取り組んでいる。

地域の課題を見つけ、考え、もの作りも含む解決策を見出すという内容で、第69回南魚沼市ゆきまつりでは、来場者増という課題に取り組み、企画から運営までを行った実績がある。

また、テレビ東京のCSR活動の一つとして参加する探求型学習事業にも関わり、「バナナは地球を救う」と題して、ザンビアのバナナと魚沼和紙の製法を結び、バナナペーパーと同局のマスコット「ナナナ」を合わせた取材手帳の商品化も実現した。

同高校は、世界に通用する人材育成を目指し、批判的思考、創造力、意思疎通、協働といった能力や考え方を育てている。

英語力向上という点でも実績があり、平成31年3月末時点で、英検2級以上の取得率が46・2%を記録。佐藤校長によると高い比率だという。

同指定が今年度末で終わることから、2月6日午後、コミュニティーホールさわらびで、「SGH最終報告会」が行われる予定。

佐藤校長をはじめとするSGH課教員を含む全教員42人が、知力と活力あふれる高校生を育てている

新潟県立国際情報高等学校

SGH通信

第8号　令和2年3月16日発行

～「雪国＊米どころ＊魚沼」の世界発信を通じた人材育成～

校長挨拶

新潟県立国際情報高等学校長　佐藤　一彦

文部科学省は、ＳＧＨ事業について、「将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する」ものであり、英語が単にできるようになればいいというものではなく、「社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーションの能力、問題解決力等の国際的素養」も身につけなければならないとしています。

令和２年２月６日(木)南魚沼市浦佐のコミュニティーホールさわらびで、ＳＧＨ最終報告会を開催しました。代表生徒が５年間のＳＧＨ活動を振り返って、魚沼学や今後、生徒が目指していく人間像などについてのプレゼンテーションを行った後、外務省大臣官房総務課地方連携推進室長の四方明子様から「グローバル社会において日本が進むべき未来－地域の視点も含めて考える－」という演題で御講演をいただきました。その後、１、２年生代表チームが英語や日本語で研究成果の発表を行いました。当日は代表チームを除くすべてのチームが午前中に各教室で、ポスター発表を行い、どのチームも堂々とした素晴らしい発表でありました。２月２日(日)から８日(土)まで、当校創立以来の姉妹校であるアメリカ合衆国のエバンストンタウンシップ高校の生徒の皆さん 20 人とお２人の引率の先生が滞在しており、生徒の発表を聞いていただきました。

これからの学校教育においては、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指す理念のもと、すべての生徒に、社会における課題を見いだし、その解決策を考え探究を深める未来の創造者・開拓者になってほしいと思っています。自分の居場所から離れることによって、人生のモデルとする人に出会ったり、新たな発見があったりすることがあります。「スーパーグローバル国際」及び「スーパーグローバル情報」の学校設定科目等の時間を使い、生徒は、ＳＧＨ講演会等で各専門分野に造詣の深い講師の方から示唆に富むお話しをお聞かせいただくとともに、フィールドワークなどで実際を学び、かけがえのない体験をしてきました。５年間の活動成果をふまえ、本校の探究活動をこれからも継続、発展させてまいります。

なお、御報告ですが、本校のＳＧＨ課及びＳＧＨ推進委員会が令和元年度新潟県教育委員会及び文部科学大臣優秀教職員組織として表彰されました。受賞理由は「地域との連携・協働を進め、結果を伴う開かれた教育課程を実現した」というものです。ＳＧＨ活動については、ＳＧＨ課長の遠山貴洋教諭を始めとする推進委員会が中心になり教職員全員が携わっておりました。これもひとえに、弛まぬ努力を続ける生徒及び関係各位の御指導、御助言のお陰であります。心から感謝申し上げます。

本通信は、主に令和元年度に実施してきた活動の概要です。ご一読いただければ幸いです。

昨年３月からの活動を紹介します。

１　上杉 KJ プロジェクト

戦国時代の上杉家に由来のある南魚沼市と山形県米沢市の２つの高校，国際情報高校と米沢興譲館高校（共に KJ！）が生徒交流を含め，互いのＳＧＨ・ＳＳＨ活動を盛り上げるための「上杉 KJ プロジェクト」が始まりました。

その第１回目として，３月 21 日（木・祝）に本校から 26 期生４名，27 期生４名が米沢興譲館高校のＳＳＨ発表会に参加してきました。交流会では１年生が互いの高校を紹介し，今後のプロジェクトの発展について高校生同士が意見を出し合っていました。

２　28 期生（1 年生）のＳＧＨ活動キックオフ

５月５日（日）には、南魚沼市林茂男市長様や大正大学の浦崎太郎先生を本校小体育館にお招きし、28 期生の「ＳＧＨ活動キックオフ」の講演会を行いました。ＳＧＨ活動の核を形成する探究活動がなぜ必要なのか、大学入試にとってどのように必要なのかということを講演していただきました。28 期生も国際舞台で活躍できる人材になることを目標に様々な活動に取り組んでいます。

３　SGH 報告会

５月 21 日（火）に本校にてＳＧＨ報告会を開催しました。報告会には多くの保護者の方から御参加いただき、ありがとうございました。

第一部の基調講演では東海東京フィナンシャル・ホールディングス顧問の日下部裕美子様より、「自分の仕事と生き方を創り、デザインしよう！」という演題で御講演をいただきました。

第二部では生徒による取り組みの報告が発表され、その内容について最後に本校ＳＧＨ運営指導委員の桑原聡様より御講評を頂きました。

２年生の成果発表では、３チームが発表しました。南魚沼市雪まつり実行委員会の皆様との実践報告と、「レインボーマツコ」のジェンダーロールについての研究、「ビューレット設備隊」は洗剤を工夫して川の環境汚染を防止する実践を発表しました。

4　北陸新幹線サミット

6月 22 日（土）の長野県上田高校主催の「北陸新幹線サミット」に３年生２名，２年生８名が参加しました。この会では「いのち・健康／地域創生／グローバル課題」の 3 つのテーマに分かれて発表し、その後討論を行いました。全国のＳＧＨ校とＳＳＨ校が集まり、お互いの地域が抱える問題を協働して考えることで新たな視点が持てるようになりました。

5　江風グローバルシンポジウム

7月 14 日（日）新潟南高校が主催する「江風グローバルシンポジウム」に代表生徒が参加してきました。午前中は、各校の研究発表や英語によるパネルディスカッションなどがあった。午後はポスターセッションと生徒交流会が行われ、自分たちの企画と本校のＳＧＨの取り組み内容についてポスター発表を行った。発表は英語で行い、活発に質問が出るなど成功をおさめた。生徒交流会では、出題された問題について他校の生徒とチームとなって解決に取り組み、良い刺激となったようです。

6　スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会

7月 25 日（木）に、新潟県スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）生徒研究発表会がアオーレ長岡にて開催されました。本県のＳＳＨは長岡高校をはじめ５校が指定を受けています。そこに２７期生から６月のＳＧＨ報告会で発表したチームを中心に４名が参加してきました。

午前中は、ステージでの各校生徒の研究発表がありました。また、第一部では英語の発表、英語によるパネルディスカッションなどがあり、各校とも工夫を凝らした研究発表でした。

午後は、ポスターセッションと生徒交流会が行われました。ポスターセッションではＳＧＨ報告会で発表したチーム「Twolinkers」が、自分たちの企画と本校のＳＧＨの取り組み内容についてポスター発表を行いました。発表は英語で行い、ポスターデザインも含めて工夫を凝らして臨みました。そのため発表は多くの人が集まり、活発に質問が出るなどして、成功をおさめました。

生徒交流会では出題された問題について、他校の生徒とチームとなって解決に取り組みました。

7　東北芸術工科大学訪問

7月 30 日（火）に 2 年生が、山形市の東北芸術工科大学を訪問しました。この大学はコミュニティーデザイン学科を設置し，地域を創る大学として，平成 28 年より KJ 生に指導をいただいています。当日は，山形県立米沢興譲館高校の生徒も参加し，互いに探究活動の成果を発表し，交流も深めてきました。

8　東京研修

8月1日（木)、2日（金）の1泊2日で、1年生は東京方面に研修に行きました。グローバルに活動する企業や最先端の研究に取り組む大学、そして様々な分野でご活躍されているＫＪ卒業生の皆様からの熱いお話と、とても刺激的な内容の研修でした。１日目は企業での研修を各場所で研修しました。グローバル企業であるヤフー株式会社、日立システムズ、などでの研修は、実際に企業を訪問し、その雰囲気と直接お話を伺うことによって企業の課題解決について知識を深めることができました。また、夜には、日本放送協会（ＮＨＫ）に勤務されている金澤幸生様（12 期生）からお話いただきました。その後、「ＯＢ・ＯＧと語る会」を実施しました。各方面でご活躍の 12 人の卒業生の皆様から、ＫＪ時代の過ごし方や現在のキャリア形成に関わるご経験をうかがい、とても有意義な時間を過ごしました。２日目の明治大学中野キャンパスで模擬講義をしていただきました。その後、文系・理系ごとで、模擬講義、さらに、各クラスに分かれて、ＳＧＨ活動のプレゼンテーション行い、指導をいただきました。

9　SGH フィールドワーク・「魚沼学②」中間発表会

9月 10 日（火）に「魚沼学」の2年生中間発表会を行いました。この発表会に先立ち、主に8月 23 日（金）にフィールドワークとして、地元の企業・団体様を訪問しました。そこでは、現実の社会や研究分野でどのようなことが行われているかということと、自分たちの解決課題のギャップを生徒達は、知ることとなりました。

この活動を受けて、修正や手直しを施して中間発表に臨みました。この発表を経て、生徒達はさらなる高みを目指して、探究活動を重ねていき，２月６日（木）に行われるＳＧＨ最終報告会に向けて，さらなる探究を深めていく気持ちを高めました。

１０　KJ―CT（魚沼学①）中間発表

４月より取り組んできた１年生のＫＪ－ＣＴ（ＫＪクリティカル・ロジカルシンキングプログラム）では，魚沼にあるさまざまな課題から解決策を考え、それらが、国連から出ている「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」のどの目標をクリアーするか、ということを探究しています。９月 13 日（金）にはこれまで調べてきた中間報告のプレゼンテーションを行いました。どのグループも発想に富んだものが多くありました。８月に東京研修に行った際に企業の方々や明治大学の方からさまざま指導やヒントをいただたいたことを踏まえ，最終発表に向けて更なるブラッシュアップを図りました。

１１　ＮＩＩＧＡＴＡ高校生マイプロジェクト

12 月 14 日（土）、15 日（日）に南魚沼市で行われた NIIGATA 高校生マイプロジェクトに、２年生から「上杉 KJ プロジェクト」の６名，１年生からは「雪祭り活性化プロジェクト」の生徒が参加しました。本校と阿賀黎明高校、佐渡中等教育学校、米沢興譲館高校など県内外から探究活動を行っている高校生が参加し、各校の発表と交流会を通じて、学びを深めました。特に「上杉ＫＪプロジェクト」は米沢興譲館高校と地域の観光振興について協働プロジェクトを現在進めており、今後の活動について両校の生徒が直接話し合うことができました。この機会で得たものを今後の活動に活かして欲しいと願っております。

１２　第４回関東甲信越静地区高校生探究学習発表会

12 月 15 日（日）に立教大学池袋キャンパスで開催された、第４回関東甲信越静地区高校生探究学習発表会に、プレゼンテーション部門の５名とポスター発表部門の６名の生徒が参加してきました。

午前は、プレゼンテーションのチームが地域の水問題の解決策について発表しました。

午後は米沢興譲館高校と連携した南魚沼と米沢の観光振興についてポスター発表を行いました。２学年からは国際文化科から「beaulet 設備隊」、情報科学科より「KJ プロジェクト」の２チームが発表を行いました。

結果は、残念ながらどちらも入賞を果たすことができませんでしたが、今回の経験と他校生徒の発表から得た知見をもとに、２月の最終発表会に向けてさらに探究を深めていって欲しいと考えています。

１３　All Japan High School Forum 2019

全国のＳＧＨ校，ＷＷＬ校が東京国際フォーラムに一堂に会して，英語によるポスターセッションが行われました。本校からは２年生の「レインボーマツコ」のチームがＫＪの代表として発表してきました。午後からは参加した高校生同士で英語によるディスカッションを行い，全員が自分の意見を臆することなく英語で伝えることができました。全国規模の発表ということもあり，生徒たちは様々な分野の知識も得ることができ，自分達の視野をさらに広げることができました。

１４　SGH 最終報告会

平成27年度から文部科学省に指定を受けて活動をしてきましたスーパーグローバルハイスクールですが、本年度をもって終了します。その最終報告会が、２月６日（木）に本校および「さわらびホール」にて行われました。生徒達は、本年度探究した内容を英語で発表しました。来年度以降も本年度の活動を生かし、探究活動を継続していきます。

１５ エバンストン高校来校

２月２日（日）から２月８日（土）までアメリカエバンストン高校の生徒、先生が総勢２２名で本校を訪問してくれました。エバンストン高校とは、十数年の交流があり、毎年３月に１年生が海外研修で訪れている学校です。本校生徒のお宅にホームステイさせていただき、異文化交流という貴重な経験をさせていただきました。ホームステイを受け入れてくれた保護者の皆様、御協力誠にありがとうございました。感謝申し上げます。

１６　マイプロジェクトアワード関東 Summit

身の回りの課題や関心をテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通して学ぶ実践型探究学習プログラムの発表の場であるマイプロジェクトアワードが２月９日（日）に桜美林大学新宿キャンパスにて行われました。本校からは「観光産業を盛り上げる」,「子供たちにジェンダーロールについて考えてもらう」という２つのプロジェクト報告を行ってきました。

１７　クエストカップ　オンライン

２月 24 日（月）にクエストカップ「ソーシャルチェンジ部門」,「ソーシャルチェンジイングリッシュ部門」にそれぞれ本校２年生の「Hey!Doctor!」と「Olympicnic」の２チームが参加しました。当初はポスターセッションによる大会の予定でしたが，急遽オンライン大会となりインターネット上でのプレゼンテーションとなりました。通常の発表とは異なり，戸惑う場面もありましたが審査員や他校との距離が近いことから，多くのフィードバックを得ることができ，今年度の最後の発表の場として大変有意義な日となりました。。

担当教員

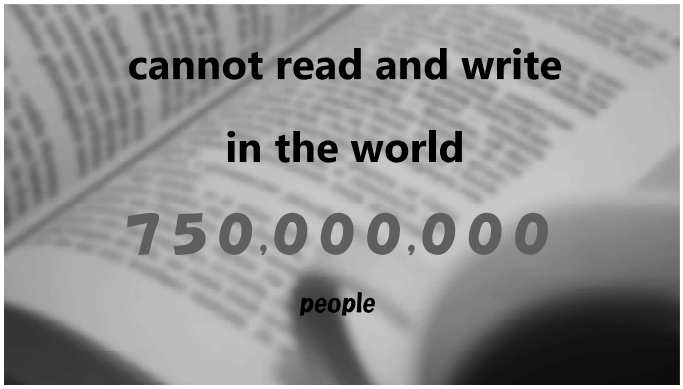
・教頭
　田邉康彦
・学習活動領域
　進路指導主事　長谷川暁子
・ＳＧＨ課
　課長　遠山貴洋　馬場隆史　浦壁　裕　松本　琢
・ＳＧＨ推進委員会
　委員長　遠山貴洋　菅井亮佑　星名千夏　丸山実花　青山慎吾　小林高志　石野比羽子
　丸山智恵子　渡辺篤　　他　全教職員

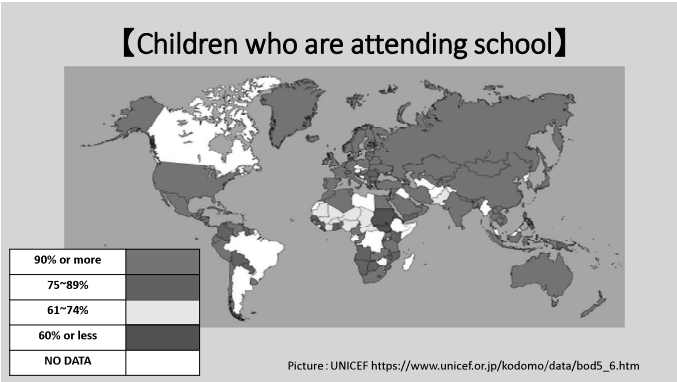
6　教員対象アンケート

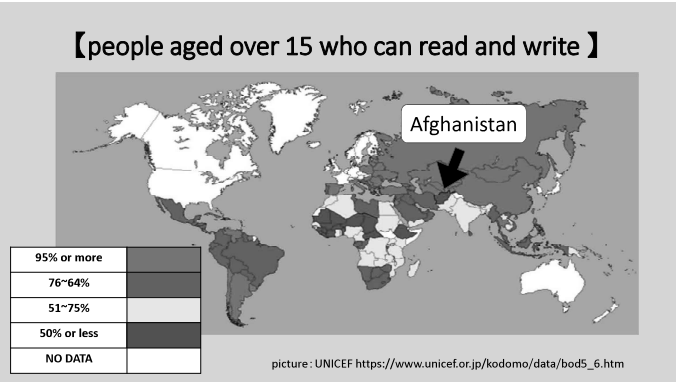
	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	思わない	わからない
1　SGH事業の趣旨・内容を十分に理解している。	25%	75%	0%	0%	0%
2　SGH事業の業務について十分に関わっている。	17%	67%	17%	0%	0%
3　SGH事業によって学校全体の雰囲気に変化があった。	25%	67%	8%	0%	0%
4　SGH事業に係る教師の多忙が改善された。	0%	8%	33%	50%	8%
5　SGH事業によって教科授業の内容・方法に変化が生じた。	8%	58%	17%	17%	0%
6　SGH事業によって教育観の変化が生じた。	17%	67%	0%	17%	0%
7　本校のSGHの取組は生徒の論理的思考力の向上に効果がある。	25%	50%	25%	0%	0%
8　本校のSGHの取組は生徒の分析的思考力の向上に効果がある。	25%	58%	17%	0%	0%
9　本校のSGHの取組は生徒の創造的思考力の向上に効果がある。	33%	50%	17%	0%	0%
10　本校のSGHの取組によって生徒が地域への愛着と誇りを持った。	25%	58%	17%	0%	0%
11　本校のSGHの取組によって生徒がグローバル課題に取り組む姿勢が高まった。	25%	58%	17%	0%	0%
12　本校のSGHの取組によって生徒の英語によるコミュニケーション能力は高まった。	50%	33%	17%	0%	0%
13　本校のSGHの取組によって生徒の諸活動への意欲が高まった。	33%	42%	25%	0%	0%
14　本校のSGHの取組に係る生徒の多忙が改善された。	0%	8%	58%	33%	0%
15　本校のSGHの取組によって生徒の教科への学習意欲が高まった。	17%	25%	50%	8%	0%

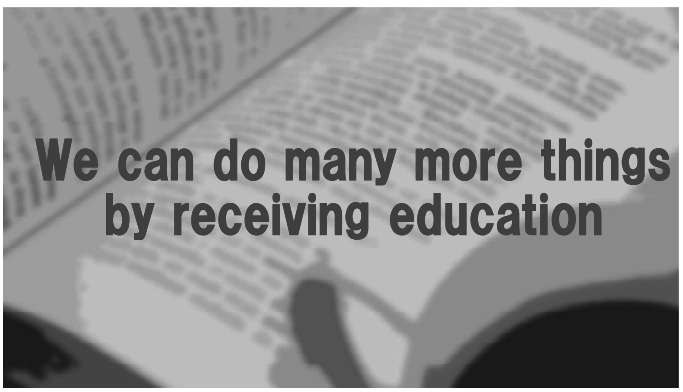
生　徒　成　果　物

1　KJ-CTプレゼンテーション









I want to take action for the people

Not being able to read or write prevents children from getting jobs

1.Problem → 2.Data → 3.Reason → **4.Slogan** → 5.SDGs

Everyone should have right to receive education

1.Problem → 2.Data → 3.Reason → 4.Slogan → **5.SDGs**

SDGs 4 "QUALITY EDUCATION"

SDGs 10 "REDUCED INEQUALITIES"

SDGs 5 "GENDER EQUALITY"

source : United Nations Information Centre https://www.unic.or.jp/

What can we do now ?

Can not find the solution

↓

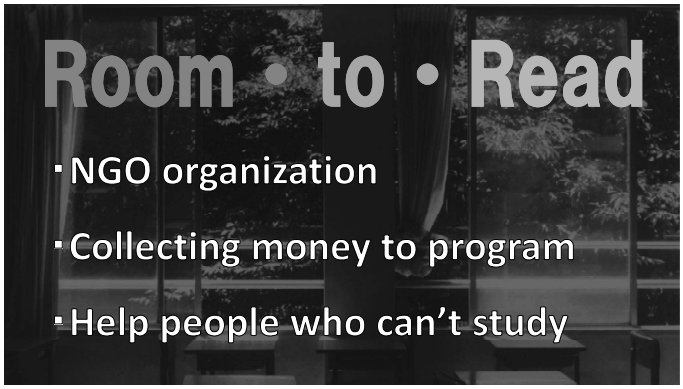
find out project and researches

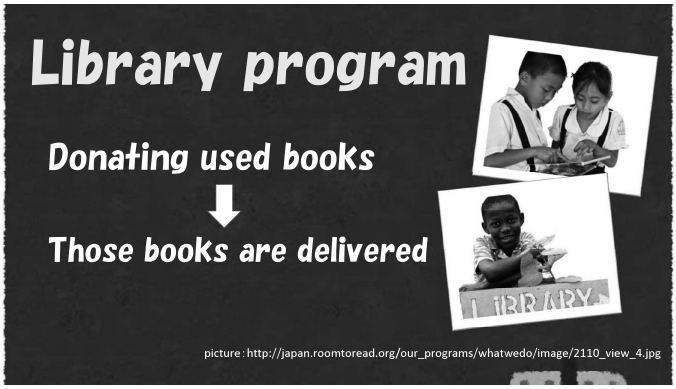
↓

We will continue this survey !!

Room to Read®

picture : 「Room to Read」 http://japan.roomtoread.org/


Room • to • Read
・NGO organization
・Collecting money to program
・Help people who can’t study


Library program
Donating used books
Those books are delivered
picture : http://japan.roomtoread.org/our_programs/whatwedo/image/2110_view_4.jpg

～Thank you
What can we do now ?
for listening～

ℝepair

JK of KJ

Ikarashi Moeka　Iguchi Koyuki
Tanaka Shuta　Torigoe Chiyo

1. Present situation and identify the problem

Good point

Rice・Nature・Kindness

NOT good point

People decrease・Elderly increase

→expand vacant houses

2. Why did we choose the problem?

Reason

1 Use vacant houses well

2 Call many young people

(Karl Bengs & Associates http://www.k-bengs.com/)

Ranking of where people want to move separated from ages （2017）

	Under 20	20~30	31~40
1	Niigata	Nagano	Nagano
2	Nagano	Yamanashi	Yamanashi
3	Kochi	Hiroshima	Okayama
4	Toyama	Shizuoka	Shizuoka
5	Shizuoka	Fukuoka	Hiroshima

(https://ng-life.jp/food/21414/)

We got first at the age of teenager!

Leave away vacant houses

Decline nice landscape damages a town atmosphere

(https://imagenavi.jp/)

3. Repair and renovation

Merit

Less expensive than building new houses

・If we build new houses　33 million yen
・If we repair　2~6 million yen
・If we renovate　3~15 million yen
(1 dollar≒110 yen)

4. What SDGs can we achieve by solving the problem?

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

11 SUSTAINABLE CITIES AND COMMUNITIES

12 RESPONSIBLE CONSUMPTION AND PRODUCTION

・One of the problems in making new atmosphere
・To reuse vacant houses

(https://imacocollabo.or.jp/event/20190220/)

Lifeline○ . . . . To become Guest houses or rental
Relatively new

Lifeline× . . . . To make rest places for local people (not all)
Be able to use as a house

L (https://kinarino.jp/) R (http://tnk-ed.com/?p=1069)

5. The possible research approach or methodology

・To talk with realtor about money and inheritance

・To think about strong structures

2　魚沼学②プレゼンテーション

二地域コラボバスツアー
～愛と義の心を持ってつなげる地域～

上杉KJプロジェクト

冨澤倖之介　滝沢槙太郎　牛木由佳　黒岩芽衣　近藤もも　山田詩月

yonezawaKouJyoukan　×　KokusaiJyouhou

観光客数　空き地　交通

南魚沼市の問題

雪による問題　観光地　田舎すぎる

ここで私たちは

観光客数が少ない問題

に注目しました

≪考察≫

① 大きなイベントでないと観光客が**増えない**

② 天地人ぐらいのアクションが必要となる

③ 米沢市と南魚沼市に**似たような地域問題**があるのでは

私たちが考えた企画は

二つのローカル地域をつなげ！！
地元の高校生が案内するバスツアー

です

《企画内容》

□**20～40人**の観光客

□米沢市と南魚沼市を周りながら二地域の歴史の関係性を
地元の高校生が説明しながら**案内をする**

□費用は**南魚沼地域の企業**に協力してもらえるよう働きかけ集める
クラウドファンディングで集める

□昼食に**米沢市**と**南魚沼市**の**コラボ商品**を提供

□日帰りでなく宿泊を入れたツアー

《ターゲット》

□ 歴史を知らない地元の方々

□ ファミリー層

《アピールポイント》

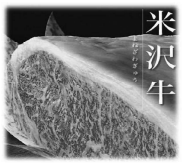
□ 地元の高校生が観光案内する

□ 高校生が考えたコラボ商品の提供

《コラボ商品》

米沢牛 × コシヒカリ ＝ 牛丼

(米沢の特産品)　(南魚沼市の特産品)



アンケートのご協力ありがとうございました

《ツアー内容》

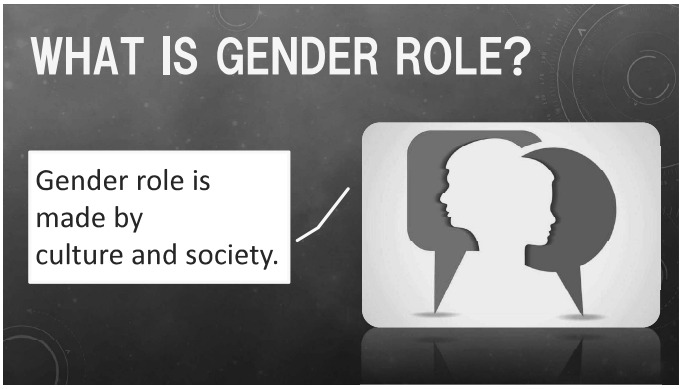
3月14日　1日目	
7:30	六日町(出発)
8:45～9:00	黒崎PA(休憩)
10:00～10:15	道の駅関川(休憩)
11:15～11:30	道の駅いいで(休憩)
12:10～	コラボ商品(牛丼)実食
13:05～13:30	上杉神社・稽照殿
13:35～14:30	米沢市上杉博物館
14:40～15:20	春日山林泉寺
15:30～16:00	上杉家御廟所
16:20	小野川温泉(泊)

3月15日　2日目	
8:30	小野川温泉
9:20～9:35	道の駅喜多の郷
10:20	会津ささえ堂
11:20	白虎隊企画記念館
11:40～12:30	鶴ヶ城
12:40～13:50	鶴ヶ城会館
14:50～15:05	阿賀野川SA
15:50～16:00	栄PA
17:00	六日町(解散)

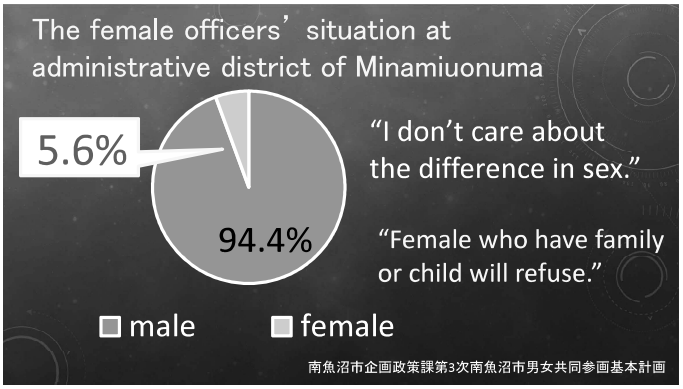
《PR》

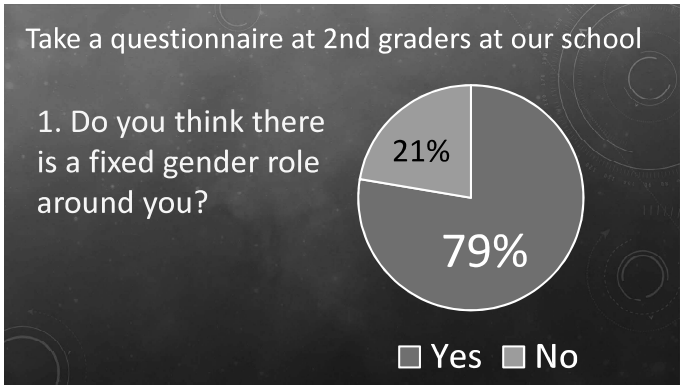
@uesugi_kj

GENDER ROLE
Kokusai Joho Senior High School
Rainbow-MATSUKO
HINATA KOJIMA
AIRI TAKIZAWA
RUNA SUZUKI
RYOKO AIZAWA
MISUZU HONDA


WHAT IS GENDER ROLE?
Gender role is made by culture and society.

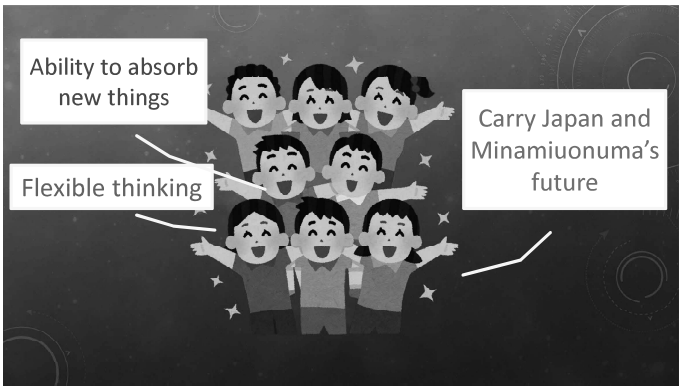
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
5 GENDER EQUALITY
11 SUSTAINABLE CITIES AND COMMUNITIES

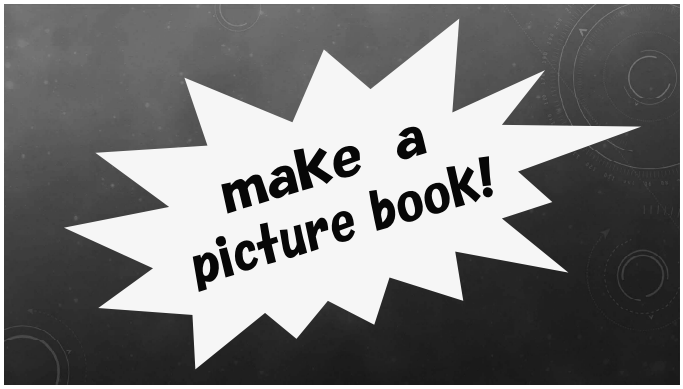

The female officers' situation at administrative district of Minamiuonuma
5.6%
94.4%
"I don't care about the difference in sex."
"Female who have family or child will refuse."
male
female
南魚沼市企画政策課第3次南魚沼市男女共同参画基本計画

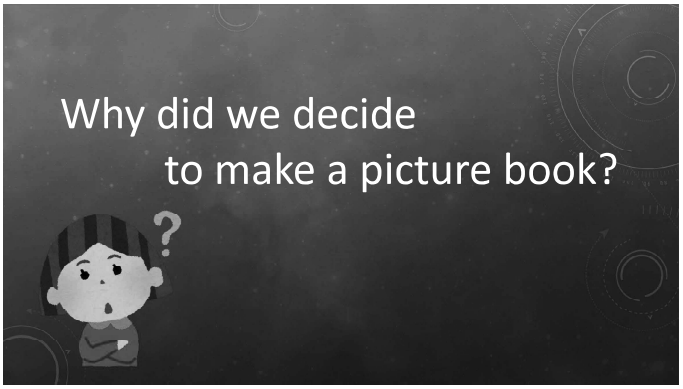

Take a questionnaire at 2nd graders at our school
1. Do you think there is a fixed gender role around you?
21%
79%
Yes
No

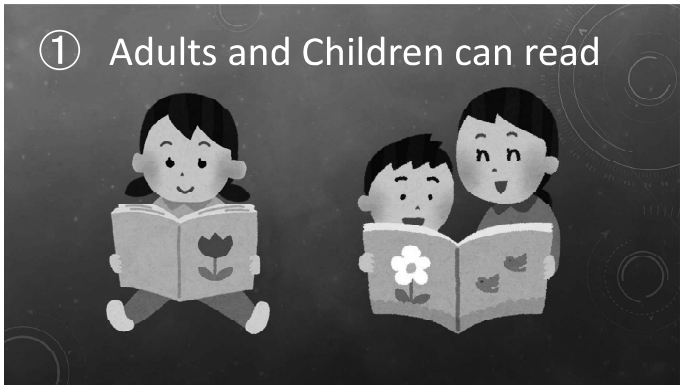
2. Have you ever been requested to behave like a girl or a boy?
51%
49%
I don't want to be controlled by their difference in sex.
I think people have narrow thinking.
Yes
No

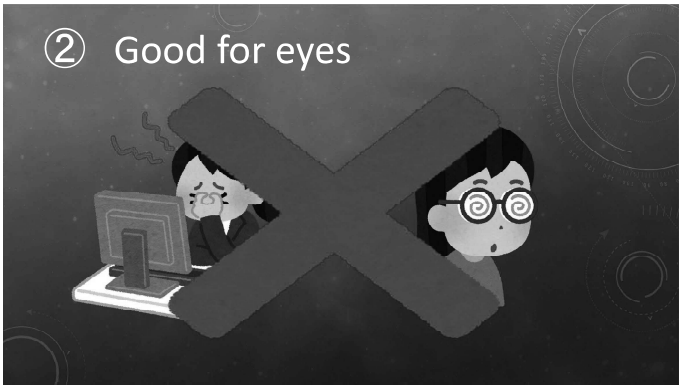
We suggest freer idea of gender role

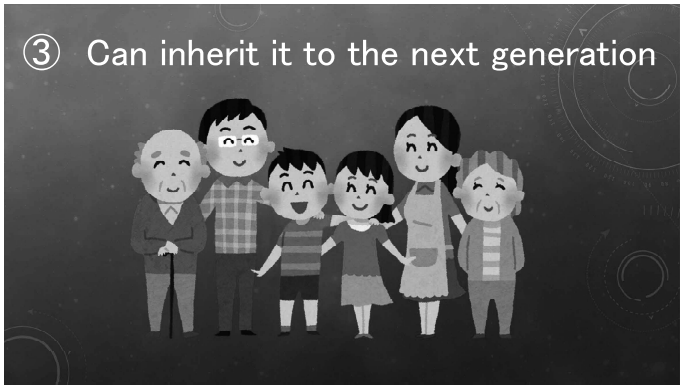

Ability to absorb new things
Flexible thinking
Carry Japan and Minamiuonuma's future

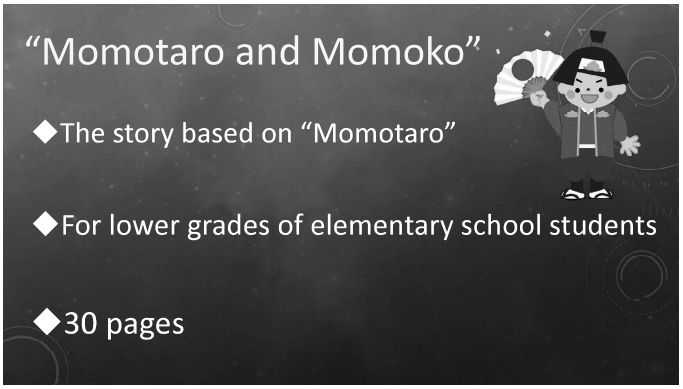

make a
picture book!

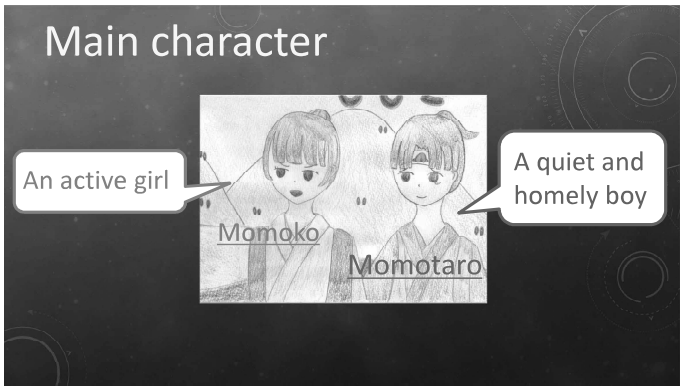

Why did we decide
to make a picture book?

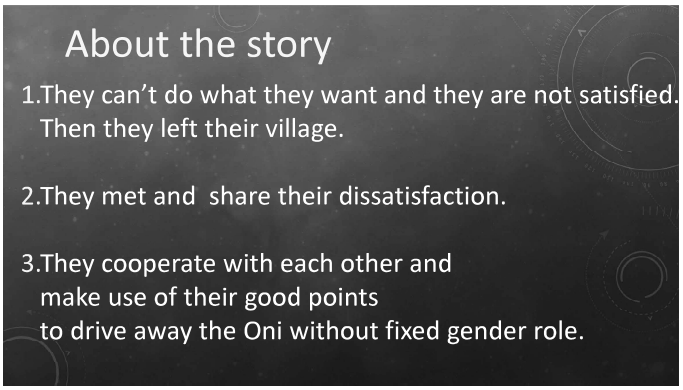

① Adults and Children can read


② Good for eyes

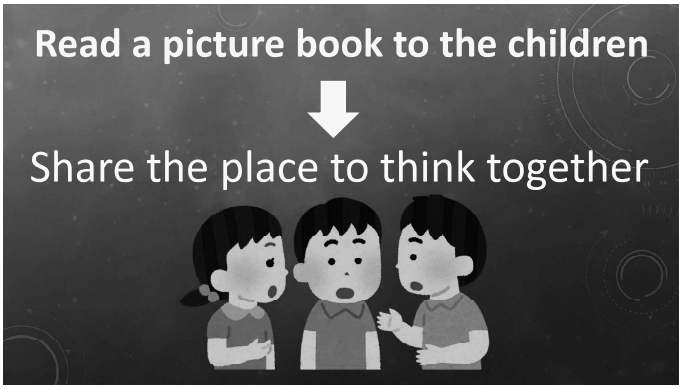

③ Can inherit it to the next generation


"Momotaro and Momoko"
◆The story based on "Momotaro"
◆For lower grades of elementary school students
◆30 pages

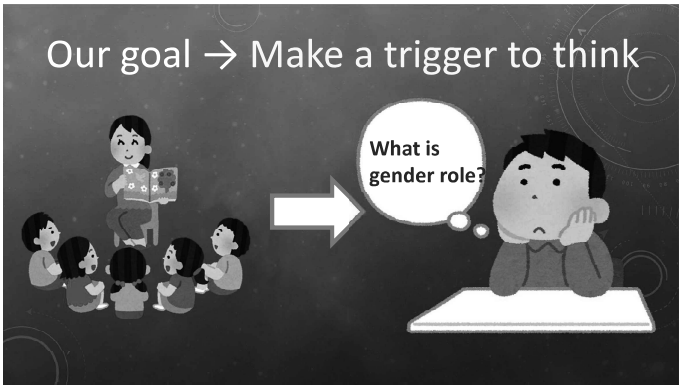

Main character
An active girl
Momoko
Momotaro
A quiet and
homely boy

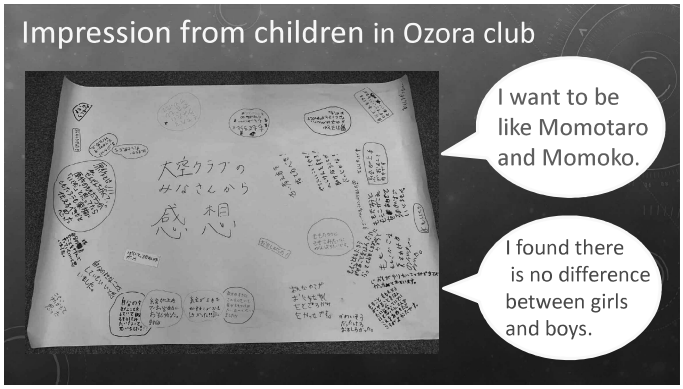

About the story
1.They can't do what they want and they are not satisfied.
Then they left their village.
2.They met and share their dissatisfaction.
3.They cooperate with each other and
make use of their good points
to drive away the Oni without fixed gender role.

ももたろうと
ももこ
日本一
ももこはとてもげんきで、
近所の子どもたちとそとであそぶことが大好きでした。


Read a picture book to the children
Share the place to think together

In Ozora club


Our goal → Make a trigger to think
What is gender role?


Impression from children in Ozora club
大空クラブの
みなさんから
感想
I want to be like Momotaro and Momoko.
I found there is no difference between girls and boys.

Our goal was achieved!!

Thank you very much!!
We were supported by many people!

Thank you !!

OMOTENASHI!!

～私たちが提供する南魚沼着地型ツアー～

Olympicnic　2年　保坂優芽　村山愛　王新平

背景

①観光の力の入れ方

予算に対する観光費割合に
大きな差　（単位：円）

	予算	観光費
長野県上田市	669億	54億（8.07%）
新潟県南魚沼市	600億	1億2,000（0.21%）

出典：http://www.city.ueda.nagano.jp/joho/shise/koho/koho/documents/koho301216.pdf
http://www.city.minamiuonuma.niigata.jp

訪日外国人都道府県認知度ランキング

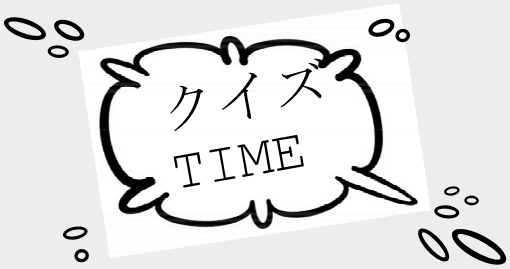
16位：長野県
・
・
・
28位：新潟県

認知度に影響

②財政難

	需要	収入	達成収入割合
新潟市	1億7,000万	1億2,000万	70.5%
長岡市	5,500万	3,400万	61.8%
南魚沼市	1,600万	700万	43.7%

出典：https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/185616.pdf



訪日外国人観光客の期待している事は何？

……

テーマパーク

四季の体感

自然・景勝地観光

ショッピング

映画・アニメの地を訪問

日本食を食べる

③生かし切れていないPRポイント

八海山

牧之通り

コシヒカリ

八海山泉ヴィレッジ

酒

④東京オリンピック

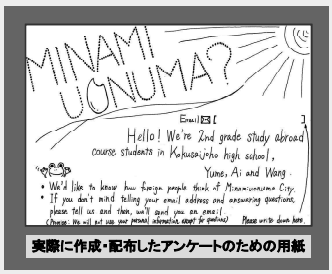
2020年訪日外国人予想

3,430万人（前年比＋7.9%）

出典：https://press.jtbcorp.jp/jp/2019/12/2020-2.html

調査

①準備



実際に作成・配布したアンケートのための用紙

IUJ生へアンケート用紙
作成・配布
⇓
アンケート送信

②結果

好きなところ　：自然（雪・山・紅葉）
旅行の際に必要なもの　：交通手段・ツアーガイド
旅行の際にしたいこと　：米・スイカの収穫

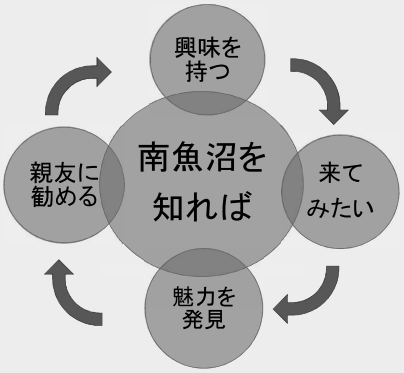
A：米

B：酒

C：自然

南魚沼の自然は他者から見ても魅力的!!

3　仮説



4　アクションプラン

テーマ：自然　二泊三日のツアープランを作成

例：
1日目：南魚沼の食を堪能
2日目：アクティビティ
3日目：ショッピング・お土産

ガイドとして**英語・中国語**通訳

ユニークな点って、、、？

地元商品のパッケージをデザイン

▼

ツアー観光客にお土産としてプレゼント

観光客の心をつかむ！！

ツアー実施に向けて

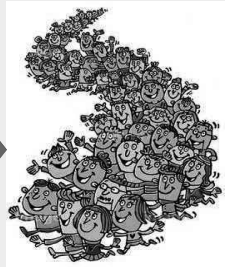
宣伝：2020年4月～

Tiktok

Facebook

Instagram

募集



協力

- 六日町観光協会　茂木様
- 共立観光　倉田様
- 雪国おくにじまん会館　関様
- 浦佐地域づくり協議会　足立様

Thank you for listening!!

Gender Role

~ use a picture book to change Minamiuonuma City ~

2717: Niigata Prefectural Kokusai Joho High School

Key words: gender role, sexual discrimination

1. Introduction

Not just the countryside like Minamiuonuma but also big cities in Japan have had fixed gender role for a long time. An idea such as “women should do all the housework and men should work for family” has affected people’s lives in the countryside like our city. This is a problem that we want to change and we hope the changes in Minamiuonuma can have a good effect on Japan as a whole.

2. Methods and Results

According to a survey, the rate of females in administration committee of Minamiuonuma City is only 9.8%. So we learn that the female leaders of Minamiuonuma City are few. And we took a questionnaire about gender role at 2nd graders at our school and we asked them two questions. One is “Do you think there is a fixed gender role around you?” and 79% of them answered “Yes” and 21% answered “No”. The other is “Have you ever been requested to behave like a girl or a boy?” and 49% answered “Yes” and 51% answered “No”. Some of them said they don’t want to be controlled by their difference in sex and people have a shortsighted thinking. From these surveys, we decided to make a picture book to suggest a new style of thinking to children who live in our city. Then we met two university students who like to draw pictures. Thanks to their advices, we finally decided the theme of our picture book.

3. Conclusion

Our picture book is based on “Momotaro” and we make two main characters in this story. One is named “Momotaro”. He is a quiet and homely boy. Another is named “Momoko”. She is an active girl who likes to play outside. The story is that they are not obsessed with their gender role, and at the end of the story they cooperate with each other to drive away the Oni. Then our picture book can give children a new style of thinking and make a good effect on the children who read our picture book. There are some advantages of making a picture book.

(1) A picture book doesn’t hurt children’s eye because it doesn’t have blue light like smartphone.

(2) Children can understand gender role easily.

We think children who read our picture book won’t have the fixed mindset about gender role, but they will have a more of free thinking about it. We hope that our picture book will go beyond Minamiuonuma. We hope it can spread around Japan and let every children get our new perspective of gender role.

References

http://wwwa.cao.go.jp/shichoson_map/?data=4&year=2018&todofuken=15

http://www.city.minamiuonuma.niigata.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/7/3jikeikaku.pdf

研　究　開　発　資　料

スーパーグローバルハイスクールの活動を通じてのグローバル人材の育成について

ＳＧＨ課　馬場　隆史

はじめに

この稿の筆者は、スーパーグローバルハイスクール（以下「ＳＧＨ」とする）の活動を５年間最初から本校で行ってきた。その中で本活動の大きな目標として、「グローバル人材」の育成があった。その中でこのグローバル人材を育んできたことは、本報告書の通りであるが、「グローバル人材」を育むために、教科として、そして、中心的な活動である「東京研修」を取り上げグローバル人材が育まれたかということを検証する。とりわけ、ここでは、グローバル人材に必要な資質の一つである「主体性」に焦点をあてることとする。

１　「グローバル人材」とは

グローバル人材とは、単に英語が話せるだけの人ではない。「グローバルな社会課題、ビジネス課題をテーマに横断的・総合的に探究的な学習を行うこと」がグローバル人材の育成と定義付けている。(1) このような人材育成をするために（結果的に）教科においてどのように実践してきたのか、また、この人材育成のためにどのような装置を作ってきたかについてその実践を述べてみる。

２　教科の実践

まず第一に教科の取り組みである。グローバルな社会課題を扱う典型として最初にあげられるのが、地理歴史・公民であろう。まず、地理についてである。この教科に関しては、「国際社会における日本の役割について」考えさせており、１９８９年以降においては、いわゆる「内なる国際化」における日本国内におけるグローバル化に対する生活や文化の変化について、教科書には触れられている。地理においては、ほとんどすべての分野について、グローバル化およびグローバル人材に必要な知識についての学習であるといっても過言ではない。 地理的分野の学習については、環境問題から貧困、第三世界について、ナショナリズムについて、紛争について、消費活動、国際協力、貿易、産業、資源などほとんどすべてに関して、グローバル人材育成の学習と結びついている。歴史については、どうだろうか。世界史では、「国際社会に主体的に生きる日本人」という観点から、その学習分野が存在している。平成３０年度の学習指導要領の改訂では、「グローバル化する国際社会を背景として人々の生活や社会，国際関係の在り方が変化したことを扱い，世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察させるという構成とすることが適当である。」とされており、グローバル化が加速する現状を考慮したものとなっている (2) 。教科の中では、「なぜ、戦争が起きたのか」、「戦争を回避するにはどうすればよいのか」、「戦争をなくすにはどうすればよいのか」いった観点から授業が展開される場合が多い。日本史についての観点はどうであろうか。日本史においては「国際社会において日本人の果たすべき役割について自覚させる」という観点から授業が展開されている。グローバル人材に必要な国際社会における日本人としてアイデンティティを形成するための教科としての位置づけがあるのでないかと

（1）　文部科学省・筑波大学付属学校教育局http://www.sghc.jp/（2020 年３月１４日アクセス）

（2）文部科学省　「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　地理歴史編」電子版　１３ページ file:///C:/Users/oser/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/7TUVF5DJ/1407073_03_2_1.pdf　（２０１９年５月２０日　アクセス）])

考える。最後に、公民についてはどうであろうか。教科としては、「現代社会」、「政治・経済」、「倫理」とあるが、「政治・経済」、「現代社会」については、「国際平和や国際協力の必要性及び国際組織の役割について認識させるとともに、国際社会における日本の果たすべき役割及び日本人の生き方」[3]について考えさせる内容となっている。内容的には、「国際平野」、「国際協力」、「人類の福祉」といったものである。地歴公民科以外の科目についてはどうであろうか。例えば、英語において、ある単元では、第二次世界大戦中のユダヤ人がアウシュビッツ収容所に収容されることを英語の授業として取り扱った。また、ある単元ではフェアトレードの仕組みについて書かれている。これらは、単に英語を学習するのではなく、「英語により内容を理解する」ことである。著者は、英語の教員とともにその理解を深めるため、世界史Ａの授業においてＮＨＫによって放映された「映像の世紀　第１０集　民族の悲劇果てしなく」を見せ、アウシュビッツ収容所がいかに非人道的であったかということを映像を通じて理解を深めさせた。や国語においてもその扱われる教材によって「グローバル化」や「グローバル課題」ついて考えさせることもある。英語や国語という教科は、言語を学ぶ教科であるため、グローバル社会やグローバル課題そのものについて考えさせることは少ない。教材とその内容によって平和について考えさせる場合が多い。近年では、カリキュラムマネジメントの観点から、いわゆる「教科横断型」による授業により、より多角的に「グローバル化」について考えさせる場合がある。

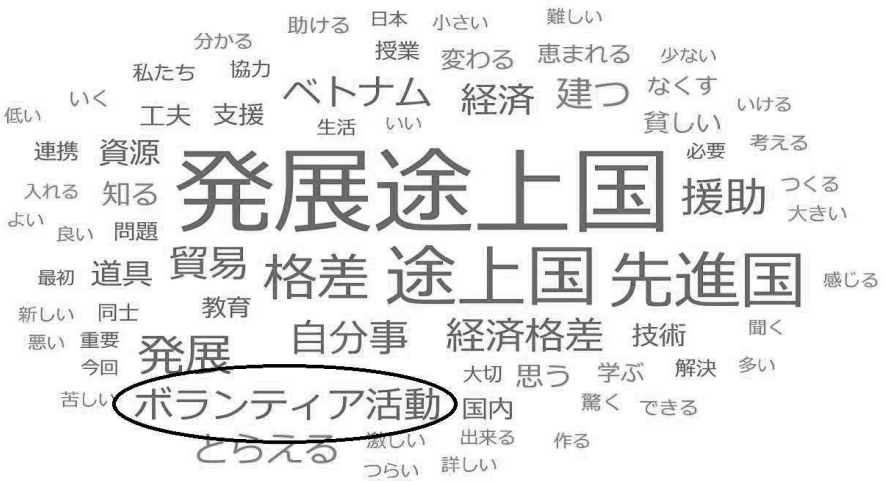
５年間の取り組みの中で直接的な単元として「南北問題」を扱い，それを理解させるために「貿易ゲーム」の実践に取り組んできた。「貿易ゲーム」とは、まず、先進国と開発途上国に分かれる。先進国のグループにはさみ、コンパス、定規と若干の紙を配布する。はさみ等の道具は生産財に相当する。開発途上国のグループには、紙のみ配布する。そして、「円」、「長方形」等を生産してもらい、銀行もしくは企業が買い取るというゲームである。先進国と開発途上国の格差を実感し、国際協力のあり方にも気づきを得、特に開発途上国のグループには、国を発展させるためにはどうすればよいかなど考えさせる体験型の実践である。[4] 授業の終わりに生徒のポートフォリオ[5] をテキストマイニングという手法で分析してみた。これによると、「先進国と開発途上国の格差は「教育」で解消するべきである」という結果がでた。[6] 本年度

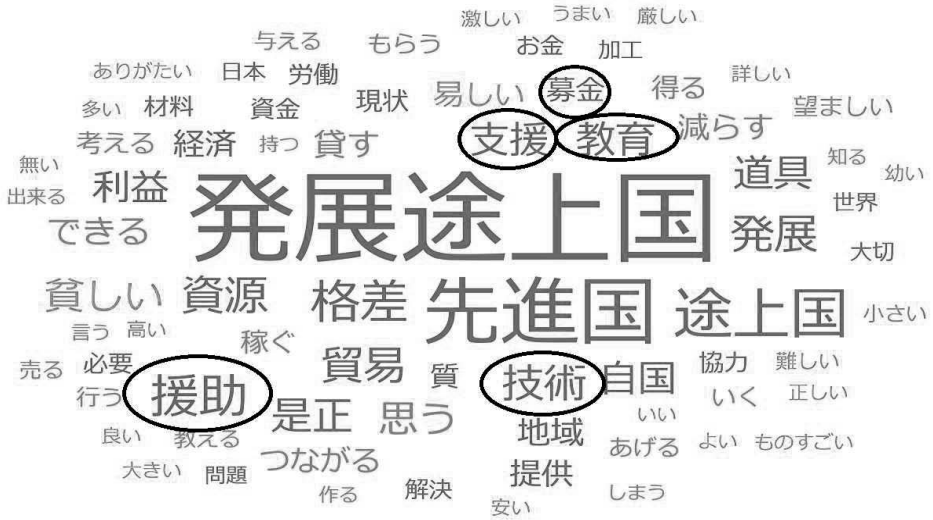
（3）文部科学省『高等学校学習指導要領（平成 11 年 3 月告示、14 年 5 月、15 年 4 月、15 年 12 月一部改正）』第三節　公民　http:/www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320221.html
（２０１９年８月１２日　アクセス）］）

（4）開発協会・神奈川県交際交流協会『新・貿易ゲーム～経済のグローバル化を考える～（２００１年版）（２００７年　改訂版）』が詳しい。筆者が授業実践で参考にしたのは
全国民主主義教育編『続手に取る公民・現代社会教材』（地歴社、２００４年）１２１～１２３頁

（5）ポートフォリオとは、「学習者の制作物、学習活動の記録や教師の指導と評価の記録などを系統的に蓄積したもの」堀哲夫『教育の本質を問う　一枚ポートフォリオ評価ＯＰＰＡ　一枚の用紙の可能性』１９０頁］）

（6）　新潟県立国際情報高等学校編　「スーパーグローバルハイスクール　研究開発実践報告書第４年次」および「スーパーグローバルハイスクール　研究開発実践報告書第３年次」を参照。





の結果は以上のようなものである。本年度特徴的なのは、「教育」の他に「技術」「援助」という単語が目立った。ＳＧＨ活動で、ＳＤＧｓについて取り組んでおり、その影響ではないかとも考えられる。さらに、ポートフォリオの分析結果から南北問題について「自分事」として捉えられるようになっていることが分かった。それは以下のポートフォリオの結果から言えることである。すなわち、自らの変容をみるために「最初の「自分」の感想・考えと比較して、変わったところ、考えが変わったところなどを書いてみよう。」というポートフォリオの結果である。本年度の特長として、はじめて「ボランティア活動」という単語が出てきた点である。ＳＧＨの活動として、本校はさまざまなボランティア的活動、主体的な活動を取り入れてきた。その結果ではないかと考察される。

３　研修活動から見る変容

１年生のＳＧＨ活動の一つに「東京研修」があげられる。この研修では、提携協力校である明治大学を訪問するとともに、グローバル企業やＯＢ・ＯＧより話を聞いたり、生徒の主体性を育むのに非常に大きな役割を果たしている活動である。この活動を通じて、グローバル人材に必要である「主体性」が養われることをここでは述べたい。

以下、「東京研修」における生徒のポートフォリオをテキストマイニング(7) したものである。

平成３０年度の１年生の東京研修のものと令和元年度の１年生のものを比較してみる。まず、研修全体のものである。それぞれ、コースや行き先が異なるので、「ＯＢによる講演会」についてのポートフォリオを比較する。令和元年度の２８期のテキストマイニングを見てみる。ここで、中心にくる単語は「学ぶ」という単語である。この結果から言えることは、「学ぶ」という自ら主体的に取り組む姿勢がこの集団には身に付いたということである。品詞別、特に動詞に注目すると「思う」という単語が１９９回、「できる」という単語が１２５回とこの結果から主体的に物事に取り組みたいというマインドを見て取ることができる。次に、平成３０年度２７期生のポートフォリオの結果を見てみたい。同じく「学ぶ」という単語を

(7)　テキストマイニングとは、文章における単語がどれだけ使われているか分析する方法である。単語が多ければ多いほど、その集団の「マインド」がその単語に依拠しているということが言える。

令和元年度２８期生の東京研修のポートフォリオ　テキストマイニング「https://textmining.userlocal.jp/」による

センターに見ることができる。このことから「自ら学ぶ」姿勢、すなわちグローバル人材に必要な主体性が育成されつつあり、その主体性育成のために、ＳＧＨ活動は、貢献していると言えると考えられる。

おわりに

５年間のＳＧＨ活動を振り返って、グローバル人材に必要なスキル、すなわち英語や論理的思考などはこの活動で身につけることができたといえる。[8] しかしまた、資質・能力である「主体性」については、上記の２つの活動を振り返って、確実に主体性が身に付いて来ていると言える。今後、この主体性がどの程度身に付いて来ているかと言うことを分析する必要があるが、ここでは、ＳＧＨ活動が主体性を育んできたという結論をもってこの稿を終わりたい。

(8)　実用英語検定の数などからそのようなことが言える。また、生徒のアンケート等から論理的思考については、言えると考える。詳しくは、各年の本校のＳＧＨ報告書を参照されたい。

学ぶ青春　意気高く

発行日　令和２年３月31日
発行者　新潟県立国際情報高等学校
〒949-7302 新潟県南魚沼市浦佐5664番地1
TEL.025-777-5355　FAX.025-777-5357